

---

# 災厄女王の娘～運命を宣告せし天秤～

紅雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

災厄女王の娘〜運命を宣告せし天秤〜

### 【Nコード】

N3441W

### 【作者名】

紅雷

### 【あらすじ】

これは「もしネギがナギ似ではなくアリカ似の女の子だったのなら」というIFもしもしの設定を軸に様々な形で『魔法先生ネギま!』を読者と共に再構成する物語である。投票結果次第ではありえない展開が続々繰り広げられ、原作とは違うエンディングが君を待ち受ける!〜この小説は壮大な龍宮いじめと生き活きせつちゃん、ブラコンネギとボクっ娘明日菜その他諸々の提供でお送りいたします〜

## 予告編／物語の解説／（前書き）

新ギレンの野望をやっつけていて思いついたネタです。

ネギが原作ではナギ似ということとで英雄の息子だからとレッテルを張られていましたが、もしアリカ似の女の子ならどういった感じになるのかと考えました。

そして原作通り進めるのもどうかと思ったので新ギレンの野望にあつたもしものシステムを利用しストーリーを進めたいと思います。

## 予告編く物語の解説く

これは一人の子供の誕生と共に変わりゆく世界の行方を記録した物語だ。心して読んでほしい。

物語の中心となる子供の名は「ネギ・スプリングフィールド」・・・英雄ナギと災厄の女王アリカの実の息子ではなく、娘である。

それも母親たるアリカ・アナルキア・エンテオフユシアそっくりの容姿を持ち、生まれながらにして人生を歪められる運命にあるのだ。

英雄ナギの息子としてのレットルではなく、災厄の女王アリカのレットルを背負い生きる彼女に果たして救いはあるのだろうか？

・・・それは君達を選択次第で書き換えられていく。

例えばこのような展開があるとしよう。

『もしも・・・造物主にネギに対する慈悲があったのなら』

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「報告します、ナギ・スプリングフィールドとアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの間に娘が生まれた模様です」

「ほう……それで、父親似なのか？」

「いえ、実は母親似だそうで……MM元老院反アリカ一派に暗殺される恐れが大のようです」

「……ふむ。生まれもって俗物に命を奪われる運命か……  
……気に入らんな」

「……は？」

「あの男の娘であっても、我が血を引いているのには違いない。故にそれが下らん企みによってこの世から消え失せるのは我慢がならん」

「では、どういたしましょうか？」

分岐ポイント

A 『テルティウムを完全なる世界からわざと離反させ、護衛につかせる』

フェイトガールズはアリアドネー送りにする代わり、ネギの好感度・安全性向上。状況次第で更なる効果あり。

B 『紅き翼で動けそうなメンバーに情報をリークする』

ウェールズ襲撃時、タカミチが駆けつけネギ達を救出。ただし、MM元老院と同時に完全なる世界への憎しみ増大。

この時、Bを選ぶと・・・

「くそつ、なんて数だ！！これもすべてMM元老院の仕業なのか！？」

「お前らのせいで・・・お父様とお母様はああああああああああああ！！！！！！！！」

激情態のネギが元老院・完全なる世界に猛威を振るう！！

対して、Aを選ぶと・・・

「・・・なぜ私を助けてくれたんですか？」

「さあね？自分でもよく分からないんだ、今回の行動が自分の意思なのか命令されたからなのか・・・」

フェイトに対する好感度が上がり、ネギ×フェイトルートへ！？

さらに別の展開では・・・

『もしも・・・ナギがアリカにネギと一緒にいるように言っていた』  
『』

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「アリカ・・・ネギがお前に似た以上、アイツが色々背負っちゃまうことはわかっているだろう？」

「それはそうじゃが・・・ナギ一人だけを奴らと戦わせたくはない」  
「けどよ・・・」

分岐ポイント

A 『ナギの言葉を聞き入れ、ウエールズに残る』  
アリカの助けがないので、造物主（ゼクト体）に敗北。ラカンとアルの仮契約消失。ネギ陣営OBの弱体化。造物主（ゼクト体）VSネギの戦いへ・・・

B 『それでもナギについていく』  
ナギが造物主に乗っ取られるも、ネギの事もあってアリカは見逃してもらえぬ。フェイトがネギ陣営についているのならば戦力増量で造物主VSネギの戦いへ・・・

あくまでこれらは可能性に過ぎない。  
これから作者が提示していく選択肢に投票することで新たな可能性

が生まれていくぞ。

無限に分岐する選択肢の中でハッピーエンドを君の手で掴み取れ！！

では、次回から新訳・魔法先生ネギま！シリーズ第一作「災厄王女の娘（仮）」をお楽しみいただきたい。



予告編く物語の解説く（後書き）

さっそくアンケートだ！期限は9月3日までだ。

分岐ポイント1

『もしも・・・造物主にネギに対する慈悲があつたのなら』

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「報告します、ナギ・スプリングフィールドとアリカ・アナルキア・  
エンテオフユシアの間に娘が生まれた模様です」

「ほう・・・それで、父親似なのか？」

「いえ、実は母親似だそうで・・・MM元老院反アリカ一派に暗殺  
される恐れが大のようです」

「・・・ふむ。生まれもって俗物に命を奪われる運命か・・・  
・・・気に入らんな」

「・・・は？」

「あの男の娘であっても、我が血を引いているのには違いない。故  
にそれが下らん企みによってこの世から消え失せるのは我慢がなら  
ん」

「では、どういたしましょうか？」

## 分岐ポイント

A 『テルティウム（フェイト）を完全なる世界からわざと離反させ、護衛につかせる』

フェイトガールズはアリアドネー送りにする代わり、ネギの好感度・安全性向上。状況次第で更なる効果あり。ただし京都編では代行者が出現により完全なる世界と対立してしまう。（密命のため）

B 『紅き翼で動けそうなメンバーに情報をリークする』

ウェールズ襲撃時、タカミチが駆けつけネギ達を救出。ただし、MM元老院と同時に完全なる世界への憎しみ増大。今後の戦闘は困難になる恐れがある。

では感想にて投票を待っているぞ！！

## 第一話 離反者フェイト（前書き）

これまでのあらすじ。

ナギとアリカに娘が生まれたと知った造物主はアリカ似に生まれてしまったネギの人生を憂い、ある決断をする。その決断の答えとは・・・？

## 第一話 離反者フェイト

魔法世界某所にある『完全ある世界』のアジトにて。

「……テルティウムよ」

先程まで小型望遠鏡で辺りを眺め、フェイトから伝えられた情報について考え事をしていた造物主はふと目を望遠鏡から離し彼の瞳を見る。

「……はっ、何でしょうか主」

対するフェイトは膝をつき、傳く姿勢をとると真剣な眼差しで自らの主の言葉に耳を傾ける。

「お前には以前話したと思うがお前には1（プリームム）や2（セクンドウム）のアホとは違い、特に忠誠や目的意識を設定してはいない」

「……」

既に主からもアホ呼ばわりされているセクンドウムの事はさておき、

彼は葵の姉に助けられた後に聞いたことを思い出す。

「そこでだ・・・これはお前が受けるのも受けないのも勝手なのだが、『ネギ・スプリングフィールド』・・・あの二人の娘から目を離さないでほしい」

「・・・すると、護衛しろという事ですか？」

「そうとも言っな。・・・ただ、監視は必然としてその後の事はお前自身に任せる」

造物主の言葉にフェイトはとりあえず頷き一度押し黙ると、数分ほど思考の海に身を沈める。

その間に造物主はさらに言葉を続けた。

「最初は適当に紅き翼の連中に情報をわざと流して警戒に当たらせる事も考えた。だが、それでは将来的に元老院や我らに対する反乱分子になりかねん」

「つまり、今の内に取り込んでおいた方が得策だと・・・？」

「少し違っな、下手に取り込む必要はない。元老院の連中だけと敵対する関係であればよいのだ」

「・・・なるほど」

「監視開始のタイミングは私が判断する。もし伝えられない状況に

私が陥ればお前だけにわかる方法で何としても伝えてやるから安心するといい」

伝えられない状況、この意味が意味するところは敗北。

以前の体はナギの決死の攻撃によって失われ、フィリウスの体に憑依し造物主は今生きている。

不滅の存在故に次も誰かの体に乗っ取り生きながらえるだろうが、その相手の体がどういう状況に陥るかによって今後今まで通り動くかどうかが決まるのだ。

「……他の皆には内緒という事でよろしいのですか」

「ああ、よいぞ。……実はここだけの話だが私も少し気が変わってな、二人の娘に少し賭けてみたくなったのだ。ついては……テルティウム」

「はっ!?!」

「……別に、我らを裏切ることになってもよいからな」

「!?!……それは離反しろということですか!?!」

衝撃の言葉に驚きを隠せないフェイトは身を乗り出して造物主に近寄る。

「それはお前の勝手だ。ただし私は特にその事で咎めたりはしない」

「ですが……」

「テルティウム、私はな・・・あの男に一度倒されて己が感じ続けていた『絶望』と『永遠』について考え続けたのだ。そしてある考えに至った」

その考えとは自分以外の人間に魔法世界の運命を託すことだと。自分達は「完全なる世界」に人形達を送ることではしか世界を救えないと考えているが、この真実を伝えてまったく別の方法を編み出してしまふ存在がいるのかもしれない。候補となるのは人物こそナギとアリカの娘・・・一度だけ自分を倒した者と王族の血を持つ者の子供『ネギ・スプリングフィールド』ただ一人だ。

「・・・結局、世界が本当の形で救われれば我らの方法などどうでも良かったのだ」

「主・・・」

「おそらくこうしてお前と言葉を交わせる日もあと僅かしかない・・・だからだ、私の命令ではなく頼みを聞いてくれないだろうか？」

望遠鏡を袖にしまい込み改めて広がる景色を見つめる造物主。その姿はどこかいつもより落ち着いているように思われた。

それから数日後、再びナギとアリカの二人と戦闘になった造物主は激闘の末相討ちしナギ・スプリングフィールドの体をつ取るとアリカの決死の氷結魔法で封印され後日、麻帆良学園世界樹にてアルビレオ・イマの嚴重な監視下に置かれることになった。

ウェールズ side

まだネカネが10歳になったばかりの頃、彼女は最近預けられた1歳に満たない本当の妹のように可愛い従妹の下へ駆けていた。

「これこれネカネー！！あまり急ぎ過ぎると転ぶぞー？」

「はい！わかってますー！！」



すれ違いざまに村長のスタンプが走って急ぐネカネを注意するも、簡単に答え速度を緩めることなく彼女は進んでいく。

「お母さまに任せっきりにしたくないから急がないと!!」

鼻歌交じりにスキップしそうな勢いで自宅へと続く道を移動するネカネ。

しかし、そんな彼女の目の前に突如として魔法陣が展開され道を塞がれる。

「こ、これは・・・確か遠距離強制転移用の魔法陣!？」

覚えたての魔法の知識を総動員して事態の把握を試みつつ、何が起ころかわからないため魔法障壁を展開し万全の対策を取る。すると、転移してきたのはなんと白装束のドレスを着た金髪の女性であった。

「な、何!？」

突然の事態に一瞬混乱しクエッションマークを大量に浮かべていると、いきなり発生した魔力を感知したのかさつきすれ違ったスタンプが駆けつけて来た。

「どうしたのじゃネカネ!?」

「と、と、突然・・・女の人が・・・」

「何じゃと!?!」

一先ず怪我もまったく無事なネカネからスタンは離れると倒れ伏す金髪の女性に近寄り、見えない顔を強引に自分の方へと向けた。隠されていた素顔が明らかになり、彼の瞳に焼き付けられる。

「な、な、な・・・この方は・・・」

「知っているんですか、スタンさん・・・」

「当たり前じゃ!?!すぐに家に戻ってお主の家のものを連れて来い!?!」

震える腕で女性を楽な姿勢にするとネカネにすぐに家のものを連れてくるように促す。

乱暴な言い方ではあるが今はそれどころではないほどの事態へ陥っていた。

「何という事じゃ・・・まさかナギの奴・・・!!」

そして何故スタンが慌てているかという目の前にいる女性の正体

がなんと・・・・・・・・

村で預かっているナギの娘の母親、アリカ・アナルキア・  
エンテオフユシアその人であったのだから。

s i d e o u t

## 第一話 離反者フェイト（後書き）

ぴーん！！

選択肢 A が選択されたため、自動的にアリカの生存が確定しました。  
（母親がいないんじゃないや超歪んで育ってしまいますもん）  
今後はフェイトが物語に介入する予定です。

分岐ポイント 2 9月4日までに感想によろしくです。

『もしも・・・ネギの性格がまるで原作と違っていたら』

A 『完全にかわゆいお嬢様（気弱）』  
守られてばかりでほとんどフェイトに戦闘丸投げ。たまに戦闘参加するけどその攻撃がかわいい顔してあげつない。魔法使いスタイル。

B 『キレると若干 Fate のセイバーっぽいけど、フェイトになかなか告白できない恥ずかしがり屋』

普通に戦闘参加。幼い頃は勿論フェイト好きなのだが、色々鍛えられて精神が大人っぽくなった。でも、顔を近づけられたりすると真っ赤になってテンパるほど恥ずかしがり屋さん。魔法剣士スタイル。

## 登場人物設定〜TURN1〜（前書き）

気合で設定画を描き上げたらネギがとんでもなくなつた。

あくまで基準絵なのであなたが思い描くネギは心に秘めておいてください（笑）

## 登場人物設定〜TURN1〜

> i 3 0 2 5 4 — 3 0 0 6 <

### 中心人物

ネギ・スプリングフィールド・（エンテオフユシア）

知る人ぞ知る「ネギま」の主人公・・・だった人物。

今作ではIF設定の「もしもナギ似ではなくアリカ似であったのならば・・・」という設定で登場しているため紅と碧のオッドアイと金色の髪を持っている女の子に。

原作よりも環境がハードなので（元老院の排除対象レベル大）、暗殺される危険性が高い。

そのため、早々に命を奪われるのを憂いた造物主の計らいによりフェイトが護衛役として派遣される。

性格は基本フェイトラヴ。その他は未定。

フェイト・グローリースター（テルティウム・アーウェルンクス）

同じく知る人ぞ知るネギのライバル・・・だった人物。

今作では造物主の要請を受けて、ナギとアリカの娘であるネギを監視及び護衛することになった。

なお、フェイトガールズは全てアリアドネーに送ったので登場予定

は今のところなし。

密命で護衛をしているので完全なる世界を離反している状態。後に他のシリーズと戦う予定にある。（偽名を使っているのはこの為。姓は『栄光の星』を意味する）  
ネギに慕われ、頻繁に修行を一緒に行っている。感情面は少し原作より上昇。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア（アリス・スプリングフィールド）

「災厄の女王」という二つ名をつけられた拳句、MM元老院に処刑・  
・されかかった亡国の元女王。

ナギ達に救出された後は隠居生活を繰り返しながら完全なる世界討伐に尽力していたが、ナギが造物主に乗っ取られてしまったので王家の魔力で氷漬けにした。その直後、フェイトにウェールズに転移させられてしまった。

強力な認識障害魔法具を用いて姿を偽り「アリス・スプリングフィールド」と名乗っている。（不思議の国のアリスに肖って）

## 登場人物設定〜TURN1〜（後書き）

ネギの性格は後日決定なので詳しくは書きません。

で、フェイトはアーウェルンクスと名乗るのは危険だと思いそれらしい名前にしました。

では、次回もお楽しみください。



## 第二話 超魔法要塞ウエールズ（前書き）

マクロスか!?

最初は「解せぬアリカ」というタイトルだったんだけどね・・・やめた。

次回のタイトルは既に決まっている。題してよう・・・うわっ何をする!?

HANASE!!

## 第二話 超魔法要塞ウエールズ

アリカside

い、今起こったことをありのまま話すぞ!!

ナギと一緒に完全なる世界の残党狩りをしていたら突然、造物主ライフメイカーが乱入してきてナギと戦い始めたのじゃ。しかも、造物主の容姿はなんとナギの師匠だったファイリウス・ゼクトのものだったのじゃ。

通りでナギが必死に追っていると思っただらそういう理由があったのか………と感心しているのも束の間、私自身も造物主の使徒達と戦うことになった。

しばらくお互い長らく戦っているとナギの奴が以前の時と同じく造物主を押し始め、優勢に事を運んでいった。だがしかし、造物主に止めを刺したその瞬間に異変は……悲劇は起こってしまったのじゃ。

……なんと、戦いに勝利したはずのナギが突如として苦しみ始めたのだ。

原因はおそらくゼクトの体を持っていたことからナギの体に憑依しようとしているからだろう。勿論私はナギを救うべくあらゆる手を

尽くし二人を引き剥がそうとした。・・・が、努力空しくナギの容体は一向に変わらなかった。

故に私はナギの「俺ごと造物主を封印しろ、早く!!」という言葉に従い愛する者をこの手で氷漬けにし封印することにした。そして同時にアルビレオが提案した麻帆良学園にある旧オステイアに繋がるゲートへと転移させ、鉄壁の要塞の中で監視できるようにした。

・・・今思えば、ナギはこうなることを予想して麻帆良学園に事前  
に連絡を取っていたのだろう。(途中でアルビレオ・イマから聞いた)

苦渋の作戦は何とか成功し造物主の使徒たちの度肝を抜いてやった  
が安心したのも束の間、使徒の一人・・・確かテルティウムと言っ  
たか、そやつに私はいきなり強制転移魔法を発動されて戦いの場所  
から遙か遠くへと飛ばされてしまった。

それで、目が覚めるとそこは・・・一人の赤ん坊が小型のベッドで  
寝かされている部屋だったのじゃ!!

「ど・・・どついついことじゃ、こじは・・・」

誰かの家の中だということはずぐにでも理解することはできたが、  
問題は一体誰の家の中なのかという事だ。

そもそも一緒に部屋にいるのが赤ん坊だけとはあまりにも奇妙な状  
況すぎる。仕方がないのでこの家の住人には失礼だが軽く探索させ  
てもらったことにした。

「・・・外はほとんど民家じゃな」

窓から垣間見えるのは木造建築の家ばかり。

いかにも田舎という感じでどこか不気味に静かだった。

「戸は・・・内側からは開けられんのか」

ご丁寧に可愛らしい字で「時間が来るまで外側以外からは開きません！！ごめんなさい！！」とドアノブに掛けられたパネルにそう書かれている。・・・この分だと自分に危害が加えられる可能性はおそらくないだろう。

さて、問題は

さつきから気になりつつも最後に調べると

決めていた、部屋の中で異常な程の魔力を感じさせる赤ん坊だけだ。

何故自分と一緒に部屋に閉じ込められているのか当初疑問に思っていたが、他の箇所を調べているうちに状況が少しずつ読めてきていた。

私の予想は多分確実にあっているだろう・・・・・・近寄ればすぐにもわかる。だから、恐る恐る怖がるようにして一歩また一歩近づいて行き木製の赤ちゃんベッドに掘られた名前を自らの目に焼き付けた。

「…………やはりな」

安らかに眠っていた赤ん坊は自分が愛する男との間に出来た最愛の娘、ネギであった。

彼女の存在が自身の居場所を特定してくれたおかげでアリカは胸を撫で下ろし、愛くるしい笑顔で眠るネギの頭を優しく撫でた。

「ここは……ナギの故郷、イギリスのウェールズか……………」

「…………ああ、その通りじゃアリカ様」

タイミングを見計らったかのように現れたのは村長を務める老人スタン。

いつも被っていたトンガリ帽子を片手にアリカに語りかけた。

「ネギの従姉にあたるネカネがな、帰り道に突然転移し現れたアリカ様の事を家の者に知らせ運んだのじゃ」

「ご老人は……ナギの……………」

「ワシは昔、あのバカに手を焼かされたただの村長……スタンじやよ」

懐かしむような目でアリカの隣に並ぶと彼はネギの寝顔を見つめる。その姿はまるで孫を溺愛する祖父の如く感じられた。

「……………誠に申し訳がないのじやが、状況把握のためにアリカ様の記憶を読ませていただきました」

「!!!……………まあ、仕方がない事じやな。突然現れたら何事かと気になるじやろうし」

当然の事とはいえスタンは事の事情を理解していた。

いちいち説明するよりかは遙かにマシなので特にアリカは咎めはしなかった。

「まったくナギの奴め、無茶しよって……………」

「すまぬ……………私が油断さえしていなければこうなることはなかったはずじや。不甲斐ない私の責任じや」

「いえいえ、アリカ様は何も悪くありません。悪いのは全て……………  
……………」

ナギを残党狩りの戦いに行かせないで止めていればこんな結末を迎えることはなかったと、スタンはやるせない気持ちを露わにする。大人の威厳か涙は一つも零さずにじつと後悔の痛みに耐えていた。

「スタン……」

「……お見苦しいところをお見せしてしまいましたな、ハツハツハ。ところで話は変わりますのじゃが、アリカ様がお眠りの間に村の有志を集めて会合を開かせていただきました」

「議題は……今後の私に対する扱いについてじゃろ？」

「ええ……実はその事なのですがな」

「

side out

スタン side

アリカが目覚める数時間前、村の集会所では緊急の会合が催されていた。

「・・・村長、緊急事態と聞いて我々は集まったわけなのですが肝心の理由をそろそろ説明していただけにないでしょうか？」

「これこれ、そう急かすな・・・まだ、ライラ君が戻ってきておらんじゃろつに」

ネカネの父親であるライラが主になって呼集をかけているため、どうしても彼が戻らないと話を進めることができない状況が続いていた。

「ああ、彼ならさつきメルディアナの校長に連絡を取ったら合流するから待っていてくれと言っていたな・・・」

「・・・それ、どのくらい前だ？」

「15分ほど前だが、何か？」

「遅れてすまない！！なかなか事態を説明するのが遅れてしまって・・・」

そうこうしている内にライラは合流し、会合の席には呼びかけで集まった有志の顔ぶれがあった。

スタンは一人一人の顔を流し見し深く息をすると、問題の案件を皆に提示した。



「先の……ナギの奴の娘の件は皆知っているかと思うが、この件に先程進展があった」

『……………』

下手にここで口を挟んで知りたい案件を聞くのを遅らせることがないよう皆は口を閉ざす。

「ネギの母親にあたる、魔法世界ではタブー扱いの人物……つまり、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアがナギと共に完全なる世界の残党と交戦した末、我らの村に強制転移されてきた」

「……………なっ!?」「……………」

事前に知らされていたライラ以外の面々はその驚くべき事実思わず声を上げる。

「ただでさえネギがアリカ様に似て生まれ警戒が必要なのに、ここに来てアリカ様本人が来てしまったのはちと問題での……………」

「追い出す……………っていうのは流石に無理ですね。事情がどうであれあの方は王族の人間だったんですから」

「だが、具体的に対策はどうする?子供一人だけなら何とか我々で守れるだろうが……………」

「危険がありすぎるな。どうにかしなければ……」

ネギが預けられた経緯について大体の村の者達は理解している。

表向きには英雄ナギの娘だからとしているが、裏向きにはMM元老院が処刑したはずの『災厄の女王』の娘だから命を狙われる危険が高いという理由があるとはっきり隠さず説明していたのだ。(案外あっさり理解を示してくれたのは皆が子供の親だから故だった)

「そこでじゃ。ワシが兼ねてより計画していた村の要塞化をちと早めることにした」

「……村の……」

「……要塞化!?」

ライラが立ち上がり、用意しておいた資料を皆に配布する。

数十枚にもわたる資料の厚さに啞然とするもすぐに頭を切り替えて一心不乱に全員が読み進めていく。

「物見櫓に魔法の射手の巻物を利用したガトリング砲数基、魔法障壁・物理障壁の強化、任意で発動するトラップなどですか……」

「外敵は人間だけではない……空から来る召喚魔もじゃ。故に対地・対空戦に備えワシらはこの村を変えていかなければならない」

残された時間はあとのくらいなのかもわからない状況で自分たち  
が出来ることをしなければ、大切な者を失い後悔しても後悔しきれ  
ない結末を迎えてしまう。

「・・・どうか、ナギがない今あの二人を守るために力を貸して  
くれんか？」

何があっても守ると約束したスタンは村長として一人の人間として  
頭を下げ続けた。

s i d e o u t

アリカ s i d e

「と、言った感じじゃ」

てつきり災厄の女王だから拒絶されると思ったのだが・・・ナギの奴、手をまわし尽くしていたのじゃな。おかげで一先ずは安心できるよつで良かったが。

「諜報活動は流石にキツイじゃろうから、やはり防衛を重視して要塞化に徹底するのが得策じゃな」

処刑を回避されて後々になって調べてみたが、MM元老院には反アリカ派なる存在がいるらしい。

そいつらの計画しそうなことは名前の通り私関連を狙うことだ。それだけでもわかっていただけ遙かにマシか・・・

「私が直々に戦うわけにもいかぬし・・・むう」

この村の戦力がどれほどかはまだわからないがナギに匹敵する人間がいる確率は低いと考えていいだろう。(ナギはバグキャラじゃからな)

・・・誰か、頼れる人間がないものか？

この願いに答えるが如く4年後、あの少年は現れおった。

s i d e o u t

## 第二話 超魔法要塞ウェールズ（後書き）

ぴこーん！！

ウェールズの魔改造がレビ・・・ゲフン、ゲフン。  
スタン將軍の号令により発動された。

味方増援に離反者が期待できず、アリカ！！

分岐ポイント3 9月5日まで

『ネギは魔法先生？魔法生徒？』（分岐解説に暴走展開あり）

A 『魔法先生』

フェイトが副担任になり、彼女をサポート。原作通りの行動力が期待できる。

ただし、子供の姿はお勧めできないと助言され10代前半ぐらい（明日菜たちぐらいの年齢に）で行く。その代わり幼少期にフェイネギの知られざる展開が期待できそうだよ？おにーさま！！おかーさま！！おねーさま！！

B 『魔法生徒』

某女装編入少年ゲームの如く、アレな展開に。お姉さまーとか行く可能性があるので私はお勧めできない。フェイトが3-Aのハイレムにするのは私的には認められないんだ！！（そもそもキャラに合わねえ）

次回の更新をお楽しみに！！

第三話 よう・よ襲撃犯VS漢達のウェールズfeat・フエイト(前書き)

タイトルがおかしい。

何でこうなった？何でスタンさんがあんな風になった？

まったくわけがわからないよ。



第三話 よう、よ襲撃犯VS漢達のウェールズfeat・フエイト

アリカside

> i 3 0 3 6 9 | 3 0 0 6 <

「おかーさま!！」

ネギとアリカがウェールズの村に住まうことになってから早4年。特に襲撃を受けることなく平和な毎日を送っていた二人はスプリングフィールド家近くに建てられた新しい住まいから外に出て、日に日に寒くなりつつもまだ夏の名残を残す草原に遊びに来ていた。

赤ん坊だったネギも言葉を話せるようになってとしきりに無邪気にアリカへと甘え抱きつくようになった。そして今現在も赤いリボンを揺らしながら走った末、足に抱きついた。

「これこれ、ネギ……」

父親がいない分、出来るだけ甘えさせてやろうと考えていたアリカは抵抗することもなくネギを受け入れ同じ色の髪を優しく撫でる。

「ねー、おかーさま!！」

「ん？何じゃネギ？」

「ネカネおねーさまとアンナねーさまがかよっているまほーがつこうに、わたしもらいねんになったら行くんだよね？」

「・・・あー、そういえばそうじゃったな」

来年になれば魔法学校に入学可能な年齢になりメルディアナ魔法学校に通うことができるのだが、ネギは普通の子と違って些か問題があった。

ウェールズ出身者の子供とは何とか仲良くなれるだろうが、それ以外の事情を知らない子供や大人達からいらぬ迫害を受ける可能性があり、万が一の場合には命の危機に晒されるかもしれないのだ。校長には嚴重に対応してほしいと要請してはあるのである程度は大丈夫だろうが不安要素は尽きない。

だから、人差し指を上に向けアリカはネギに諭すよう語りかけた。

「ネギよ・・・今の内から言っておくことにするが、父や母の事について何を言われようとも言い返してはならんぞ？」

「おとーさまやおかーさまのこと、ほんとうにわかってないひとにかかわらなければいいんだね？」

「そうじゃ。そんなことをいう奴の話など聞かずに勉学に励むのじゃ」

「はい おかーさま！」

・・・素直で元気なネギは言いつけをよく守ってくれて本当に助かる。

危険な場所へは行かないよう言いつければ軽く理由を聞いて納得し立ち寄らないようにしたり、寝る時間帯と起きる時間帯を定めて生活のリズムについて教えればその通りに就寝と起床をしたり、女性は身だしなみが大事だと言って肌や服に気を使ってあげればきちんと「よやったよ」と報告しに来てくれたりするから、変に気を使わなくて済む。

素直すぎるのも良くないのかもしれないが、自分的にはとてもありがたかった。

「これで私やナギがいなかったらどうなっていたことやら・・・」

スタンやネカネ達がどうにかして教育してくれるだろうが、実の親である母親と親戚または血の繋がりのない保護者の間には決定的愛情の差があるため今のように育ってくれる保証はどこにもない。

だから、まったく偶然なのか必然なのかわからないがウェールズに強制転移させられたのは正解だったのかもしれない。

「・・・む、もう日が暮れてきたか」

ネギを抱きながら物思いに耽っていたら空の一部がオレンジ色へと徐々に変化し始めていた。

そろそろおながが空いてきた頃なので今晚のメニューのシチューの調理を開始しようとネギを一度抱きついている状態から離し左手に手を繋がせる。そして帰路へと着こうとしたその時、何故かネギはふと立ち止まってしまった。

「……どうしたのじゃ、ネギ？」

ネギの背の高さまでしゃがみ込み何事かと問うと、右側の空を指さして呟いた。

「おそらをなにかとんでるよ？……それにとりさんじゃないみたい」

「……何？」

夕方だからカラスぐらいいるだろうと最初は思ったが、鳥ではないという言葉に疑問を感じ目を凝らしてみる。すると、遙か離れた空には

無数の悪魔達がいた。

s i d e o u t

スタン s i d e

『敵襲——————！！悪魔達が攻めてきたぞ——————  
——————！！』

アリカとネギが悪魔達の存在に気付いたその頃、ほぼ時を同じくして村の男達は異変に気が付いて動いていた。

「子供や戦えない女は集会所の地下だ！！急げ、時間がない！！」

「治療術師と補給要員は至急配置につくんだ！！下手すりゃ長期戦だぞ！！」

「敵の数はおそらく300〜500体以上！！・・・くそ、奴ら本気でやりに来やがったか！！」

「ネギちゃんとアリカ様の所在を早く把握せんか！！」

慌ただしくもテキパキと行動し、男達は村の鉄壁の守りを構築していく。

ある者は物見櫓に設置された魔法の射手のガトリング砲とスナイパーライフルなどを用いて早期迎撃を開始し、ある者は随時最新の情報を全員に伝えられるよう機材をまとめ上げ、ある者はまだ逃げている途中の村人の誘導を行っていた。

そんな中、ネカネの父ライラはスタンにある情報を耳打ちする。

「村長・・・実は」

「・・・何っ、それは本当なのか！？」

「ええ、念のためにゲートポート周辺にトラップを設置しておいたのが功を奏したようで・・・」

「・・・ならば、至急足が速い者を編成し向かうのじゃ。この戦いは何も撃退し二人を守ることだけが目的ではないからのう」

「わかりました、動ける数人に声をかけ実行させます」

「くれぐれも気を付けるのじゃぞ?」

話し終わるとすぐさまライラは集会所から駆け出し退室する。それを合図に頃合いと判断したスタンは自らも出撃し、防衛に加わることにした。

「魔法の射手、光の77矢!!」

空だけではなく地上から来る悪魔に対しても一切躊躇うことなく有効属性の光属性の攻撃を浴びせかける。一瞬のうちに5体ほど倒した彼は更なる追撃を開始した。

「老いぼれだと舐めていると痛い目に遭うぞ!!」

戦いの旋律で全身を強化し地を蹴ると、カンフーアクションと見間違うかのような動きで飛び蹴りを何発も悪魔の顔面に喰らわせる。そして仕舞いには零距离で

「紅き焰!!」

をブチかまし、こんがりと焼け倒れ伏す悪魔を出来上がらせた。

「ナギとの約束がある限り、ワシは負けん!!どこからでもかかって来い!!」

スタンは伊達や酔狂で村長をやっているわけではなかったのだ。

side out

アリカside

「はぁ・・・はぁ・・・!!」

まさか、今日元老院の連中が攻めてくるとな・・・しかも、悪魔を



大量に召喚し私とネギを殺しに来るとは大胆すぎるのにも程があるぞ！

「急いで集会所に向かわなければ……」

ネギをとにかく避難させなければならぬ。

こんなところで理不尽にも殺されてしまうなんて絶対何があっても認めるものか。

体に乗っ取られたというのにナギとの契約が途切れていないことが幸いしてアーティファクトを使い、下級の悪魔を薙ぎ払いつつ向かってはいるがこれだけの悪魔の数ならば多分伯爵級ぐらいのクラスの悪魔がいたとしてもおかしくはない。出会いでもしたら即逃げなければ身の安全は見込めない。

そう思っていた矢先だった。

「これはこれは……噂の女王様と王女様ではないですか。どちらへ行かれるおつもりで？」

「貴様……」

よりもよって出会いたくもない伯爵クラスの悪魔が目の前に現れおった。

私一人なら倒せるだろうが生憎ネギが一緒だからそもそも戦うという選択肢はない。しかし、道を塞いでいる悪魔をどうにかしなければ村へ向かう事すら叶わない。

「・・・おかしさまあ」

「大丈夫じゃ、安心せい・・・だから下がっておれ」

一人剣を構え立ち向かおうとするアリカ。

彼女は悪魔ヘルマンが放つ悪魔パンチに対し堂々と突撃する。

「ほほう・・・流石は王族の方、武術の方は朝飯前でしたか」

「ほざけ下郎・・・」

こちらには命を懸けてでも守らなければならぬ我が娘がいるのだ。下らん理由で絡んでくる馬鹿者といつまでも剣と拳を交えているつもりはない。・・・だというのに、背後で突然悲鳴が上がった。

「いやあああああああ！こないで！！」

急いで振り向けばスライム状の3体の使い魔がネギに迫っていた。

「この卑怯者があああああああああああああああああああああ  
あ！！！！！」

鬼気迫る表情でネギに襲いかかるスライムに一撃を加え、その勢いでネギを抱きしめる。  
幸いにもまだ怪我は負っていなかったようで安心し一先ず胸を撫で下ろす。

が、空気も読めず背後ではヘルマンが大きく口を開けて永久石化光線を放とうとしていた。

「……あ……あ……あ」

全てがスローモーションに感じられる。

せっかく助かった命だというのに、助けられた命だというのに私はここで全てを終わらせてしまうのか？ 愛する者を二度も守れず民も救えず国も救えず……私は死ぬのか？

認めん、そんなことは………絶対に認めんぞ!!!!!!

次の瞬間。

「雷の暴風！！」

「石化の邪眼！！」

二つの光の渦が私達を挟んで通り過ぎるように悪魔へと叩き込まれた。

「い、今の声は………ナギ？」

そんなバカな筈はない。

確かに私自身の手で氷漬けにし封印したのだから絶対に動けないはずだ。それにもう一人の声はナギが乗っ取られた戦いで聞いた声で、そして私を

ウエールズに飛ばした声だ！！

「おい、なんでお前がここに居やがる！？」

「何でって……君と同化している主に君の家族を守るよう頼まれたからだけど？」

「はあ！？何だそれ、俺聞いてないよ！？」

「後で詳しく聞けばいいんじゃないかな、君の意思が残っている間に」

「おめーが今話せや！！それが一番手っ取り早いだろ！！」

.....。

ナギはともかく完全なる世界の使徒テルティウムは今も味方してくれるらしい。理由の詳細は後で聞くとして、ナギ・・・ネギがおろしかけているからどうにかしてくれ。

「.....おとーさま、なの?」

「.....ああ、そうだ。悪いなネギ、今まで何もしてやれなくてよ  
(.....アリカ、こりゃどういうことだ『おとーさま』って)「

「(私に聞くな・・・ネギが勝手にそう呼び始めたのじゃからな)「  
「.....こんなモノしかあげられないが大事に使ってくれ、  
俺の形見だぞ?」

こら、まだ幼い子供に大人のお前だから持てる杖を持たせるな。  
私が見つから今父親として出来ることをせんか、馬鹿者が!!(ギ  
ロツ!!)

瞳に込めたプレッシャーのかいあってか、ナギはネギを高く抱きし  
めて頭を何度も撫でていた。  
.....それでいい、それで。

「もう時間だ.....。父親としてお前に何もしてやれなかった俺が



（ウェールズ襲撃事件簡易報告）

夕方に突如として出現した召喚魔、それも悪魔達の狙いはやはりアリカ様とその娘ネギ・スプリングフィールドであった。

幸いにも軽傷者が多数という結果で済んだがアリカ様の報告によれば伯爵級の悪魔の存在が確認されたという。（既に倒されたそう  
で被害は特になし）

なお、今回の事件の首謀者についてだが我々が予想していた通りであった。なぜそのような事が言えるかという点詳しくは別紙にて記載しているが、ここで簡潔の述べておくことにしよう。

ライラ・スプリングフィールド氏が編成したトラップ班のメンバーが、襲撃中にゲートポート周辺に仕掛けてあった罠が発動したことにいち早く気づきすぐさま現場に急行したのだ。するとそこには暴徒鎮圧用ガス等で戦闘不能状態の（俗にいう気絶状態の）某政府構成員が倒れていた。

この件に対し我らは然るべき対応を行うことをここに記す。（本国への通達は考えていない）

第三話 よう、よ襲撃犯VS漢達のウェールズfeat・フエイト（後書き）

びんぽんぱんぽーん！！

MM元老院終了のお知らせ。

証拠が残ってさあ大変、この後どうなる？

それはさておき、次回のタイトル当てクイズ！！

次回のタイトルになる予定なのはどれ？期限は未定。

A 『幼女はお兄さまに恋してる』

B 『僕の護衛対象がこんなにブラコンのわけがない』

C 『FATE&NEGII』

D 『おにーさまキター！』

E 『安心のタカミチ』

さあ、どれだ！？



第四話 『幼女はお兄さまに恋してる』・・・だって？僕の護衛対象がそんな

予想を上回るうとした結果がこれだよ！！

バイトが忙しすぎて書くに書けなかったよ。

それにイラストがようわからん。レイヤーとはなんぞや？

第四話 『幼女はお兄さまに恋してる』・・・だって？僕の護衛対象がそんな

アリカside

「何い、造物主がネギの事を気にかけていただと!？」

先のウェールズ襲撃後、損害を受けた村のあちこちを皆で手分けして修復し何とか元の姿へと戻し終わった私達は念の為に護衛を配置してもらいながら自宅にて事の詳細をテルティウム・・・いや、フェイトから（本人は『フェイト・グローリースター』と呼んではしいと言ったのでフェイトと呼ぶことにした）詳しく聞いていた。

「・・・信じられないかもしれないけど、紛れもない事実だよ。僕自身最初に聞いた時は啞然としてしまっただくらいだからね」

「しかし、何故宿敵である者の娘にわざわざ気をかける必要がある？普通は放っておくのがセオリーではないのか？」

「普通ならね・・・けど、君の娘は主にとっては一族の血を引き魔法世界を真に救える可能性を持つ人物なんだ。そんな人物を易々と元老院に殺されるなんて我慢がならなかったんだよ」

・・・魔法世界を真に救う、か。

考えてみれば造物主は「始まりの魔法使い」であり我が王族の始祖に該当する人物じゃったな。

ナギというバグキャラの血と私という王族の血が混ざれば単純な足し算で「ナギ以上のバグキャラで王族の血を引くチートっ子」になり、自分に匹敵するだろうと造物主は予想したのだろう。多分それ以前にネギが元老院の連中に殺されるのは嫌だったと思える。

また、自分が考え付かなかった世界救済方法を自分を唯一倒せることが出来た男の娘に託し思い付かさせるとは随分と思いつたことだ。・・・フェイトは差し詰めそのサポート役として派遣されてきたのじゃな。

「すると・・・フェイト、今のお主の 完全なる世界 での立ち位置は・・・」

「離反者・・・という言葉が一番しっくりくるだろうね。といっても肝心の主からは許可を貰っているんだけど」

「じゃが、他の仲間には一切話しておらんという事か・・・」

となると、 完全なる世界 は別の使徒を生み出して刺客にしてくるに違いないな。そして恐らくはフェイトとほぼ同じ容姿を持ち固有能力がまったく違う存在なのじゃろう。（まったく同じ存在を創る意味はないじゃろうし）

「僕より後のアーウェルンクスが出てくるのは必然だ。だから彼ら

が出てきた場合は僕が優先的に対処するから安心してほしい」

「・・・抵抗感というモノはないのか？」

「ないね。僕は主が君の娘に賭けたから自分も賭けてみたくなったんだ、邪魔をするなら排除するまでだよ」

キツパリとフェイトは真顔でそう言った。・・・この様子だと本気で信用しても良さそうじゃな。

しかし、何処かフェイトは本気で 完全なる世界 の連中（造物主を除く）が嫌になっていている気がしてならないのじゃが気のせいか？ 試しに尋ねてみると意外な答えが返ってきた。

「・・・嫌いだよ、本気で」

「・・・何があつたのじゃ、一体？」

「話せば長くなるけどね、あれは君達と初めて戦った時の後の出来事だった」

知られざるフェイトの空白の物語が今、語られようとしていた。

side out

フエイトside

「あの戦いの後、僕は核に異常を感じて倒れてしまったんだ。そして目を覚ますとまず視界に入ってきたのは……二人の姉妹の姿だった」

妹のルーナには未知の人物の来訪だったために警戒されてしまっていたけど、彼女の姉のリーナは僕に優しく接してくれてコーヒーをわざわざ入れてくれたんだ。味は嘘偽りなく本当に美味しく、気づかないうちに一日十数杯も飲んでしまうほどだった。

「後にわかったんだけど二人は……彼女達の村人は肌接触による強力な読心力があってね、色々と利用されてきたらしい」

「確かテオドラからそのような話を聞いた覚えがあったな……でお前の心も読まれてしまったのか？」

「いいや。僕は人形であるが故に読むことができなかつたみたいだよ」

3日ほど滞在し主の下へ戻った後、主から忠誠や目的意識の設定をしなかつたことを告げられ（同時にセクンドウムは設定のパラメータを上げ過ぎてアホになったことも）僕は自然と彼女が居れたコーヒーを見様見真似で入れてみることにした。結果は散々で凄く不味かつた。

やはり直接彼女の下へ訪れてまた飲みたい、そう思った僕は何かに誘われるように彼女の村を目指した。だが、そこで待っていたのはセクンドウムに頭部を無残に消し去られるリーナの姿だつた。

「セクンドウムはかつてから言っていた『我々が与えるのは死ではない、救済 だ』とね。・・・だけど、僕にはそうには思えなかつた」

彼が与えたのは確実に 絶望 だ。

自分と似た容姿で全てを消し去り、彼女の妹にトラウマを与えた行為は断じて 救済 ではない。 救済 とは絶望を誰にも感じさせることがない穢れ無き行為のはずだ。なのにどうして・・・

どうして



たことを玉碎覚悟で主に伝えた。

「お主も・・・本当に思い切ったことをするのじゃな・・・」

「・・・まあ、結果的に主も『私はそこまで積極的に消せなど言っていない。慢心したセクンドウムの自業自得だ』と言って許してくれたけれどね」

以来、失った彼女の事を忘れないようコーヒの研究に尽力し未だ続く紛争によって生まれた孤児を拾っては地道にコネを作っておいたアリアドネーに送った。一部の子達は僕について行きたいと言ってきたがすべて丁重に断った。

護衛の件もあったし、紛争以上の事態に彼女たちを巻き込みまたあんな悲劇を目撃するのはまっぴらご免だ。

「願わくは君の娘が　リライト　に代わる魔法世界の救済を成してくれるよう、祈るばかりだ」

フェイトの視線の先にはアリカの隣の席で無邪気に画用紙に色鉛筆でお絵かきをしているネギの姿がある。絵の内容は実にシンプルでナギとフェイトがアリカとネギをピンチから救う姿が描かれていた。

「なら、その為にも・・・ネギを必ずどんな時も守るのじゃぞ」

「わかっているよ。彼女の為なら何でもする覚悟がある」



一旦目を閉じ、再び見開いた瞳には決意の眼差しがあった。

「ねー、ねー、にーさま!..!」

突然、横から声がした。

ふと、目を右に向けると先程までお絵かきをしていたネギがクリクリした愛らしい瞳を自分に向けていた。

「.....にー.....さま?」

いきなり何故か「にーさま」と呼ばれたフェイトは驚きを隠せない。

そもそも宿敵だったサウザンドマスターの娘が自分を兄呼ばわりするようなことなんてするはずがない、きっと気のせいだ.....と思っていた矢先にネギは更なる爆弾を投下した。

「わたし、にーさまがのぞむりそつのにんげんになれるよーにがんばるー!」

「……は？」

「……え？」

「……今はそう思っていた方が楽じゃ、フェイト  
いんだよね？」

「……今はそう思っていた方が楽じゃ、フェイト」

ネギの将来に不安を隠せないフェイトとアリカであった。

side out

タカミチ side

「何だつて!?!ナギさんの娘がいる村が襲撃されただつて!?!それは本当かい、クルト!?!」

『ああ、本当だ!?!直接行って無事を確かめてきてくれ!?!』

一人の死を呼ぶメガネが病弱提督と共に知らないところで動き出し始めていた。

side out

第四話 『幼女はお兄さまに恋してる』・・・だって？僕の護衛対象がそんな

AとBを混ぜた結果がこれだよ！！あとさりげなく安心のタカミチ  
！！

そして驚きの眠さ！！今、0：09だよ！！

今回はアンケートなしだけど次回はアーティファクトのアンケート  
を取る予定だから『僕の考えたアーティファクト』がある方はどし  
どし感想に詳細を書いてくれ！！

では、次回もお楽しみに！！

**第五話 幼女相手に友達になりたい発言は死亡フラグです（前書き）**

ここのお気に入り登録件数の上昇に毎朝ビビっています。

つい先日まで20件そこそこだったのにもう80件で・・・

おかげで眠さも吹っ飛びます。

## 第五話 幼女相手に友達になりたい発言は死亡フラグです

タカミチ side

「・・・なんだこれは」

数年前に訪れて以来、NGOや学園での仕事が忙しくて立ち寄りることができなかつたウエルズの村はしばらく見ないうちに恐るべき変貌を遂げていた。

田舎らしさを醸し出していた物見櫓はもはや固定砲台と化しており、入り口の門には強力な防護結界が施されている。そしてさらに、空には常時見回り型の使い魔が徘徊していて24時間体制の村全体の監視が成されていた。

「ドネットさん、これは一体・・・？」

タカミチはネギがメルディアナに避難しているだろうと考え魔法学校へ先に立ち寄ったわけだが、予想は大きく外れて未だなお村に残っているという報告を校長の秘書を務めているドネットから受けた。

「・・・四年前に英雄ナギの娘がこの村に預けられたことは知っているわよね？」

「ええ、学園長から少しばかり話は伺いましたけど」

「じゃあ、娘の容姿について聞いたかしら？」

「いえ特には・・・」

残念ながらそこまでは聞いていない。

多分、ナギさん似じゃないのかなとは思っているけれど、まさか・・・？

「ナギ・スプリングフィールドそっくりの容姿ならば、この現状の半分ぐらいの警戒レベルかしらね」

「ではまさか　　！？」

「他言無用を承知で教えてあげるわ・・・英雄ナギの娘、ネギ・スプリングフィールドは間違いなく母親似よ」

ならばこの警戒レベルに納得がいく。

大戦後に　災厄の女王　というレットルを押し付けられたアリカ様の容姿を受け継いでいるのなら大戦時に犠牲になった人間やMM元老院の反アリカ派に確実に狙われるだろうからね。

しかし、ただ一つわからないのは一体誰が今、娘のネギちゃんを育てているのかだ。

最初はナギさんの親戚に預けているのかと思ったが残念ながらもや予想は外れていた。

理由は簡単で、スプリングフィールド家の人間が先程見かけた村の修復作業の集団の中でテキパキと皆に指示を出していたからだ（確かライラさんと言ったかな？）。傍らにはその妻と思える人物までいて、従姉にあたるネカネ君は待機という形で現状もメルディアナにいますという。

だから、狙われる立場にある4歳の女の子のネギちゃんを彼らが育てているならば最低一人でも一緒にいて目を離さないようにするはずだ。つまり、そうじゃないのなら別の人間が育てているとしか考えられないのだ。

「・・・ま、こうなったのにはまた別の理由があるのよね。それもかなりトップシークレットの」

「まだあるんですか、ウエールズがこうなる理由が？」

「詳しくは私にも箝口令がひかれているから話せないけれど・・・高畑君なら多分理解できるんじゃないかしら？」

素直にタカミチの疑問に対する答えを教えないドネットは小悪魔めいた笑みでそう言った。



ドネットに導かれるまま歩き続けること数分、気が付くと何故か二つ「スプリングフィールド」の表札がある広々とした土地へと着いていた。

「……別居？」

もしかしてまだ自分が知らないナギさんの親戚がいるのかもしれない、ネギちゃんはきつとその家に預けられているんだと勝手にタカミチは予想しているとドネットが進み出て呼び鈴を鳴らした。

『……はい、どちらさまでしょうか？』

男の声だ。年齢はそれほど幼くない若い声だ。

「メルディアナのドネットよ。今日は悠久の風（AAA）の……いえ、旧紅き翼のタカミチ・T・高畑を連れてきたわ」

『……少し待つてほしい、準備もあるしまず彼女に確認を取らないといけないからね』

「それは承知よ。気長に待っているから気にしないで」

・・・彼女？確認？一体どういう事だ？  
わざわざ確認を取らないといけないほどの人物にネギちゃんは預けられているのか？

更なる疑問に頭を悩ませること僅か三分、扉の向こうから再び男の  
声で家への立ち入りが許可された。まだ真新しさを残す木製のドア  
を促されるままゆつくりと開いていく。そして、視界に  
まず飛び込んできた金髪の女性にタカミチは驚愕の叫びを上げる！！

「・・・え？・・・あ、ああ、ああああああっ！？あ、ア  
リカ様！？」

なんと、そこにいたのはナギと共に行方不明だと聞かされていたそ  
の妻アリカ元女王だったのだ！！

「う、うむ、私は確かにアリカじゃ。・・・お主は聞いた限りでは  
タカミチらしいのじゃがそれは真まことか？」

「は、は、はいい！！自分はこのななりですがまだXX歳の正真正  
銘のタカミチ・T・高畑です！！」

自分でも何を言っているんだかわからなくなるぐらいパンチ力が・  
・違った、思考力が弱くなっている。  
ええい、こつこついう時はどうすれば落ち着くことができるんだっけ？

確か

「……ピカソの本名でも言ってもとりあえず落ち着きなよ、君」

「え、えーっと、『パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピン・クリスピアノ・デ・ラ・サンテシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ』だったっけか？」

「……嘘、冗談で言ったつもりなのにちゃんと正解を答えてる」

「私でさえ知らないのに何故言えるの……？」

「……まあ、これでも麻帆良学園で教師をやっていますから。結果的に落ち着けたから冗談でも別に良いんだけど。」

おっと、それどころではなかった。今はいかにして本人だと分かってもらえるかどうか考えるべきだった。

「……うーん、大戦時に撮影した写真は自宅にあるし今証拠になりそうなものはまったくもっていないぞ？」

どうする、血液とかそんな単純なもので済む問題じゃない。

「年齢詐称薬を飲めばはつきりするんじゃないかい？見たところ、変身魔法を使っているような様子はないみたいだし……」

「それは名案じゃな」

フェイトは手早く物置部屋から赤と青の飴玉が入った小瓶を手に取って戻って来た。  
そして間髪入れずに青い方の飴玉をタカミチの口へと放り込んだ。

「んぐつ!? (ボンッ!!)」

すると 何という事でしょう。  
師匠のガトウようにダンディな髭と眼鏡を持ち合わせていた彼は瞬く間に身体からおじさん要素を追い出して行き、持ち前の背の高さを失っていったのです。

終いには服がずると脱げてしまいぶかぶかとなった姿がそこにいた全員に目撃されることになりました。

「オギヤアアアアアアアアアア!! (なんじゃこりゃー!)

「あ……若返りさせ過ぎた」

「これでどう確認しろというのだフェイト……いくら私でもタカミチの赤ん坊時代は知らんぞ？」

「と、とにかく赤い方を早く飲ませましょう!」

(さらにもたつくこと5分・・・)

やっこのことで大戦時代の容姿へと自身のみを変身させたタカミチは赤ん坊になったりお爺さんになったりとあれこれ変身させられたトラウマが忘れられないのか部屋の隅でガタガタと膝を抱え込んで震えていた。

「酷い目に遭った・・・・・・・・」

「じゃ、じゃがこうして本人とわかったんじゃからそう気を落とさんでも・・・・・・・・」

「・・・ならなぜ、みんなして年齢詐称薬を構えていたんですか」

「うっ、それは・・・」

「つい、調子に乗ってしまって・・・」

「本当に・・・すまないと思っている・・・・・・・・(クスッ)」

おい君、今笑ったな!?

こめかみに怒りのマークを出現させ、麻帆良学園のデスメガネとしての威圧を3人に浴びせかけるタカミチ。

片手には赤い年齢詐称薬が握られており、徐にそれを飲み込むと少

年の姿から元の見た目はおじさん（中身はXX歳）の姿へと舞い戻る。

もう彼には憧れの人間の嫁だとか謎の白髪少年とかメルディアナ魔法学校の校長の従者とか関係なしに鉄拳制裁することしか頭になかった。

「少し・・・頭を冷やしましょうか？」

「まままま、待て！！タカミチお主、人の家を壊す気が！？」

「幾らなんでもそれは不味いわよ！？」

「・・・一先ず二人は僕の後ろの下がっておいて。彼の相手は僕がするから」

「・・・お主も家を破壊しないのじゃぞ？」

「わかってるって」

3人は迫りくる死を呼ぶ眼鏡の静かなる怒りの行進に対し全力で自己防衛本能を発動させ身構える。

時の流れがおかしく感じるほど彼らが今いる部屋は異様な雰囲気にも包まれていて、1秒たりとも油断ができない状況に陥っていた。

そんな中、フェイト一人だけはまったく微動だにせずただ曼陀羅魔法障壁を張り自慢のポーカーフェイスをタカミチの瞳に焼き付ける。

「さあ・・・お仕置きの時間だ!!」

「来なよ・・・タカミチ・Ｔ・高畑!!」

実はお互い本当は因縁の関係にあるのにもかかわらず、二人はそんなこと知ってか知らずかお構いなしに男同士の始めようとした。

その時だった。

「にいいいいいいいいいいいいいさまああああああああああ  
あああ？」

フェイトの事をお兄さまと慕って愛しているスプリングフィールド家である意味超最強の幼女、ネギ・スプリングフィールドが玄関からもう人間の限界を超えているんじゃないかなという速度でダイナミックな帰宅を果たしタカミチを無意識に容赦なく轢いて右側の壁に叩きつけた後、愛しい愛しいフェイトの胸へと飛び込んだ。

「・・・計画通り(ニヤリ)」

「にーさま、にーさまー!!」

ぐるぐると回転しながらフェイトはじゃれてゴロゴロするネギを抱き、まるでこつなる事を予期していたかのように怪しく微笑む。

「にーさま、あのね！わたしひをとますまほーいっしょうけんめいれんしゅーしておぼえたよー!!」

「そうか。火の大きさはどのくらいだったんだい？」

「うーんね、このくらいー!!」

掌と掌を合わせ花のつぼみをイメージさせる形をネギは満面の笑みで伝える。

その大きさからして初めての初級魔法は成功と考えていいと思われ  
るが、問題はタカミチに対する轢き逃げ(?) 行為に見られる無意識的魔力解放だった。

「ま、それは追々教えていけばいいか」

彼は気楽に考えとりあえず初の魔法行使成功を祝して存分にネギの頭を撫でてあげた。



一方、タカミチはというと。

「ああ、ガトウさん……何でだろう、時が見えるよ……」

知らない間にニュータイプに覚醒……などしておらず、壁に叩きつけられたショックで意識が朦朧としていた。

いや、ただ単に叩きつけられたショックでこうなっているのではない。尊敬する人物の娘に、それもまだ4歳の幼女にいと也容易く撃破されてしまったのだ。これでショックを受けないで平然としているのはおかしい。(でなければ、ただのマゾかロリコンだ)

『……タカミチ』

次第に走馬燈が頭の中を駆け巡っていく中で彼は自分に明日菜を託して死んだガトウの声を耳にした。

『言ったはずだぜお前に……俺の屍を越えて行け』ってな。なのにここでお前が死んでアスナ嬢ちゃんが一人になったら誰

「が守るんだ？」

「!?!?・・・そうだ、僕は彼女を

」

師匠の死を無駄にしないためにも何が何でも守るって誓ったじゃないか!!

なのにどうしてナギさんとアリカ様の娘にたかが一撃やられてノックアウトさせられたぐらいでへこたれているんだ!?

『生きる、タカミチ・・・・・・・・死ぬのなら最後まで守り切ってからにしろ』

そう言っただけでガトウはタカミチに背を向けるとポケットに突っ込まれていない右手を高く上げ彼に別れを告げて立ち去る。

「が、が・・・ガトウさあああああああああああああああ  
あん!!!!!!!!」

ガトウは死してなおタカミチの心の師匠であり続けていた。

side out

その頃、現実世界では……。

「ちよっ！？高畑君、脈が低くなってるわよ!？」

「なんじゃと!?!?!ネギよ、どれだけの速度で吹き飛ばしたんじゃない」

「ん~~~~?わたし、わかんない!(そもそもこのおじさんだーれ?)」

「……計算外だ(曼陀羅魔法障壁を張っておいたので多少破られはしたものの防ぎ切ったのでタカミチのようにならずに済んだフエイト)」

意味合いがまったく違つが、引き続き油断ができない状況が続いていた。

第五話 幼女相手に友達になりたい発言は死亡フラグです（後書き）

タカミチまさかここで死す！！（死んでねえよ）

友達発言ないのに死にかけてるとかないでしょ！！

暴走特急幼女ネギの活躍はまだまだ続くぜよ！！（なぜに土佐弁？）

ここで再び分岐ポイントアンケート！！

『もしも京都編に出るアーウェルンクスがフェイトではなかったら』

フェイトが味方である以上、代打でアーウェルンクスが来るのは必然。だったら誰に来てほしい？

A 『4（クウアルトウム）』

残忍なバーニングボーイ。こいつがいるだけで登場人物に鬱展開が降り注ぎ物語をバットエンドへと誘う。正直私はこいつが嫌い。

B 『5（クウイントウム）』

冷静かつ冷酷なサディステイクボーイ。何気に風と雷の二系統が使えるビリビリ野郎。こいつは確実にネギを超いじめそう（エロ演出担当？）

C 『6（セクストウム）』

水に特化したミステリアスガール。石化がフェイトなら氷漬けは

彼女。何気に二人は似ていたりする。女のネギのライバルとしては最適かもしれない。

期限は9月11日まで！！次回は魔法学校編序章・・・かもしれぬ。

**第六話** この少女に手を出したらあなたの人生が終わります（前書き）

挿絵に本気を出してみた！！

今回は文は短めです。

しかし、それにしても地区の運動会にコジマバイト（カウンターの仕事&2階レジ）とは実にきつかった。

第六話 この少女に手を出したらあなたの人生が終わります

フェイス side

時はネギによる無意識でのタカミチ殺害未遂事件から数日後。

刻一刻と迫りくるネギの魔法学校入学に向けて、予習と題して初級魔法の勉強を教えたり簡単な実技テストを行ったりしていたフェイスは入学と同時に発生するだろう事態に對しどう対策を講じていくかを考えながら草原にそびえ立っている大木の近くでうろつくと歩き回っていた。

「・・・事情を知っているこの村の住人とは違ってメルディアナには無知の人間、もしくは元老院の息がかかった人間もいる。その中でまともに勉強ができるとはまず考えない方がいいだろう」

入学しないという手もあるが、それは時間稼ぎ程度にしかならない。故に入学するという前提で事を進めていくとして必然になるのは可能な限りネギの傍に居られる立場だ。ボシジョン一言でいえば教師という役職であればほぼ護衛は完璧だろう。(寮では保護者として同居できるよう校長に働きかければいいだろうし)

「僕の立場の確保はまあいいとして……問題は彼女自身の強化か」

護衛を任せられている以上守り通そうとは考えているものの、どうしてもそばにいられないという事態は確実に発生する。偶然であろうと必然であろうと傍にいられない状況は好ましくはない。

だからこそ、ある程度は自衛ができるよう初級魔法に付け加え基本的な魔法障壁……自己防衛を主とした魔法の習得を率先して行うべきだと強く感じた。

「主直伝の魔法障壁（通称：曼荼羅魔法障壁）なら、もう怖いものなしなんだけどね。……教えてみるかな？」

通常の魔法障壁よりも何層にも重ねられ強化されたあの分厚い魔法障壁ならば、相手がナギヤラカンのようにバグキャラでない限りらくに手を出すこともできないはずだ。王家の魔力もあるしもしかしたら自分達より強力な障壁が張れるかもしれない。

木陰に座り込んで脳内スケジュールに新たに魔法障壁特訓メニューを追加し、村が放っているのは別系統の自身が放った使い魔を呼んで今日も異常がないか確認すると水筒に入ったアイスコーヒークップに注ぎホッと息をつく。すると、毎度のことか慣

れたがネギが自分を見つけ駆け寄り抱きついてきた。



「にーさま！なでなでして〜！」

「・・・ん、いいよ」

コップの中のコーヒーを飲み干し自分の右側に置くと、手慣れた手つきで痛みのない滑らかな触り心地の金髪が生えているネギの頭を優しく撫でる。

「うにゃ〜」

猫撫で声のように気持ちよさそうな声を思わず漏らすネギ。

その反応を見てフェイトは顎に手を伸ばしかけるが、自分がしようとしたことに気づきサッと腕を戻す。

「（・・・今僕は何をしようとした？この子を本当に猫をのように撫でようなんて）」

左手をワナワナと震えさせ自重しろと自分に何度も言い聞かせる。これ以上踏み込んでしまえばただのロリコン・・・それも危険レベルの「見せられないよ！」のマークやモザイクが入る人間になってしまう。そうはなりたくないので必死に「僕の左腕よ、静まれ！！」と厨二病みたいなことを思考しながらネギを見ると・・・

「……………すうすう」

「…っ、寝てるし……………」

いつの間にもやらネギはちゃっかりフェイトに膝に頭を乗せて昼寝を開始していた。

無理もない、気温は軽く温かさを感じさせる程度で絶好の昼寝日和と言っても過言ではないほどののだ。まだまだ幼いネギがこの空気の中で昼寝をしないということはまったくもってありえない。

「やれやれ……………君の為にも暫らくここでのんびりしてあげよう」

ネギにコーヒーをこぼしてかけてしまわないよう注意を払いながらまた一杯コーヒーをコップに注ぐと、近くに咲いているコスモスの花の香りを楽しみながら雲一つない青空をフェイトは見上げコーヒーを口に含んだ。

side out

タカミチ side

「はあ……どうしよう」

まさかアリカ様がネギちゃんと一緒に暮らしているとはね……予想外だったなあ。

別に不味い事ではないし、むしろ行方不明の人間が生きて見つかって嬉しい限りだ。……けど、クルトの奴にどう報告してやるうか。

色々他言無用って言われてるし（何か実行犯までウェールズの皆は捕まえちゃったらしいし）ほとんど教えられることができないんだけどまあ、凄く遠回しに言えばあいつも頭良いから気が付いてくれるだろうな、アリカ様のこと好きだったし。

……お、丁度いい。クルトからの通信だ。

『ザザツ                      タカミチ、聞こえるか？どうも通信の様子が悪いみたいだが……』

「ああ大丈夫だ、聞こえるよ。多分、飛行機の中だからだと思うけ

ど」

『なんだ、そういう事か・・・で、ウェールズはどうだったんだ？二人の子供は無事だったのか？』

・・・無事だったよ。

無意識に僕を壁に叩きつけて生死の境目を彷徨わせてガトウさんと再会させるぐらいピンピンしてたよ。

「今のウェールズはただの魔法使いの村じゃない、とだけ言っておこう。彼女が無事だった理由はその一言に尽きる」

『・・・何を見たんだタカミチ？』

「強いて言うのなら『ネギちゃんに手を出すなんて叶うと思うなよ？』って感じの村になってたんだ、あそこは」

流石に僕が攻略して制圧しろと誰かに言われても不可能じゃないかって思える。

質も量も気を配って対策をあつめた村は施しているから出来ても長期戦は必須だろう。

『・・・実はな内密な情報なんだが、反アリカ派の召喚士数名が戻らないという事態が発生しているという情報を掴んだんだ。心当たりはないか？』

「……………ノーコメントで」

『ちよ、ノーコメントってタカミチお前……何か知ってるんだな！？』

「ノーコメントで」

だって、その召喚士は今監禁中なんだよ？

ネギちゃんに手を出そうとしたってことで人を見るような目で見られてないしとりあえず生きていられるだけの食事しか出されてないし、情報を干乾びるほど絞り出されているらしいし。

「……………どうしてもって事なら、ただ一つ言えることがあるぞ」

『……………口調からして嫌な予感しかしないが、言ってくれ』

言ってあげるよ、仲間として僕が言ってあげられるとびきりの一言  
ってやつをね。

君がどう動くかは君次第だ、幸運を祈るよ。

「クルト」

大戦での僕らの屈辱を晴らせるかもしれない」

「なん……だと……?」

かつてのあの戦いの時に回っていなかった運命の歯車というモノは  
ようやく今になって回り始めたのだ。ネギ・スプリングフィールド  
という無限の可能性を持つ歯車によって……。

side out

アリカside

「……あ、そうじゃー!!タカミチにアスナの事を聞くのを

忘れておった!!」

確かガトウ達と行動していたな、と今になって思い出したアリカは一人頭を抱えて叫んでいた。

その後クルトとの通信を終えたタカミチに急いで確認するまで彼女はパニック状態だったという。

s i d e o u t

第六話 この幼女に手を出したらあなたの人生が終わります（後書き）

シスコン化に悩むフェイト、アスナの所在にパニくるアリカ、死にかけたタカミチのクルトへの一言。

そして、この話を書いている時のBGMは姉が父に怒られてる声!!

アンケートは今回は休みます!!巻き込まれそうなので!!



**パクティオーカード設定(予定)(前書き)**

本編でなくてごめんなさい。

でも、気合を入れて作りました。

## パクティオーカード設定(予定)

パクティオーカード設定

ネギ・スプリングフィールド(・エンテオフユシア)

バージョン1

> i31187 — 3006 <

バージョン2

> i31191 — 3006 <

「主」 フェイト・グローリースター (テルティウム・アーウェ  
リンクス)

「名前表記」 NEGIUS SPRINGFIELD

「称号」 Nam princeps gentis (失われた国  
の女王)

「色調」 Aurum et Rubor (金と赤)

「徳性」    a u d a c i a (勇氣)

「方位」    o c c i d e n s (西)

「星辰性」    J u p i t e r (木星)

「ローマ数字」    C C C X V (315)

「アーティファクト」    一切の無駄なき刻印弓

「形状」 赤と金の二色が特徴的な六つの翼が折り畳まれるように重なり合った紋様が刻まれた腕輪。ネギの左腕に装着される。

「能力」

第一開放：アーティファクトに魔力を注ぎ込むことで爆発的に通常の攻撃魔法の総合能力が上昇。(例：雷の暴風 高出力貫通型雷の暴風 通称：雷の暴風?) 射程も段違いに伸ばすことも可能なので最大2?までなら攻撃可能。

第二開放：ファントムキャンセラー「幻想凍結」と呼ばれる魔力無効化(相殺)及び吸収能力を発現した姿。第一開放時よりも大きく翼が開かれており、相手の魔法に対抗する為だけに特化している。吸収後の魔力はすぐに開放し排出しなければならぬが自身の魔力を節約できる。(ただし、

なるべく同性の魔力であった方が好ましい。異性の魔力を吸収するとある意味危険な状態になってしまう)

第三開放：腕だけでなく全身に影響した姿。背中からは翼が生え、頬には紋様が現れる。自身の魔力自体をブーストし第一開放並みの出力で戦うことができるが肉体の疲労も激しく長時間の使用は厳禁。強いて言えば魔力ドーピング(?)

第四開放：??????

最終形態と言っても過言ではない姿だが、詳細は謎に包まれている。

## パクティオーカード設定(予定)(後書き)

パクティオーカード製作ソフトや透明GIF製作にいそしんでいた  
ら寝不足で色々体がやばいです。

何か体がだるいけど・・・更新頑張ります。

追記：アーティファクトに関しては某剣舞の設定を参考にさせてい  
ただきました。

次回をお楽しみに。

**第七話 恋する乙女が成長した結果がこれだよ!! (前書き)**

ネットの回線工事の為に更新が遅れました。

そして幼女からの急成長でごめんなさい。

## 第七話 恋する乙女が成長した結果がこれだよ！！

フエイトside

どうしてこうなったんだらうか？

浅く降り積もった雪の上に倒れるよう仰向けに横たわる僕は熱くな  
ってポーっとしている頭でそう自問し続けたいた。

幸いにも雪は降ってなどいないが冬だというのにまったくもって寒  
さを感じることができない。

全身が異常なほど暖かいけれど石化もしくは氷漬けにされたかのよ  
うにピクリとも動かすことができない。

何度も何度も狂いそうな気分にはせられて金縛りともいうべき呪縛  
から一向に抜け出すことができない。

それは全部、自分に覆い被さっている存在が原因だ。

黒いセーターに赤い外套を着込んだその存在は自分に覆いかぶさり  
僕の全身を温めながらしきりに同じ動きを繰り返す。

痺れるような絡みつくような行為は止まる気配などさらさらなく、  
僕の息苦しさを余所に繰り返される。

「・・・んっ・・・れる、ちゅっ・・・ちゅ、んふっ・・・」

逃れようとするとする気さえ徐々に失せるこの濃厚な交わりの行為の名は

キス。

別名、接吻とも言われる行為は艶やかな滑らかさを持った金髪と紅と碧の虹彩異色症オッドアイを兼ね備えた自分のよく知る人物によって行われていた。

「おにい・・・さまぁ・・・んちゅ・・・れふ」

その人物の名は、ネギ・スプリングフィールド。

幼少期の頃からフェイトの事を「にーさま」と慕い続け今になっても「お兄さま」と愛し呼び続ける現在13歳の恋する乙女だ。

彼女は年齢から考えて豊満過ぎる胸をフェイトの胸板に押し付け、自分だけの世界に入り込みただただ舌を絡め歯の全体を舐め上げ自分色に染めていく。

「・・・はぁ・・・はぁん！！とめ・・・られない・・・です」

当たり前の結果、フェイトの口内はもはやネギの唾液しか含まれておらず否応なしに彼女の甘酸っぱい官能的な香りと味を感じることになった。

だが、フェイトは特に拒絶するような反応は見せず流されるままにこの永遠とも思える時間を受け入れていた。・・・一体なぜだろう



か？

「・・・あ」

一旦、僅かな間だけ舌と舌が離れ糸を引く。

ネギは名残惜しそうな顔を少しだけ見せるも特別な儀式の結果を確認するために押し付けていた胸すらもフェイトの胸から遠ざけた。

そして、二人の前に儀式の成功を告げるが如く一枚のカードが出現する。

なんと、彼らが行っていたのは仮契約と呼ばれている 主と従者の間で交わされる儀式だったのだ。  
ちなみにこの儀式は唇と唇でキスをするかまたは互いの血を交合わせることで成立するのだが、比較的前者の方が好まれて行われることが多いという。

簡単な理由だが、後者は痛みを伴いわざわざ血を出した部分を治さなくてはならないので色々と手間がかかる。それに比べて前者はキスをするという覚悟はあるものの特に痛みを伴うことなくすんなりと行えることから安全性と簡易性があるのだ。・・・まあ、ネギとフェイトのように長時間キスをし続けるようなことは別にしないでもいいのだがここだけの話、キスの時間が長いと強力なアーティファクトが出るとか出ないとか。あくまでも噂なので信憑性の欠片も

ないが純粹（？）に愛しているネギにとってはそんな事はどうでもよかった。

「私が従者でお兄さまが主ですか……………」

「…………嫌なのかい？」

「い、いえ、とんでもありません！！ただ、自分の願望が叶ってくれたので嬉しくて……………」（ポツ）

既に紅く染まっていた頬は更に濃さを増し彼女の儂さを際立たせる。口から漏れる吐息と小刻みに震える肩は先程までの興奮を増幅させ無意識に彼を突き動かしていた。

「キヤツ!？」

馬乗りにされていたフェイトは突如として起き上がりネギの背が自分の胸に当たるよう位置を入れ替えると、肩と腰に腕を回しそれ以上のことをすることなく抱きしめた。

「おにー…………さま?」

「暫くこうしていよう……………君の気が済むまでね、約束だから」

「・・・はいっ  
」

誰かが見たら確実に「リア充爆発しろ！！」などと言われそうなの光景は雪が再び降ってくるまでずっと行われ続けた。

・・・実を言うと偶然通りかかったアリカとネカネが木陰からこのイチャイチャぶりを開いた口が塞がらない状態で覗いていたのだが、止めるのも勿体ないなと母親と従姉としてのプライドを星の彼方へと吹っ飛ばし温かく見守っていた。

というか、そもそもこうなったのには遡ること数時間前に原因があった。

s i d e o u t

ネギside

「お兄さま！！決闘して下さい！！」

「・・・え？」

遡ること数時間前、ネギは家の中でソファーに座りながら読書中のフェイトに両手を腰に当てながら面と向かって突然バトルの申し込みをしていた。

4歳の時のようにフェイトを目にすれば飛びついて抱きつくようなことはせず純粹に（？）態度で好きだということアピールするようになった、ダイオラマ魔法球で約3年分修行を積んだネギ（13歳）は同姓でさえ見惚れるような容姿へと成長を遂げていた。

魔法学校ではあからさまに父親関係で嫌がらせをされたり母親関係で命を狙われかけたが（酷い時はセクハラもされそうになった）、フェイトやアリの力の指導の下で取り組んだ修行メニューを熟していたおかげでフェイトが傍にいない時などは自力で問題に対処できるようになったため、陰ながら次々と対抗策を試みて行き一時期は教員の数が必要なくなりかける事態まで発展しかけた。

事後処理は校長やフェイトが率先してやってくれたからその後の学校生活は何事もなく過ごすことができたが、常人から見たら力オスで波乱万丈な学校生活に見えただろう。

「突然どうしたんだい、僕と戦うならいつもやっているじゃないか？」

「あれはあくまで模擬戦です！！本気の戦いではないでしょう!？」

「確かに君のレベルに合わせてこっちも難易度を調節してるから、本気とは言えないけれど………何故今になってだい？」

「そ、それは……もうすぐ、卒業ですから………」

卒業まであと2週間を切ったネギは今までの集大成として、この先修行先で待ち受けるであろう戦いに備えて本気で全力の戦いをフェイトとしてみたかったのだ。

勝ち負けとかそういう問題はさておき、今の段階でどれだけ戦えるのかは是非とも確認してみたいものである。

「……ああ、なるほどね。それは一理あるね」

本に槩を挿んでフェイトは彼女と面と向き合う。

しかし、彼はネギが決闘とは別の事を考えていると看破していた。

「で、でしょうー!」

「……だけど、君が後ろのポケットに隠しているモノは一体何なのかな?」

目にも止まらぬ速さで彼女の後ろに回り込むとスカートの後ろに設けられたスペースには手のひらサイズの円盤の形をした何かが入っていた。

指摘されたネギは慌てて隠そうとするも時既に遅し、問題のブツはフェイトの手中に納められていた。

「これは……確か携帯設置型仮契約魔法陣だね、一体何に使ったもりだったのかな?」

「え、あ、そ、その、こ、これは……（言えない、お兄さまとの仮契約用に取り寄せたなんて……）」

「……大方、決闘に勝ったら仮契約してくれと言つつもりだったのだろうね」

「……ひゃい」

もう涙目でぺたりと床に座り込むネギは何も言い返すことができなかった。

自分が考えていることが既に先回りされて把握されてしまっているのだから。

フェイトは座り込むネギの眼の高さまでしゃがむと頭を撫でながら優しく諭す。

「別に仮契約ぐらいしてあげてもいいよ」

「・・・っ！！ほ、本当ですか！？」

「ただし・・・君が言い出した決闘で僕が満足で来る結果を君が出すことが出来ればの話だ」

つまり、今まで受けてきた指導の結果に見合う戦いをすれば仮契約はしてくれるということだ。

最初自分が立てた計画とは大きく外れたけれど行き着く場所は同じになると分かったネギは「パアア」と輝かしいほどの満面の笑みを彼に向ける。

こうして、仮契約を賭けた激闘は始まりを告げた。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!」

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト!!」

自宅から遠く離れた雪原の地にて決闘を始めた二人はかれこれ30分以上戦い続けているにもかかわらず始動キ―を噛みもせず、高速で詠唱する。

お互い情け無用の真剣勝負を承知で戦うことにしているため、例えば愛して止まない兄であろうと守り続けると誓った妹分であろうとも一切関係なく殺意をぶつけ睨み合っていた。

「ウンデトリ―ギンヌヒ―リトウス・ルーキス 魔法の射手 サギタ・マギセリエス 連弾・光の29矢!!」

同数の光の矢が弾丸のように飛び交い互いを相殺すべくぶつかり合う。

その様子を確認するまでもなく二人は直ちに次の行動を取るべく空へと舞い上がりチェイスを開始した。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト!! 射殺しの岩剣



「!!」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!影の地 統ぶる者スカロコース・ウンブラエ・レーグナンス  
サハの（スカータク） 我が手に授けん（イン・マヌム・メアム・デット）三十の棘もつ（ヤクルム・ダエモニウム）愛しき槍を（クム・スピーニス・トリギンタ）雷の投擲!!」  
ヤクラーティオー・フルゴリス

岩で構成された巨大な大剣を振るいフェイトは一撃でも喰らえばただでは済まない攻撃をネギに向け放つ。

対するネギはそんな簡単にやられて死んでたまるかという勢いで雷の槍を幾重にも放ち大剣を破壊すべく徹底抗戦に打って出た。

「はあああああああああああああああつ!!」

自らも右腕に魔力を充填させながら雷槍の間を駆け抜け必死の形相で迫るネギ。

彼女の無謀とも言える特攻には思わずフェイトも岩壁による魔力障壁を構築し防御の姿勢に出た。

「くっ……槍が……!!」

元々大剣を破壊すべく放った雷槍は目の前に展開された岩壁によって阻まれ空しく散る。

舌打ちし失敗を軽く悔いるネギはそう簡単に上手くいくとはずはないと考えて予防策として講じていた作戦を実行に移す。

「剣に拳で挑もうなどとナンセンスだよ……!!」

「わかっています!!」

迫りくる斬撃に対し拳を構え、迎撃の準備に取りかかると大剣はあと数十センチの距離までに迫っていた。

「残念だけど……チエックメイトだっ!!」

「かかりましたね？」

大きく振りかぶられた大剣はネギに顔面すれすれで止まるといふ展開にはならず……なんと、逆立ちしたネギの両足によって挟み込まれて停止していた。

この予想外すぎる展開に啞然としてしまったフェイトは数時間後に口が塞がらなくなったアリカとネカネと同じ状態へと陥った。

「隙アリです!!」

右腕に充填した魔力で大剣の側面を叩き粉碎すると、武器がなくなったフェイトに目掛けて玉砕覚悟でダイブを決める。

そしてあらかじめ対策として取っておいた待機状態の雷の暴風を左腕に込めてゼロ距離で放った。

「雷の暴風・特攻零式!!」

下手をすれば自分さえも巻き込みかねない捨て身の一撃がフェイトの腹部へと吸い込まれる。

勢いづいたネギとフェイトは半ば引き摺られる形で雪原の大地を滑ることになった。

s i d e o u t

フエイトside

「・・・まったく、君は無茶ばかりするね。流石はナギ・スプリングフィールドの娘だけある」

ネギの雷の暴風・特攻零式を喰らい500mほど引き摺られる形となったフエイトは無謀とは言えど、ちゃんと（曼陀羅魔法障壁を展開して）安全性を考慮して攻撃を繰り返したことに若干呆れ気味に感心し仮契約を認めた。

「まだまだお父様には到底及ばない無茶ですよ、お兄さま」

「でも、君のような女の子がやる出来事ではないんだよ。そこらへんはわかっているのかな？」

二人してパクティオーカードを握りしめながらお互いからかい合う。

「わかってますって、あんな無茶は滅多なことがない限りしませんよーだ」

ネギは抱きしめられていた中から抜け出し適当に雪の塊を抱えるとフェイトにぶざけて投げた。

「……やったね？それっ!!」

お返しとばかりに彼も手身近の雪をかき集め彼女へ放り投げる。

「きゃっ!!……もーお兄さまったら!!」

戦いを忘れ、今はこの時だけは純粹に楽しい時を楽しく過ごすこと彼らははしゃぐ。

この先に待ち受けるであろう、己たちの運命さだめと役目から一時的にだけでも解放されて……

「今」という時をずっと忘れないように心へと刻みつけることにした。



**第七話 恋する乙女が成長した結果がこれだよ!! (後書き)**

次回は原作の序章部分になるかと。

何か体が不自然に痙攣してやばいよ・・・

第八話 転勤教師・・・それは、まぎれもなく僕だけれど

ネギ、その『ロ

大学がもうすぐ始まるな・・・

バイトのシフトがまだ決定できないな・・・

どうしよう・・・

と悩みまくった末の更新です、どうぞ。



第八話 転勤教師・・・それは、まぎれもなく僕だけねど

ネギ、その『ロ

フエイトside

・・・とうとう運命の日が来てしまったか。

忘れられない仮契約から2週間後、ついに今日は卒業式当日だ。

メルディアナの教師として勤務している自分も今か今かと迫りくる卒業式の最終調整の為にそこそこ信頼関係を築いた同僚と綿密な打ち合わせを行って、折角の晴れの舞台を滅茶苦茶にされないよう気を配っていた。

120

「・・・外部から来る保護者達の手荷物の検査はくれぐれもしっかり行ってくださいね？」

「了解です、受付係全員に徹底させますよ！」

「フエイトさん！！椅子の数が足りないんですが、何処の倉庫に追加の分は置いてありますかー？」

「地下の第四倉庫の中です。・・・結構数が足りていないな、自分も手伝いますので案内しますよ」

「ありがとございまーす!」

会場のホールの地下へと潜り、足りない数だけ椅子を見繕うと自分から率先してホールへと運び込む。

規則正しく完璧にテキパキと並べていき後は主役たちや教員、来賓や保護者が揃っただけにするとふいに背後から声をかけられた。

「フェイト君!」

「ん・・・ネカネ?」

自らの手を軽くはたき特に理由もなくホールを見回していた彼はネギの従姉にして一応メルディアナの職員として勤務しているネカネの方を振り向き首を傾げる。

「どうしたんだい、何か準備にトラブルでもあった?」

「いいえ、違うの。校長先生がネギの修行先の件で貴方を呼んでいるのよ」

「・・・ああ、そうか」

彼女の修行先によって自分の立場というモノも左右されるんだっただね。

学校側として事前に修行先は校長が設定して把握しているから是非

とも確認しに行かないといけないな。

残った簡単な作業は他の教員に任せその場を後にしたフェイトは校長室まで続く長い廊下をコツコツと靴音をたてながらたった一人歩いていくと、何時の間にか目の前には固く閉ざされた校長室の扉があった。

「・・・校長、フェイトです」

ノックを二回ドアに叩き込み、自分の来訪を中にいる校長に伝える。返事を聞くまでもなく部屋へと入り込むと窓から外の景色を眺めている校長の後ろ姿が目飛び込んできた。

「来てくれたか、フェイト君・・・そこに掛けてくれ」

杖を片手にソファを指さすとそこには淹れ立てのコーヒーが置かれたテーブルが目の前にあるソファがあった。

一向に座ろうとしない校長に許可を取ってから静かに座り込むとミルクも砂糖も入れずにストレートでコーヒーを一口だけ口に含む。そして、呼び出された件についてフェイトは単刀直入に切り出すことにした。

「彼女の修行先の件で来たわけですが・・・詳細を伺ってもよろしいですか？」

「うむ。彼女は後々知ることになるから良いとして、君にはちゃんと詳しく話しておこう。実はの」

まず第一に僕が聞かされたのは修行先が「日本」であるという事だ。この時点では特に言語関係以外で問題はないのだが、次に飛び出したキーワードが問題だった。

なんと、「日本」で『先生』をやること……つまりは日本の学校で教師として赴任しろということんでもない内容が校長の口から語られたのだ。

「日本の学校というとただの学校ではなく魔法使い達が運営している『麻帆良学園』のことですよね？」

「その通りじゃ、僕の友人の近衛近右衛門が学園長を務めておる『麻帆良学園』が修行先となっておる」

「まあその点は良いとしますが……しかし、何故『生徒』ではなく『教師』として修行を行うということに？」

何も教師として麻帆良学園に行くことはないだろうと内心フェイトは思った。

一応13歳で大学卒業レベルの知識は兼ね備えているネギではあるが、まだまだ教師を務めるといふのは無理がありすぎる。せめて、生徒として通うのが道理ではないだろうか？

「その事は問われると思っただわい。じゃが、生徒ではないのにはち

と理由があつてな」

校長曰く、認識の違いの差が生徒か教師かの選択を左右したという。もし生徒として学園に通っていたのなら何か事件があつてネギが巻き込まれた際に、ごく一部の人間（クラスメイト等）にしか彼女を知らないため他の生徒や教師にあまり認識されず次第に事件が風化してしまふ恐れがあるだろうが、もし教師として赴任することになるのなら必ず全体に存在を公表され印象に残るので何かあつた時に一人でも多く異常に気付く人間が現れ忘れずにいる可能性が高い。ごく一部からの認知か大多数からの認知かを選べと言われたらまず後者を選ぶのは当然の結果だ。

「麻帆良には認識障害が働いているとはいえ完全ではない。少なからずネギが危険な状態になった時気付く者は現れるじやろう」

「なるほど……」

抗魔力に優れた人間が認識障害系の魔法を無効化し異常に気付くというケースはありえなくもない。この点から考えて教師として麻帆良に行くのは最善と言えよう。

「……ちなみにアリカ姫はどうするおつもりですか、やはりウェルズに滞在ということに?」

「安全性を考えたらそうじゃが……二人を無意味に離して



るじゃる」

「そうですね・・・詳しい情報ありがとうございます」

別に嫌という訳じゃないし、必要なことだから最後までやりきろう。

コーヒーを話しの間飲み終えたフェイトは一言一言校長と言葉を  
交わし部屋を後にした。

・・・のだが、予想外の問題が無事に行なわれた卒業式の後に起こ  
ってしまった。

「無理無理無理です！！わ、私が先生やるなんて無理ですよ！！」

なんと、修行内容を知ったネギが「日本で先生をやる」というとんでもない内容に対して涙ぐみながら拒否してきたのだ。また、ついでといつてはなんだがアリカとアーニヤまでもが反対して自分の下へと駆け込んで来た。

「そーよ！！いくらネギが頭良いからって先生やらせなくたっていいじゃない！！」

「せめて生徒なら私も許せるのじゃがな……」

気持ちはよくわかるよ。でも、まるで僕が決めたように批難するの止めてくれ……これには深い事情があるんだから。

「僕達の赴任先は『麻帆良学園』、これは決定事項だよ。一般の学校でないだけありがたいと思いなよ」

「で、ですが、お母さまが言われた通り生徒として修行に行く方がよいのではないのでしょうか？私のようなまだ子供が先生などやるのは無理がありますし……」

「その点に関しては大丈夫だ。認識阻害魔法が働いているから君が先生をやるのがまったく不審には思わないよ」

ただし、例外っていうモノがあるかもしれないけどね。



「ちなみに貴女も同行予定だから、アリス・スプリングフィールド」

「私もなのか!？」

「ああ、麻帆良には君の知るある人物がいることだし……一先ず受け持つクラスは彼女が在籍するクラスだそうだよ？」

偽名で呼ばれたアリカはフェイトが言葉にした「ある人物」の事を瞬時に理解する。

「ある人物」それはタカミチがガトウに代わって守り続けている大戦の中心人物とも言える少女、アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアのことだった。

「安心するといい、今の彼女は君の知っている彼女ではないからね。普通に親戚とでも名乗ればいいさ」

「……簡単に言うでない、心の準備がいるではないか」

さて、母親の方は納得しかけているけど……肝心のネギはどうしようかな？

まだ納得してないみたいだし、さっきから「ぐすんぐすん……」言いながら恨めしそうな目を向けるのは正直止めて欲しい。僕の心がボロボロになって吐血でもしたらどうするんだ、責任とってくれるのかい？

「え、あ、そ・・・それなら是非ともとらせていただきますけど・・・」

「おい、急に体をモジモジさせるんじゃない。今のは全然性的な意味とかで言っていないからね？真剣な話をしているのだからしっかりと欲しいものだ。」

「いつまで経っても頑なに嫌だとネギが言うので、仕方がなくフェイトはここを」

「気合で乗り切ることにした。」

「ネギ!!」

「は、はい!?!」

「唐突に呼び捨てでネギの名を叫んだフェイト。」

「彼は僅か数秒の間に固く力強い決意と深呼吸を行い、深く閉じられた瞳をカツと見開いて彼女へ向けて熱すぎる励ましを行使した。」





「「「ええっ!?!」」」

驚くべきことに励ました相手であったネギが彼の謎の気合注入で先生での修行拒否をひっくり返したのだ。

まさかの展開に啞然としていたアリカとアーニヤ、そして落ち込んでいたフェイトまでもが声を上げる。

「いいの!?!今の変な応援でやる気になったの!?!」

「というか、さっきまでの拒絶っぷりはなんじゃったんじゃ……?」

「そんなモノ……お兄さまの愛パワーの力で銀河の彼方へ捨てましたっ  
!?!」

「捨てるなよっ!?!?」

「……いや、むしろ最初から捨てておいてよ」

どうやら見事自爆したかに思えた僕の応援は半ば成功したようだ、これで安心して麻帆良学園へ行けるよ、やれやれ。肩の荷が下りた僕は溜息をついてその場から退散し卒業式の後片付けへと向かった。

・・・ん？半分だけ成功ってどういう事かって？それはね

「お兄さま ちゃんと『24時間』について行きますので、よろしく  
お願いしますね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

仕事を終えて帰宅してみれば、妙に大胆なネグリジエを着込んだネギが自室のベットに横たわっていたんだよ。  
それはつまり応援の【もう半分】は【告白】と受け取られていたわけ  
けです・・・・・・・・

「ささっ、服をお脱ぎになって

」

「・・・・・・・・ベットに誘い込まないで、お風呂がまだなんだから」

「あ、そうでしたね。では

」

「・・・君は脱がなくていい、洗いに来なくていい、覗きに来なくていい。それと変なヌルヌルの液体は要らないから捨てなさい、無理矢理かけるんじゃない、腕をからませて引っ張るんじゃない（ry）」

世話好きの面倒見が良い可愛い妹は少しの間眼を離していた間に、「もう妹ってレベルじゃねーぞ!？」というぐらい奥さんめいた事をするようになってしまったのです。・・・どーしてこうなった。

こんな感じで麻帆良での生活は本当にやっていけるのかな、と不安を隠せないフェイトであった。（最終的にお風呂侵入は阻止しました）

s i d e o u t

第八話 転勤教師・・・それは、まぎれもなく僕だけけど

ネギ、その『口

・・・フェイト、お前もうゴールしていいんじゃないかな？

と、ノクターンでしかできなさそうな展開を一瞬考えた私は体がボドオボドオだあああ！！

で、タイトルクイズ第二弾！！次回タイトルはどれだ！？

A 『魑魅魍魎跋扈するこの地獄変、フェイト・グロリーリスターはここに居るが・・・しかし！！』

B 『マギステル・ゲート』

C 『麻帆良学園は自重ができてない、略して はがない』

D 『マホサイユのぼら』

E 『宇宙<sup>宇宙</sup>でやれと言ったら本気であいつらやりやがった！！』

F 『ヒューツ！！流石、ネギのプロデューサー！！・・・あれ、違ったの？』

G 『記憶になくとも親戚ですが何か？』

H 『マホドルマスター』

I 『なんだ、ネギま と思ったら違っじゃねーか！？』



さあ、どれだ！？（選択肢が多すぎてごめんなさい）

祝7万PV突破記念アンケート！・・・だが、諸事情で作者のテンションは激  
本編更新でなくてごめんなさい。

選択必修の英語を落としたから絶望の海に漂っていたのですよ・・・  
あはは。

来年の英語の時間が2つなのは精神的にくるものがあるよ。

ていうか、ほかの必修科目に被らないでくれよ！？

祝7万PV突破記念アンケート!!!・・・だが、諸事情で作者のテンションは激

ネギ(女)「祝!!!」

フェイト「何か微妙な数字だけど!!!」

フェイネギ「無理やりテンションを上げたい作者の都合により決定した、7万PV記念アンケート!!!」

紅雷「・・・いえーい」(雑誌を処分中の作者)

ネギ「さーて、唐突に始まりましたコーナーですが・・・」

フェイト「・・・いや、待ってネギ」

ネギ「何でしょうか、お兄さま?」

フェイト「作者が目が死んだまま黙々と漫画雑誌を処分しているんだけど・・・」

ネギ「・・・ああ、あれですか。何でも、父親が鬼のような完璧主義者で超人なものだから余計なこと怒られぬよう処分しているですよ」

紅雷「・・・何で出席率100%でDなんだよ、アイツは休んだ日

があるのにことかありえねえだろ(ブツブツ)「

フェイト「かわいそうに・・・振り分け試験でたまたま成績が良かったからって最高難易度でハイスピードな、それも担当がカナダ人教師のクラスに無理矢理入れられるなんて」

ネギ「そもそも今時、振り分け試験でクラス決めとかないでしょう？」

フェイト「まったくその通りだ・・・これがゆとりの結果か」

紅雷「こんなんでも22日から俺はやっていけるのかな・・・？また二の舞になるのがオチじゃないのかな？」

ネギ「すっごい、ネガティブになっていますね」

フェイト「そのうちやぐされて、地獄何とか結成しそうで怖いね・・・(ハア)「

紅雷「・・・今、俺を笑ったか？」

フェイネギ「言ったそばから!？」

「そんなこんなでアンケート開始」

分岐ポイントその一。

『もし明日菜が原作通りの明日菜の性格ではなかったら』

A 『原作通りで結構』

バカレンジャーなのは変わらない。というか説明いる？ツインテール。

B 『死んだ魚のような目をしたボクっ子』

基本的に毒舌家。あんまり言葉を口に出さずにいる。(知っている方は生徒会の一存の希咲雪海キャラだと思ってください)・・・だが、バカだなのは変わらない。ストレートヘア。

C 『ボクっ子だけど、活発そうな原作よりの子』

Bのようにネガティブ思考(?)ではなく、普通に男勝りの女の子。(イメージキャラ：天道ひより)

肩にかかるぐらいの長さのショートカット。

ネギ「・・・なぜにボクっ子？」

紅雷「最初はショートカットアスナを考えていたんだよ、そしたらこうなった」

フェイト「まあ、新しい発想だね」

分岐ポイントその二。

『超鈴音の存在はどうあるべき?』

A 『原作通り（ネギが男だった世界の超）』  
個人的に私の小説スタイルはこれ。イレギュラーと戦う超の姿が描かれます。

B 『オリジナル超（原作とは違う目的で事件を起こす）』  
たとえば、魔法世界崩壊とかそんな問題を抱えて事件を起こさなかつたりした超とか。

C 『完全に別人がそのポジションにいる（超なんていなかった）』  
何気にひどい展開。この展開だと中二病の方がポジションにつくんじゃない?

D 『中学生ですらない超（場合によっては幼女、もしくは高校生・大学生・先生）』

カシオペアの暴走で片が付く展開。行動理念は原作より。

フェイト「Cは既にどこかで読んだね」

紅雷「ああ、だからこの展開はお勧めできない。鳳凰院の方が来ちゃうからな」

ネギ「個人的に絡みたくないです」

紅雷「じゃあ、ちうたんとは？」

ネギ「千雨さんは別です。あの人は最高ですから!!」

紅雷フェイト「「どっという意味だよ・・・?」」

分岐ポイントその三・

『もし小太郎のキャラがまるで違ったら』

A『原作通りでいいんじゃない?』

ネギの男友達として登場するけど、基本的にポジションは変わらない。

B『やぐされ小太郎』

「・・・どーせ、俺なんか」が口癖の小太郎。ライバルとしてで

なく、ネギが眩しいから近くにおいて目指そうとしている。

C『色々とおかしいボケキャラ』

神原駿河的なボケ担当。みんなから突っ込まれます。

D『完全に神鳴流剣士』

刹那とは別の経緯で剣士となった小太郎。冷静な思考力を持っているがそれ故にどこか抜けている。

フェイト「そう言えば、小太郎ってキャラもいたよね」

紅雷「忘れてたのかよ・・・」

ネギ「無難ならA、面白さならC、シリアスならDですか・・・」

フェイト「Bは早速排除かい？」

ネギ「他の選択肢が魅力的だからネガティブな思考はちよつと・・・」

「

紅雷「アンケートの答え方は例えば、



? ? ?  
C B C

のような形式で答えていただきたい。・・・それでは次回の更新まで作者はテンション回復に努めるとしようか」

フェイト「期限は24日までだ、出来るだけ意見もつけ添えて感想ページで答えていただけるとありがたい」

ネギ「では、これからも『災厄女王の娘（仮）』を

」

3人「」「」「どうぞ、よろしく願いいたします!!!!」「」「」

祝7万PV突破記念アンケート！・・・だが、諸事情で作者のテンションは激  
来年の日程がマズイと俺終了なわけでした・・・

てか、選択必修が英語だけとはおかしいだろ！？

英語はできる奴だけやればいいんだああああああ、俺は日本人だ  
から日本語だけでいいんだあああああ！！！！

だが、ドイツ語は別だ。カッコいいからやる。

今回はアンケート結果その一の結果が出次第更新します。

## 更新再開と謝罪

どうも、初めまして紅雷です。

先日から家庭でトラブル続きだったためろくに更新ができませんでした。（詳しくは活動報告にて）  
まだ現在進行形で色々と悩みを抱えています。いつまでも読者の皆様を待たせるわけにもいきません。なので出来る限り早い更新を心掛けて少しずつ書いております。

なお、投票結果は簡易的に発表させていただきますが・・・

1・C

2・A

3・C

となりました。

感想以外でもメッセージ等で投票してくださいました方の数があり多く正直驚きました。

大学生の身なので色々遅れてしまいますが全身全霊でこれからは更新させていただきますので宜しくお願いいたします。

なお、誠に勝手ではありませんが次回タイトルは「第九話 麻帆良で自重したら影が薄くなって負けだと思っby何とか気合で生きている作者」とさせていただきます。

第九話 麻帆良で自重したら影が薄くなって負けだと思つboy何とか気合で生き

気合更新。

まだ40%の復活しか果たしていないが・・・そのうち何とかします。

第九話 麻帆良で自重したら影が薄くなって負けだと思つboy何とか気合で生き

明日菜 side

「あゝ……ねむい……」

自分の前方や後方には遅刻だけは勘弁と必死の形相で教室を目指す生徒たちが年齢を問わず騒がしく駆けていく。そんな状況の中で朝の新聞配達を終えたボクはノロノロと呑気に通学路を歩いていた。

「明日菜 ツ!!」

「……ん？木乃香？」

朝食は食べたが微妙に小腹が空いていた彼女は某10秒でエネルギーチャージが完了できるゼリー飲料を徐にカバンから取り出そうとすると、その寸前の所で寮の同居人にして親友の近衛木乃香が自分の名前を呼ぶ声を耳にする。

ゼリー飲料を戻してゆっくりと木乃香の声が聞こえてきた後方を振り返ってみれば、次の瞬間 景色が激流の川の如くのを目にした。

「今日は新任の先生を迎いに行くってゆうたやん！！ポーっとして  
いる暇はないでー！」

振り返り際に全力で左腕を掴まれた明日菜はこれまた全力で魔改造  
されもはやガンムに登場するドムのホバー走行に近い状態のロー  
ラースケートを履いた木乃香に引かれる形で僅かながら足を地上か  
ら遠ざけて宙を飛んでいた。

「・・・けど、どーせ学園長の知り合いで爺さんなんだろうから別  
にボク達が行かなくてもいいじゃないか」

そもそも生徒に迎えに行かせるとかおかしくないか？こっちは出席  
の都合とか色々忙しいっていつのに……………

不満をブツブツと言いながら不貞腐れているとこちらの顔を見もせ  
ずに木乃香は大きな声を上げた。

「朝食の時の話聞いてたん明日菜！？今日来るいう先生はイギリス  
から来た若い先生でうちの副担任になる予定の先生やってー！」

「ごめん・・・今日の占い観てて多分聞いてなかった」

確か今日の運勢は1位じゃなかったけど、2位か3位には入ってい  
たような気がした。あと、ラッキーカラーは赤だったかな？

「もっつ！そんな事はどうでもええんよ、占いならうちがいくらでも占ってあげるからな！！」

「いや、結構です」

「即答！？なんでや！？」

だって・・・木乃香の占いは当たり過ぎて怖いって陰では有名だし、お金を払わないと罰が当たるようなレベルらしいし。

いくら本人は無料でやってくれるからって、親友のボクがそんなこととはしたくない。別にケチっているわけじゃないよ？

朝っぱらから酔うようなスピード感を味わい気分を悪くしたくないのでとりあえず降ろしてもらつと小走り気味の徒歩を開始する。

151

「そんなことより、その肝心の新しい副担任は何処にいるのさ？」

「いや、先にうちの占いを何故断るかをやな・・・まあ、ええわ。噴水前あたりで待ち合わせているはずなんやけど」

はずなんだろうけど、全然見当たらないなあ。そもそも遅刻回避の為に生徒がごった返していていちいち特定の人物を把握できないし、詳細な情報が足りなさすぎてどんな人を探していいかよくわからない。

途方に暮れながらも一先ずは自分達も教室を目指そうと辺りを見回しつつ歩を進める。すると、見慣れたクラスメイトがふと視界に入



りこんだ。

「あ、えーっと、そのー・・・ありがとうございますゆー！」

「いえいえ、自分も少し急いでいましたし。困っている人を見捨ててはおけませんからね」

「でも凄いわよ、たった一人でそれも男三人を相手取るなんて！！」

「何か武術でも習っているのですか？」

目を凝らしてよく見れば、木乃香と一緒に図書館探検部に属している三人組だった。

彼女らは見慣れぬ黒いワイシャツとチラリと見える赤い胸のネクタイが特徴的な服装のおそらく外国人の少女に頭を下げて何やらお礼を言っているようだ。

どうも話を盗み聞きするからに3人は長身の不良生徒3人組にぶつかってしまい空気も読んでもらうこともなく長らく足止めされていたところを、偶然通りかかった金髪の少女に助けてもらったらしい。

「形意拳を少々・・・」

「へえ〜・・・で、夕映。『けいけん』って何？」

「形意拳というのは太極拳・八卦掌と共に有名な内家拳の代表格で

中国武術の一つです。二つと違って特に見栄えする大技がないのが特徴的です」

「よくご存じですね。ちなみに今上げていただきました二つも僅かながら心得がありますよ」

何故に西洋人がアジアの拳法を習得しているんだろうか？

外国人が日本食やらアジアの食べ物ヘルシーだから気に入っているとかなら聞いたことはあるけれどさ、流石に武術までとはねえ・

勝手に一人で明日菜がウンウン唸っていると気づかないうちに人氣が徐々に失せはじめていた。これに気づいたハルナは慌てて助けてもらった少女に別れの言葉を告げる。

「じゃ、私達はこれで!!」

「あ、はい!!職員室の場所もわざわざ教えていただいてありがとうございますね!!」

手を大きく振り、女子中等部の方へ三人組は駆けていく。

残された少女は左手首の時計を確認し、一人ポツンと取り残される形となった。

「・・・うん。予定では迎えの方が来て下さる予定でしたけれど、先程の慌ただしさを見るからにもう行ってしまわれたのでしょうか

「？」

行き交う人の数が少数になってくると普段見慣れない少女はより一層目立ってくる。

自分ももうそろそろ行かなければ遅刻扱いになってしまうので気になって仕方がないけれど立ち去る事にしたのだが

「いなーしゃるどりふとやー——————！！！！！！」

そこに何時の間にかいなくなっていた木乃香が右側から自分を轢き殺しかねない猛スピードで割り込んできた。

「そおい！！！！」

咄嗟の判断で空中へと舞い上がると後ろ向きに宙返りを果たし、「女子中学生衝突事故」によって重傷を負うことになるのを回避する。一応言っておくが彼女は特殊な訓練を受けている、よってごく普通の一般人である皆さんは絶対に真似しないで欲しい。

手を地についてバランスを保ちながら着地すると、言っても無駄だと分かっているけれど木乃香に対して抗議の声を上げる。

「スピード制限してっていつも言ってるじゃないかっ！！ボクだから避けられたけどさあ、他の誰かだったらどうするんだよ!?」

「大丈夫や明日菜、この靴に新しく緊急自動停止システムつちゆう装置を最近付けて貰ったからなあ」

ケロッと悪びれることなくあっさり驚きの新事実を告げる木乃香。  
・・・ええい、チャオと葉加瀬め！！おかげで余計に木乃香の暴走っぷりに拍車がかかったじゃないか！！

「これだからマッドサイエンティスト連中は・・・!!」

「言っておくけどなあ、この靴こうしたの鈴ちゃんやあらへんよ？」

「いやいやいや・・・あの連中以外にそんな魔改造できる人間がいるわけないじゃん」

居たら居たで物凄く説教してやりたいね、本当に。

『おいおい、天才科学者連中しかお前が魔改造した靴を造れないって思われているぞ。・・・いいのか?』

『良いんです舞鶴<sup>まいづる</sup>、お嬢様には少なくとも第三者からのプレゼントだと思われていますし気に入られているならばそれで私は満足です  
! ! !』

木乃香達が遠くから見渡せるとある教室の柱の陰にてサイドテールの少女のシルエットとその彼女の腰に付けられた微妙に金色の毛が生えている鶴のマスコット人形がぼそぼそと密かに会話をしていたのだが明日菜はその気配に残念ながら終始全く気付くことはなかった。

「おい、何をやっているんだせ　　むぐう! ?」

『「カロリー　イトでも食べて黙ってる(てくれ)、傭兵少女。今いいところなんだ・・・! ! !」』

「ひろいしふあいやっひえるうへに、ひほのくらいなあびほつほつむや! (訳: 一人芝居やっている上に、人の嫌いな味を突っ込むな! )」

一人の褐色巫女アルバイトの無駄な犠牲さえも気づくことはなかった。

さて、ボクの怒りもお構いなしに彼女は続けざまに今しがた仕入れてきたという噂の外国人教師に関する情報をこちらへと口にしてきた。

「それより大ニユースや、今度来る先生はうち達より一歳年下でオックスフォード大学を卒業しているんやて!!」

「へえ〜……………あれ？」

つて、ことはその先生は13歳？

あれれれ、労働基準法の存在は何処へ行ったんだろう。というかそもそもチャオ一味が中学生なのにチート科学技術やら飲食店持っているのすらおかしいのにこれ以上麻帆良は力オスになるのかな？楽しい分には別にどうってことはないんだけどねえ……いずれ就職した時に世間の常識と離れ過ぎたこの日常通りに暮らしていたら痛い目に遭うような気がする。

だからそこのお嬢さん、この麻帆良に来たからにはそれ相応に覚悟しておいた方がいいよって……………うん？あの子てつきり転校

生か何かだと思っていたけど制服着てないしまさか……

「でな、『金色の長髪』が特徴やからすぐに見つかるやろうなって……あれ、明日菜どうしたん？」

「……いや、ひよっとするとその先生とやらはあの子じゃない？」

指差す先にはさつきから噴水の前に腰掛けこちらに背を向けながら何かを……否、誰かを待っているような仕草をしている少女が一人おり、陽に照らされて風でなびいている【金色の長髪】が美しく彼女の存在を強調していた。

そしてまるで自分達とはいる次元が違うかのようなオーラすら放ち、何処となくボクに謎の懐かしさを醸し出している。

「きつとそっやな！うち、声かけてくるで！！」

「え、ちょ、ちょっと待ちなって木乃

」

木乃香、と言い終える前に彼女は行ってしまふ。こうなったら当たりである事を祈るのみだ。

……しかし今、ボクは何故木乃香を止めようとしたのだろうか？まるであの少女の顔を見るのを拒否するかのように、拒絶するかのように。

自分でもよくわからない心の迷いに悩まされている間に木乃香は少女に声をかけ終えて本人かどうかを確認している。

遠くからもよくわかる二人のやり取りをじつと観察していれば、座っていた少女は立ち上がり木乃香とお互い頭を下げあっていた。正直、時間も押しているのいい加減次の行動に移した方が賢明だと思ったボクは小走りで近寄り少女の背後数メートルへと近寄り声をかける。

「木乃香、そろそろ移動しないと本気で時間がヤバイよ。話なら移動しながらかした後にしよう?」

「ああ、そうやったな!・・・ほな、急いで行きましようか!」

「ええ、道案内よろしくお願いします」

おっとりしたような優しい声を木乃香に投げかけてボクに正面を向ける少女。そのボクが一瞬見るのを躊躇った紅と碧のオッドアイが特徴的な顔を眼にした瞬間

・・・全身に電流が走った感覚がした。

> i 3 2 3 0 1 — 3 0 0 6 <

「・・・ア・・・リ、カ?」



「え？」

少女の方も嘩然として明日菜と同じように固まっている。

なぜなら、明日菜が思わず呟いてしまったその名前は彼女にとって  
は 自分とそっくりな容姿を持つ母親の名前だったのだから。

「どうして……私の母の名を……？」

「え、あ、あれ……？何でボクは今

」

何で 知らない 誰かの名前を口にしてしまったんだ、それも目の  
前にいるまったく面識すらない外国の少女の母親の名を？

……わからない、どうして少女の顔を見てそう呟いてしまったの  
かわからない。

震える右手で額を隠し、奇妙な感覚に困惑する明日菜。

普段の彼女らしかぬ行動と姿に木乃香はただ口を閉ざし、黙々と移  
動するしかできなかった。

s i d e o u t

??? s i d e

「ついに来ましたか、彼女が……」

何処かの地下奥深くにある空間にて一人の男が木の根ばかり張り巡らされている天井を見上げ、静かに呟く。

「これから彼女には幾度となく試練が降りかかるでしょう……  
ですが、その先にはきつと」

貴方達を必ずや救う道があるはずですよ、と瞳を深く閉じて彼は霞のようにその場から消え失せた。……一冊の古本を机の上に残して。

そのタイトルの名は 『紅き翼は何が為に』、ナギが造  
物主に乗っ取られる前に書き残した世界で一つの戦記本だった。

s i d e o u t

第九話 麻帆良で自重したら影が薄くなって負けだと思つboy何とか気合で生き

またもやテンションが下がり気味。

いやね、BGMが「姉が泣き、父が怒る声」なんでね。

今回は部屋と紹介とある人物の回想になるかと。

「第十話 部下（生徒）に仕事をさせるたった一つのシニールな方法をしたら、物凄い匠が生まれました」

をお楽しみに。

第十話 部下（生徒）に仕事をさせるたった一つのシユールな方法をしたら、物

作者は狂気に目覚めたようです。

てか、1万字超えとか久々ですね。

明日はバイトなんですが、洗濯機でお亡くなりになった仕事のメモ帳はどうしよう？

第十話 部下（生徒）に仕事をさせるたった一つのシニールな方法をしたら、物

木乃香 side

……… 空気が重いなあ。

明日菜が見つ付けてくれたおかげで特にトラブルもなく無事に学園長室へ行けると期待していたのやけど、まさかこんな空気になるとは思いもしなかったで。

事情は詳細はよくわからへんけど簡潔に事のあらましを述べてみればやな、明日菜がネギちゃん（挨拶の時に名前は聞いた）の姿を見た時に何故か不明やけど彼女のお母さんの名前を口にしてもうたんや。

本人いわく、どうして知りもしないはずの初対面の人物の母親の名を言ってしまったのかまったくもってわからないらしいで。

ちなみにネギちゃんからその後に言われたんやけどな、ネギちゃんのお母さんの名前は諸事情で特定の人物の間でしか知られてへんらしいんや。

暗い話になってしまっけど彼女のお母さんは元々外国で有名な貴族だったんや（オッドアイは母親譲りのモノとも聞いた）。せやけど、ある陰謀に巻き込まれてもって命を狙われて今は隠居中で名前を変えて生活しているちゅう話や。

……確か何処かのサスペンスドラマで何とかプログラムで偽名を

名乗って、FBIの保護下に置いてもらう話が有ったなあ。  
本当に何で明日菜はいつもトラブルに巻き込まれるような行動ばかりするんやろうか？親友としてとても心配や。

まあそれはさておき、話を本題に戻さなアカンな。

幼い頃からお母さんと同じく命を狙われる立場位にいた彼女は特殊な環境下で教育を受けたため、その成果を出す課題・・・つまり、うちのクラスの先生を務めないといけないそうだ。  
自分より年下なのに、先生せなアカンとは・・・かわいそうに。

幸いにも幼い頃から守ってくれていたらしい義兄さんが同じく副担任としてサポートに入ってくれてくれるっていう話やから学園生活に関しては安心やと思う。後は彼女自身のやる気と根性だけが頼りやな。  
応援しとるで！！

けど、とりあえずはこの空気をどうにかしてえな？

流石の木乃香も沈黙状態が続くこの無言フィールドを片づけることはできなかった。

s i d e o u t

ネギ s i d e

・・・一体、これはどういう事なのでしょう？



待ち合わせていた今後自分の生徒のなる予定の木乃香さんと合流できたまでは良かったのですが、彼女の友人である明日菜さんが私の顔を目にした瞬間に事態は思わぬ方向へと進んでしまいました。なんと、私のお母さまの『アリス・スプリングフィールド』と偽名を名乗る前の『アリカ』という名前を彼女は口にしたのです。．．．お母さまの名前はウエールズの村の皆さんやごく一部の方しか知り得ないのに見ず知らずの初対面の学生が何故？

幼少の頃から私はお父さまとお母さまの過去の戦いについて詳しく、といっても大体の事だけです。が聞かされていたので自分のいる立場というモノを理解しています。

英雄ナギの娘であると同時に大戦の元凶とされてしまった「災厄の女王」の娘である私は、いつかお母さまの汚名を晴らしお父さま達が救おうとした魔法世界を真に救わなければならぬのです。

お兄さまが教えてくれたタイムリミットまであと数年．．．是が非でも答えを導き出さなければすべてが台無しになってしまうでしょう。故に私はこの麻帆良学園で自身の命を狙う輩と戦いながら地道に対策を練っていかねばなりません。

お母さまから「せめて、ナギに似ていればまだ狙われるリスクが減るといふのに．．．」と自分の容姿に関して嘆かれたことがあります。ですが、それはそれで面倒なことになるような気がしました。

なぜなら、お父さまに似ていた場合はおそらく無理矢理「二代目サウザンドマスター」になるよう強制でもされてとても歪んだ人生を歩んでいたかもしれないのです。付け加えて自分が男であったりお母さまが傍にいなかったりお兄さまが敵として私の前に立ちふさがっていたのならなおさらそうだった可能性が高いですね。

思い返せば、メルディアナ魔法学校時代は本当に苦労しましたね。

あからさまに攻撃魔法で狙い撃ちしてきたり、トラップで人知れず殺そうとしてきたり、食事に毒物から媚薬まで混入してきたり、セクハラまでしてきたりと完全に私を殺すか奴隷にでもするつもりのようにその場その場での対処に最初は時間を取られ慣れるまで頭を悩ます日々が続きました。

・・・まあ、色々あって結局は『社会的に』抹殺したんですがね、主に私が。

具体的に何をしたかといえばごく簡単なことで、私にちよつかいを出している方の個人情報（家族構成・過去のトラウマなどその他もろもろ）をすっぱ抜かせて頂きましてまほネットとかで流出させました。

勿論、関係のない家族の方には被害があまり及ばないよう心掛けて行いましたよ？あくまでターゲットは私を狙う人間だけです。

他にもわざと自分を危険な目に追い込んで決定的瞬間を激写させてもらったり（撮影：フェイトお兄さま）、魔法バレを誘発させる任務を押し付けたりしてオコジョ刑にさせてもらったり（協力：校長先生）しました。

実はそのおかげでメルディアナには殺人犯や変質者が一掃され、実力ある良識者が次々と就任し学力レベルが上昇したのはここだけの話ですよ

何時の間にか話が逸れてしまっているがそれはさておき、気が付けば3人は目的地である校長室へと辿り着いていた。

これ以上無言の場に留まりたくなかった木乃香は我先にと校長室へ突撃する。

「おじいちゃん、連れてきたでー！」

「おお、よかった！無事に連れてきてくれたのじゃな木乃香」

ちょうど先に来ていたお兄さまが学園長の傍らに立っていたので私は一先ず、木乃香さんが学園長と話している間に近寄り明日菜さんの件で耳打ちした。

「（お兄さま、至急お聞きしたいことがあるのですがいいですか？）

「（・・・ん？別にいいけどここに来る途中何かあったのかい、随分と考え込んでいるようだけど）」

「（はい、実は木乃香さんと一緒に迎えに来てくれた明日菜さんが）」

side out

フエイトside

簡潔に事の詳細をフエイトに伝え終えたネギは未だに額を押さえて唸っている明日菜をチラリと眺めながら今後の住まいに関して話を進めていた。

そんな彼女が抱いた強い疑問を聞いた彼は事態の收拾するために一旦考え込んだ。

「（まさか、あの『黄昏の姫御子』がこんな成長を遂げているとはね・・・正直予想外だったな）」

最後に見た時はまだ小さな体でツインテールの髪型だったのに、現在ではショートカットで一人称が『ボク』の女子中学生とは本当に変わり過ぎだと僕は思う。

多分、保護責任者のタカミチの口調がうつつたりした結果こうなったんだろうけど・・・主が見たら確実に驚くだろうな。

「（いや、今はそんな事を考えている場合じゃない。上手く言い訳をしなければならぬんだ）」

二人の関係は簡単に言い表せば「親戚」、もっと詳しく言うならば「末裔」と「100年以上前のご先祖」となるわけだがこの事をそのまま話すわけにもいかない。

そもそも言ったところで「何言ってるの、コイツ・・・？」と言われるのがオチだ。だから上手い言い訳でやり過ごさなければなるまい。

・・・ええい、タカミチめ。いくら師匠の指示だからと言って記憶を消すことはないだろう、記憶持ちならこんな事態にはならず済んだものを余計なことをしてくれ。

僕だって彼女には幸せに生きて欲しいとは思っているけどさ、大切な人との過去まで奪ってまでそうしようとは思わない。

人は過去を背負ってこそ前に進んでいくことが出来るんだ、彼女が背負いきれないのなら一緒に背負ってあげればいいだけの事だよ。

「（しかし、記憶なしで『アリカ』の名前をおぼるげに覚えているか・・・ならば）」

この場を乗り切る方法はただ一つしかない。

成功率は現状で思いつく対処法の中でダントツの勢いであるのだから上手くいくはずだ。  
ただし、ただ淡々とその偽りの事実を告げてもいまいちパンチがない。よって、とにかく勢いに身を任せて語ろうと僕は決意し学園長に念話を入れた。

「出来るだけ生徒とのコミュニケーションがしやすいようネギ君にはのう、木乃香達と共に女子寮でに住んでもらうことになるのじゃが良いかの？」

「そうですね。他の先生方に下手に迷惑をかけたくはないですし、こちらとしても同世代の方達の間で落ち着いて生活をしたいとは思っていますから」

「うちの部屋は確かロフト部分を使えば3人は住めるもんな、ええで！！これからよろしくな、ネギちゃん！！」

「・・・よろしく」

「はい、これからお世話になりますのでよろしくお願いしますね」

一応、学園長と相談してアリカは僕と近くの高級マンションで暮らしながら護衛し、ネギは彼女の命を狙う魔法先生・生徒が下手に近寄れないようにしつつ明日菜<sup>アスナ</sup>を護衛するという目的で別居することになっている。

麻帆良には一部を除き並の魔法使いしかいないから僕の方に関しては当然大丈夫だと思うし、ネギは修行の成果から言えばほぼ彼女に太刀打ちできる相手はいないだろう。また、受け持つクラスにはサムライマスターの命を受けて協力してくれる生徒がいるというから安心だ。

何でも事前に仕入れた情報ではその生徒は陰で『匠』と言われているとかいないとか………

『や、やっと完成した………!!』

『すげーな、おい!!約束の日ギリギリに仕上げたこのクオリティ……しびれるぜ!!』

HRまでの空き時間にサムライマスターの命を受けたという生徒は何やら京都の有名なお寺の模型を完成させ感動を噛みしめていた。

机に置かれた鶴のマスコットも荒ぶるダンスで興奮を表現している。

『・・・だから、朝っぱらからお前は何をしているんだせ  
おい、約束のモノは出来ているかっ!?!?』  
『だはっ!?!?』

突如として現れた金髪幼女に容赦なく突き飛ばされる褐色巫女スナイパーだったが、突き飛ばした当の本人はまったく気にも留めなかった。

『あ、はい!!今完成したところです!!』

『どれどれ。・・・うわ、何だこのクオリティ!?何だこのクオリティ!?!?』

『・・・何故二回言うんだ?』

呆れ顔で朝からテンションがおかしいクラスメイト二人に問いかける褐色巫女スナイパーは問いかける。まあ、当然まともな答えは返ってくるはずもなく

『『『大事なことだからだよ!!』』』

『何処がだ—————!?!?』



彼女は絶叫した。

ん？何か今叫び声が聞こえたような………いいか、それどころじゃないし。

では、そろそろいい加減本題を切り出すことにしようか。

「さて、話は変わるのじゃがの……明日菜君。君に話しておかなければならないことがあるのじゃ」

「主にネギと君の関係について、ね」

「私ボクと明日菜さん（彼女）の関係？」

思わず目を互いに合わせし首を傾げる二人。  
彼女達だけでなく木乃香も興味深く傾げて見守っている。

「明日菜君が口にした『アリカ』という名前・・・それはネギ君の母親の名前でな訳あってごく一部にしか知らされておらんのじゃよ」

「無意識的にしろ君がその名を覚えているのなら、いや・・・口に  
してしまったのならもはや話すしかないんだけどね」

なんとなく思わせぶりな話し方で次に話す衝撃の事実の信憑性を上げるフェイト。

彼は数秒の間だけ目を閉じた後、カツと目を見開いてその場にいた全員の視線を釘づけにした！！

「実は神楽坂明日菜、君は」

> i 3 2 6 5 3 | 3 0 0 6 <

「ネギの母親の妹、つまり彼女の叔母に当たるんだよ!!」

「『な、なんだってー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！?』」

皆が電流が走ったかのように硬直し、口をポカンと開けて驚いている。

だが、フェイトの意を決した猛攻はさらに続き止まることはなかった。

ここからフェイトによる嘘設定。

・年離れた姉アリカは当時激しかった暗殺の魔の手から絶対に妹を守るうと決意し信頼のおける神楽坂家の人間に妹アスナを預けることにした。(アスナから明日菜へ)

・しかし、その神楽坂家の人間がとある事件でこの世を去ってしまいショックで明日菜に記憶が混乱してしまう。

・療養を受け、生活できるだけの精神を取り戻したアスナは神楽坂の人間の弟子で同じく信頼のおけたタカミチに預けられることになったのだ!!

・でも、最近NGOとか出張が多いタカミチだからなあ〜ということとで今回は出来るだけ近くに居ようということになり、娘を代行で一先ず先生として向かわせ一緒に暮らせることにしました。(

今(11))

「とまあ、こんな具合だね」

何処からともなく引つ張り出してきたホワイトボードに説明を書き殴り懇切丁寧に解説し終わると、木乃香は挙手してまとめの言葉を口にした。

「なるほどなあ〜！明日菜の眼がオツドアイなのはネギちゃんのところの遺伝だったんやな！！」

「ボクにとってネギは・・・ええと、姪だっけ？」

「は、はい。今の話が本当ならば明日菜さんは私にとって叔母、明日菜さんにとって私は姪になりますね」

・・・よし、完全に信じてる。というか、二人がオツドアイ繋がりで本当に良かった。  
これで片方が普通の眼だったら証拠不十分で色々大変なことになっていただろうね。血液検査とかやられたら困るし。

何はともあれ明日菜のアリカ発言に纏わる案件はこれにて一件落着した。

s i d e o u t

刹那 s i d e

私、変わってしまったなと思うことがしばしばある。

別に眼帯を付けたスナイパーの人に変われと言われたから変わったわけではないけれど、気が付いたら私は【以前の自分】ではなくなっていた。

大切な幼馴染を救えず危険な目に遭わせてしまった後悔は未だなお心には残っているし、別に根本的な精神が失われたわけでもない。お嬢様を守る、そのたった一つの願っただけはたとえ自分が変わり果ててしまおうとも心の奥深くに残っていた。

では、何が私をここまで変えたのか？

この問いに答えるのには数分もかからない。私はただ【壊れる】ことを受け入れたのだ。

故に忌み子として迫害される原因となった翼の色や瞳の色に関して何のコンプレックスも抱かなくなった。

その象徴として染めきった髪・・・ではなく、瞳のカラーコンタクトは取り外しアルピノ特有の紅い瞳を私は露出している。

自分が興味持ったことはとことん極めて自分のモノにする、それが今の私のモットーであり生きがいの一つでもある。

・・・ああ、神鳴流は流石にそう簡単に極めれるものではないのでここでは割愛してしまうが、以下のようなものが現状の私の趣味だ。

・釣り

まあ、普通と言えば普通です（ワカサギ釣りが最近無性にやりたいです）

・ペーパークラフト

動画サイトで公開したら「リアルすぎてワロタwww」と沢山書き込まれた。主に鳥か京都の観光地を再現している。

・陶芸

湯呑しか作ったことがない。一時期部屋に置き過ぎて龍宮に怒られた。

・腹話術

路線を変えて習得してみた。結果的に舞鶴爆誕。ちびせつなど3人で最近駄弁っています。

・絵

最初は画伯とか言われはしたがそこからへんは気合で乗り切り、今ではゆるい絵ばかり描いてる。

・PCゲーム

別にエロいのをやっているわけじゃない。ブロックで家とかつくるゲームをやりまくっている。(最近ちうさんとキティさんとネット越しで仲良くなった)

・大食い

確か超が制限時間付きメニューを出した時に我先に飛びついたのは覚えている。何度も期間中に挑戦したら「・・・これで勘弁してほしいネ」と特製中華まんを渡され参加拒否された。

・二二 技術部

「なんとなく近未来的に改造してみたシリーズ」を定期的にUPし続けている。最新作はお嬢様のローラースケート正式名称『疾風ノダイナミックストリームVer72』。

龍宮はよく「刹那、お前は自重というモノを知らないのか？」と口にするけれど知ったことではない。

自重しすぎて友が守れないのなら自重しないで私は友を守る、それだけのことだ。それ以上それ以下もない。

刀一筋で生きるよりも様々なことを経験して生きた方が将来的にもきっと良いだろう、と長に呼び出された9ヶ月前のあの日に言われた言葉に従って私は今生きているのだ。

・・・理由は、その日が【以前の私】が壊れた日であり今の【変わり果てた私】が生まれた日なのだから。

「着いたよ、刹那君」

「あ、はい！ありがとうございます高畑先生」



考え事をしていたら気付かないうちに長と待ち合わせている旅館へと着いていたようだ。

今日は何やら重大な話があるとということでもわざわざ長は京都から離れて東に進出してきたそうなのだが、一体どんな要件なのだろうか？高畑先生まで呼ばれているのが実に気になって仕方がない。

「……ま、僕はどちらにせよ『関係者』だからね。断るとか関わらないとかそういう選択肢はないんだよ」

「『関係者』……？（紅き翼のメンバーだったことは聞いているけれど、今回の話がその関係の話なら私は必要ないんじゃない？）」

西の関係なら私のみでいいし、紅き翼関係なら高畑先生だけでいい。なのに、二人とも揃っているとはおかしいと思う。

長の性格から二人を交代交代で相手するなんてするはずもないし……  
……うーん、謎すぎるな。

疑問を抱きつつ、しんしんと降り続ける雪の景色の中から一変し伝統感溢れる旅館内へと入り込むと簡単に手続きを済ませて目的の部屋……長が待っている広い畳部屋へと向かう。

「刹那です、ただいま到着しました。高畑先生もご一緒です」

「ご苦労様です、どうぞ入ってください」

「失礼します」

声をそろえて入室した私達は長が座るのを待つてから座り、事前に出されていたお茶をすする。外が意外と寒かったので温かいお茶は体が暖まるからとても嬉しかった。

「・・・すみませんね、お二人とも今は休みだというのに呼び出してしまって」

「いえいえ、詠春さんの直々の要請とあらば行かないわけにはいきませんからね。自分も話したいことがちょうどあったりしましたし・・・」

「お嬢様の守りに関しましては信頼の置ける者に任せておりますのでご安心ください、長」

ちなみにその信頼の置ける者というのは龍宮は勿論の事、エヴァンジェリンさんも含まれていたりする。

あの人、昔は機械音痴だったらしいが暇な時間を利用してコツコツと勉強していたらしい。彼女とは某ブロック建築ゲームで偶然知り合ったりして意気投合した。

「そうですね・・・では、早々に話を切りだすことにしましょうか」

こちらが聞く準備万端なのを確認し終えた長は軽く頷くと立ち上がり、まだ降り続けている雪が見える窓へと近寄って景色を見つめながら重く閉ざした口をゆっくりと開き始めた。

「実はですね・・・私の独自ルートから仕入れた情報なのですが、ナギの娘  
『ネギ・スプリングフィールド』君の修行内容が判明しました」

「!?!?.....それは本当ですか？（修行内容と修行先が一番の問題だな・・・魔法世界行きは絶対に何が何でも阻止だけ）」

思わず立ち上がるタカミチ。そんな彼を気にせず刹那は冷静に話の内容の分析を開始する。

「（長の友人であり既に死亡したとされる英雄ナギ関連の話か・・・しかし、何故だろう。私がいなければならぬ理由があるような気がしてならない。しかし、娘がいたとは知らなかったな。やはり父親譲りの力とか持っているのだろうか？）」

「ええ、本当です。・・・彼女の容姿そして立場上、良からぬ圧力がかかってもおかしくはなかったのですがね。一応は妥協できる場所への修行となりました」

外の景色から目を離して少しずつ歩き始めた詠春。

彼の顔は満面の笑みとはいかないものの僅かながらに笑みが浮かん

でいた。

「ネギ君の修行内容、それは 『日本で先生をやる事』 ・ ・ ・  
つまり、『麻帆良学園で先生をやる』ということだったんです」

「『 ええっ!?!?』」

なんと無茶苦茶な内容だ、何歳かはわからないが恐らくはまだ自分  
とさほど変わらない年齢だろうに先生を ・ ・ ・それもお嬢様がいる  
麻帆良学園でするなんて!!

警備の危険度が増大する恐れだつてある、正気なのか決定者は!?

「私も最初はこの話を聞いた時に悩みました。決して安全とは言  
切れない麻帆良で果たして彼女が生活していけるかどうかをね ・ ・ ・

「ただでさえ命を狙われる立場にありますからね、ウェールズに引  
き籠るよりかはマシかもしれません ・ ・ ・」

「 ・ ・ ・あれ、『命を狙われる』?どうしてその単語が出てくるんだ?  
魔法使いの間では英雄ナギは憧れの存在なのだから、その娘である  
ネギという子は大切に扱われるはずだと思うのに。」

この気になった点をすぐさま二人にぶつけてみると私のさっきまで  
の予想を裏切る事実が明らかになった。

「実はね・・・ネギ君は父親にではなくて母親似なんだ」

「それも今、魔法世界ではタブーとされる人物・・・『災厄の女王』こと、《アリカ・アナルキア・エンテオフユシア》そっくりでね」

「 なっ!?!? 」

・・・聞いたことがある、大戦の元凶とされるテロ組織『完全なる世界』との関与などを疑われて処刑されたというウエペルタティア王国最後の女王だったか。

だがしかし、彼女は公式記録では大戦終結から2年後に処刑されているはず。・・・まさか。

「公式記録は半分嘘で半分本当なんだ。ようは、処刑は執行されたが死亡はしていないってことだよ」

「私達が直々に介入して助け出しましたからね。・・・あの時はとにかく暴れることだけを考えていました」

長ー！ー！！貴方、当事者だったんですか!?!?

譲り受けた夕凧の歴史の影にあった知られざる戦いの記録を知った刹那はしばらく驚愕の表情のまま動かなかった。

しばらくお待ちください

唐突なアイキャッチ

> i30948 | 3006 <

ネギ「災厄女王の娘……へくちっ!!」

さて、刹那が再起動して話を続けられる状況になったので今度はタカミチが立ち上がって話を開始する。  
彼は彼でどうしても伝えなければならなかったことがあったようだ。

「詠春さん・・・ネギ君が麻帆良に行くのは良いのですが、例の彼件を刹那君に話しておかねばなりませんよ」

「・・・そうでしたね、彼が彼女の傍にいる以上常に誰かが警戒し続けなければなりませんから」

いまいち今度の話の内容をわかっていない刹那の為にタカミチは事前に用意しておいたファイルを彼女の前に置き、詠春と同じくゆっくりと歩を進める。

彼が机に置いたファイルには白髪の青年『フェイト・グロリースター』なる人物に関するデータが記されていた。

「この人物は・・・」

「フェイト・グロリースター、メルディアナ魔法学校教師であり最高学年の学年主任を務める若い先生です。ネギ君とは義理の兄妹関係にあり本人曰く護衛人も務めているそうですね」

「同時に母親のアリカ様の護衛も兼任しているというが、いささか彼の経歴に問題があつてね・・・」

書類を見るからに特に不審な点はないのだけれど、また長達しか知り得ない事実でも隠されているのだろうか。

「彼は・・・私達が大戦時に戦っていた完全なる世界の幹部と瓜二つなんですよ、外見が」

「本人は『自分は別人だ、記録を持っているに過ぎないよ』とまあ、関係をおつさり認めただけだね。それが問題なんだ」

何故、敵だった組織の関係者がわざわざ宿敵の娘を守るような行為をしているのか。

何故、宿敵の娘をわざわざ鍛えたりしているのだろうか。

何故、そのネギという子は警戒すらないのか。

数えきれぬほど疑問が次々と刹那の頭に湧き上がる中でタカミチは言葉を続ける。

「記録、つまり記憶を共有または引き継ぎしているということは『完全なる世界』に造物主の使徒を幾重にも創り出す技術があるという事。ここから察するに彼と同型の存在が彼らの方にまだいて活動している可能性が高いんだ」

「フェイトですら現状で動いている使徒の情報は知らないというからどうしようもないですが、確実に新たな使徒はいずれ行動を起こすでしょう。その際に何も対策を取らないでやられるわけにもいきません」

「だから、将来的に2代目紅き翼を編成し戦いに備える必要がある」

「・・・では、私はそのフェイトという人物を監視しつつネギ・スプリングフィールドの護衛に加わればいいのですね」



「強いて言えばそうなります。木乃香の護衛で忙しいとは思いますがどうかよろしくお願いします」

「はっ、任せてください！」

頭を下げてまるで結婚相手に子供を託すようなお願いをされてしまえば断るわけにもいくまい。

私ももしも男だったのならきつと今以上に「任せて下さい！」と声を大きく叫んでいたことだろう。

責任持つて護衛にあたる事を改めて告げた刹那は痺れかけた足で何とかバランスと保ちつつ立ち上がると、自分を囲むように立っているタカミチと詠春に向けてたった一つこれまでの話とは何ら関係のない疑問をぶつけることにした。

> i 3 2 4 2 8 — 3 0 0 6 <

「……………なぜ、私の周りをグルグルと回っていたんですか？」

しかも、二人して。

呪いですか、何かの呪いなんですか？

確かに西では呪術を使いますが、こんな呪いのかけ方とか聞いたことありませんよ？  
かごめかごめですか、ねえ？答えてくださいよ、視線を逸らしてないで。

「……何のことだい、まったくわけがわからないよ？」

逃げないで説明してくださいよ、男でしょ貴方達……。

後日、詠春の自室にて部下に確実に仕事をやらせる方法について書かれた本が見つかって刹那にキレられたというのはまた別の話である。

s i d e o u t

第十話 部下（生徒）に仕事をさせるたった一つのシユールな方法をしたら、物

今回の出来事を簡単にまとめると・・・こうなる。

- ・この空気どうにかしてby木乃香
- ・ねえ、私を狙うとか馬鹿なの？死ぬの？byネギ
- ・麻帆良のキバヤシとは僕の事だ！！byフエイト
- ・レッドアイズ自重しないせつちゃんを召喚！！by詠春

うん、カオスだろ？

では、久々にタイトル当てクイズ。

A 『必要以上に若さゆえの過ちを行えば、自分を殺すことになるぞ？by紅い目コンビ』

B 『別に、お仕置きしてしまっても構わないのでしょ？』

C 『ウソダンドドコードン！！私聞いてないネ！！by超鈴音』

D 『MOYASHI』

E 『英雄になるとか自分から言っちゃダメ！！言ったら・・・おや、

誰か来たようだ』

次回はいよいよ教室デビューですね。

登場人物設定〜TURN2〜（前書き）

いや、すみませんね。小説の更新ではなくて……

でも登場人物がそろってきたので少し紹介をしておきますよ

イラスト追加（12/10）

## 登場人物設定〜TURN2〜

桜咲刹那

> i36902 — 3006 <

京都から木乃香を守るためにやってきた神鳴流剣士で、烏族と人間のハーフ。白い翼が禁忌とされて幼少期は迫害されていたのだが、詠春に引き取られ木乃香の幼馴染として育った。過去に木乃香を救えなかった責任を感じて彼女とは距離を置いているものの詠春の助言もあつてか間接的に接触を図るようになった。また、瞳はアルピノ特有の紅い瞳のままにしている。

そして、自重しないでいるために木乃香を大切に思う心も自分の欲望もストッパーが外れている状態なので原作よりキャラがとても壊れている。しかし、戦闘力はそのまま。戦闘面以外で魔改造されているため陰では『匠』と称されている。エヴァとは結構仲がいい。

この小説において味方側のライバルとなる予定の少女。

龍宮真名

> i36901 — 3006 <

褐色巫女スナイパーでも中学生には思えない少女。この小説において突っ込み役の一人になる。

刹那やエヴァが色々とやらかすので胃が最近やられているらしい。

作者曰く、「龍宮いじめが基本」。

## 神楽坂明日菜

> i36903 — 3006 <

原作ではツインテールのおバカキャラだったが、この小説においてはタカミチの口癖がうつり一人称が「ボク」になっている。さらに髪型がショートカットでもはや原作の面影すらない。唯一、共通点があるとすればそれはおバカであることだけである。（勉強においてはバカ、思考力などはちよい天才）  
フェイトによってネギの叔母であると告げられている。

## 近衛木乃香

> i36900 — 3006 <

特に相違点はないが、若干アグレッシブになっている。というか百合気味のおっぱい魔人<sup>ソムリエ</sup>。  
刹那が密かに魔改造したローラースケートが今一番のお気に入り。

## エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

> i36906 — 3006 <

ナギに対する思いなどは変わっていない。ただし、機械音痴からパソコン中級者ぐらいにはなっている。刹那とは同じPCゲームで関わりを持つようになり、何だかんだあって仲が良くなった。自宅では家庭菜園をしていたりする。ネギに対する気持ちは今のところ不

明である。

タカミチ・T・高畑

> i36905 — 3006 <

序盤から災難だった男。フェイトからは「余計なことをしゃがって・  
・」と明日菜の記憶関連で少し思われていたりする。しかし、デ  
スメガネの異名は伊達ではない。詠春やクルトとは原作より繋がり  
を持っていたりする。

超鈴音

> i36904 — 3006 <

ネギが男であった一応原作の世界からやってきた。しかし、ネギが  
女性であり父親似ではない時点で彼女の望みは果たして叶うのか否  
か……。未来では敬愛した科学者がいたとかいないとか。



登場人物設定〜TURN2〜（後書き）

短いですが、今回はこれで勘弁です。

これから執筆に戻りますので次回の更新をお楽しみに！

挿絵が現在とんでもないことになっているけどそれは更新を待って  
ね！

**タイトルロゴ公開&14万PV記念更新!!・・・なんだけど、話をしようかっ**

せっかくタイトルロゴを公開できるというのに今日の私はキレています。

気分を害されるかもしれないので、この更新内容は読みたくない方は読まないください。



紅雷「まあそれはいつもの事だけど（オール優とか取れて当たり前じゃないって言ってるのによ・・・あんじゃろお）、今回は違うよ」  
ネギ「ではどうされたのですか？」

紅雷「実はだな、やっと（仮）が外れて（パチンツ）下のような感じになったのに・・・」

> i333184 | 3006 <

フェイト「・・・デカいね（だが、いい感じだ）」

ネギ「・・・デカいですね（でも、いい感じです）」

紅雷「世の中で蔓延っている『無関心』『不干涉』のせいで私の（正確には祖母の）飼い猫が車に轢かれてしまったんだよ!!」

二人「・・・え!?!」

紅雷「幸いにも命は今のところは大丈夫みただけで後ろ足・・・多分、左かな？そっちがやられて上手く歩けないみたいなんだよ」

フェイト「・・・いつ頃気づいたんだい？」

紅雷「朝の9時ごろかな。ちょうど大学の講義はまだだったし冷蔵

庫の中身がなかったからおばあちゃんの代わりに買い物に出てたんだ。そしたら、行きにグレ（猫の名前）が道路にいてさ・・・その時はいつものようにゴロゴロしていると思っていたんだ、元氣みた이었다し。でも、その時は氣付くべきだったんだよ、動けないから道路にいたんだって・・・」

ネギ「その後どうなったんですか？」

紅雷「買い物を済ませて帰宅してみると、祖母がグレの応急処置をしていた。幸いにも出血はなかったようだけど上手く歩けないようだった。だから、病院に連れて行きたかったけれど・・・大学の時間が迫っていた私は何もできなかった。おばあちゃんは遠出が無理だろうし・・・」

フェイト「で、結局どうしたんだい君は？」

紅雷「休み時間に家に電話して大丈夫か確認したりした。帰ったらすぐに様子を見たさ。でも、あいつは元氣なのか元氣でないのかよく分からなかった。そして今は外で寝てるっぽい」

ネギ「ぽいって・・・家に入れてあげなかったんですか？」

紅雷「入れたさ・・・でも、タイミング悪くトイレに行きたかったようですね、外に出てもらったよ。そして玄関近くの小屋の上にはずなんだけど今はどこかに行ってしまった」

ネギ「猫は死を予期すると飼い主から離れるって言いますし・・・不味くないですか？」

紅雷「ああ、だから心配なんだ。それにあいつは・・・おばあちゃ

んにとって大切な猫だからな」

フェイト「というと・・・？」

紅雷「元々、グレは誰かの飼い猫だったらしいんだ。でも、飼い主がどこかへ引越してしまつたらしく置き去りにされて・・・そして祖母と出会つたんだよ。最初の内は警戒していたらしいけど餌をやっていたら次第になつて来て一緒に暮らすようになったんだ。年から考えたらあいつはもう100歳ぐらいいつてるんじゃないかな？私が小学生の時にはもういたし」

ネギ「思い出ある猫なんですネ・・・」

紅雷「・・・うん。だから、許せないんだ！！道にいたなら持ち上げて退ければいいのにお構いなしに轢いた奴がな！！」

フェイト「・・・『無関心』『不干涉』、社会に蔓延するこれらが原因か」

紅雷「そうだな。第一、最近の人は命を軽く見ているんだよ。それは人に飽き足らずすべての生き物に対しても！！」

ネギ「そうですね・・・私たちがこうして生きていられるのは他の生物の命をいただいているからですもんね」

フェイト「それだけじゃないよ。科学の発展の影には多くの犠牲があるんだ。高々というけれど僕達人間は勝手な都合でネズミの命を奪っている」

紅雷「犠牲なしじゃやっていけないのはわかってる。でも、私たちはどこか最近命を軽く見ていないか？誰かが自殺しようが殺されようが関わらないようにしてないか？」

フエイト「命の重さはさ、計れるものではないしお金で買えるものではないんだよ。また、大きい小さいの大きさもありはしない」

ネギ「だから、いくら私達人間が高度な知的生命体であろうとも命の基準を定めていい訳じゃないんです」

紅雷「簡単じゃないかもしれないけどさ、私達人間はもっと命を大切に思っただ方がいい。その為にやれることはいくらでもあるはずだ」

フエイト「今回の話を聞いて少しでも共感してくれた方は明日からでもいいから何か『命』に関わる何かに関わってほしい」

ネギ「では、気難しい話しをしてしまいましたが一旦ここで別れの時間です」

紅雷「前回は辛いことがありました、何とか執筆を続けていくつもりですので読者の皆さんはこれからも」

三人「災厄女王の娘、運命を宣告せし天秤をどうか、宜しくお願  
いします！」





タイトルロゴ公開&14万PV記念更新!!・・・なんだけど、話をしようかっ

いろいろ偉そうに語ってごめんなさい。

でも、誰かに伝えておきたくて・・・

第十一話 匠「MOYASHI」・・・それは、神が創り出した神秘の食べ物

更新が遅れて誠に申し訳ありません。

猫が死に色々ありすぎてペンを取ることがしばらく出来なかったのです。

そして、一部友情出演キャラがいますが彼が今後物語に干渉することとはまずないのでご注意を。それ関連の批判はできればやめてくださるとありがたいです。

あと、今回は挿絵に一部実写が含まれますのでご注意ください。

刹那 side

・・・暇だ。

毎日のように朝から龍宮をいじり倒したわけだがどうも面白みがいまいち足りない。

やはり何かこう・・・刺激的な感じが欲しいな、うん。

「というわけで、龍宮。一分間で笑える物凄く面白い話を頼む」

「ハードル高っ！！というか、いきなりだなおい!？」

「もしくは全米が涙するほどの感動的な話を頼むぞ、龍宮」

「エヴァンジェリン、貴女までか!？」

いやだって、退屈なんだもん。

新任の先生（新たな護衛対象兼仲間）が来るのはわかってはいるけれどそんな直ぐにやって来てはくれないだろうし（書類の手続きとかその他もろもろの調整とかで）、私の元気の源たる木乃香お嬢様はその関係で明日菜さんと一緒に今教室にいないし・・・。

だったら、少しでも気を紛らわすために今こそ龍宮の本気をこの目で見届けるべきだと私は思う。

「さあ、どうぞ!」

「無理言うなバカ、朝っぱらからそんなくだらない事で本気出せるか!」

「……えーっ」

「相変わらずの息のあったリアクションだな!……そして、一緒に反響するんじゃない絡繰」

「……何のことでしょう?」

おお、茶々丸さんだ。エヴァンジェリンさんと一緒じゃないと思ったら今日は葉加瀬さんの所から登校したんですね。

そして、可愛らしく首を傾げているところ凄く……グツジョブです。

「……刹那さん鼻血が出ています、ティッシュを」

「おっと……ありがとうございます、茶々丸さん」

気づかないうちに鼻から垂れていた鼻血を差し出されたティッシュ

で私は拭き取る。

すると、隣にいたエヴァンジェリンさんもまた何か和んでいそうな表情をしながらちよろちよろと鼻から出血していた。

「わかるか刹那、茶々丸の可愛さが・・・」

「ええ、思わず抱きしめたい衝動にかられますが流石にやめておきます」

「だろうな、私はマスターだからやれないことはないがお前が朝からやったらただの変態という名の淑女だもんな」

「・・・それ以前の問題なんだがなあ（この二人、何で日常だとこんなに違うんだ？）」

戦闘面ではいたって真面目な二人のだが日常では人が変わったようにおかしな・・・いや、愉快的性格へと成り果ててしまうこの現状に龍宮は呆れ、そもそも会って暫くは二人は仲が良いとは言えない状況だったのに何だかってこんな変人になってしまったのだろうか  
と思考する。

余りにも唐突の変貌を二人は遂げたので経緯をよく知らない彼女にとって疑問だらけなのだ。

「なあ、刹那・・・何時頃からそんなにエヴァンジェリンと仲が良くなっただ？出会って間もない頃はお互い警戒し合っていたというのに・・・」

「ん？・・・ああ、何だそんな事か。別に私とエヴァンジェリンさんは特別なことをして仲良くなったわけじゃない。まあ、強いて言うのならな」

「言っのなら？」

「私が色々つぶつ切れたということだな！（どや顔）」

「・・・経緯をちゃんと話せ、でないと蜂の巣にするぞ」

何い、今ので伝わらなかっただど！？そんなバカな！！

「残念だが正確に言っても大体そんな感じだぞ、龍宮？」

「エヴァンジェリン・・・一体それはどういう意味だ？」

すかさずフォローに入ってくれる我が同志、エヴァンジェリンさん。彼女はご丁寧にも私と仲良くなった経緯をお頭の悪い褐色巫女スナイパー龍宮真名へ説明してあげた。

「なに、最初こそ私は刹那が過去のことを何時までも引き摺ってウジウジしているのが嫌いだったさ。だがな、こいつが1年の3月頃に一度近衛詠春に呼び出された後・・・近衛木乃香のためなら自身の欲望などどうでもいいというそれ以前の姿勢が嘘だったかのよう  
に欲に溢れ始めたんだよ」

「理由は簡単で、長に麻帆良学園での私の様子が伝わっていて『自分の欲を捨ててまで護衛して欲しいとは頼んでいない』と説教されたんだ」

「それでもって手当たり次第に刹那は興味を持った様々な事に手を染めるようになり、しまいには私がハマっているネットゲにすら手を付け間接的に友人となった後でお互いの正体が判明し直接的な友人となったわけだ」

「なるほど・・・って、二人ともパソコンできたのか！？てつきり機械音痴だと思っていたぞ・・・」

「まあ、そこそこのレベルぐらいなら私も扱えるさ、世間一般からみたらまだまだ中級者レベルだがな。（1998年頃から地道にちよくちよく練習していた）いつかは投稿した動画に『違和感仕事しろ』とタグ付けされるようなMADを作れるような上級者になりたいものだ」

「私はエヴァンジェリンさんと関係を持つ前に出来たネット越しの友人に教えてもらったりしたら、いつの間にか某動画サイトでは『匠』だの言われるようになってしまったよ（やれやれ）」

確か最近エヴァンジェリンさんが投稿しているシリーズの名前は『古風な日本語を話す金髪少女のマンガクラブ生活』だったか。ゆっくり実況が増える中で外人でしかも幼・・・ゲフンゲフン、若い少女と珍しいと評判で何回か共演を果たしたこともあったな。（本人の希望とかで）

代わって私は『芸術的な匠VS爆発的な匠』シリーズで日々、緑色のリフォーマーと激戦を繰り広げつつ作品を作り上げているわけだ

が、今度機会があれば別のゲームの実況をエヴァンジェリンさんともしようかなと考えている。ほら、例えばホラーゲームとか。

今後の予定を満足気な表情で刹那が思考していると不意に前の方のドアが開き、学園長室にいた木乃香と明日菜が教室へと戻ってくる。毎朝のように明日菜が木乃香にいじられているかと思えばその様子は全くなく、むしろ妙に落ち込んでいるように見られる明日菜を心配しているようだった。

『はぁ・・・朝から色々ありすぎて頭の整理がつかないよ・・・』

『そんな深刻に考えへんでもええんやないかな明日菜、普通にしたらええと思うよ』

『でも、状況が状況だし・・・ああ、ボクが伯母ボクが伯母ボクが伯母ボクが伯母ボクが伯母あゝ！！』

『あ、明日菜あ！？しっかりとるんや！！』

頭を急に抱えだしブツブツと虚ろな目で呟き出した明日菜を必死にフォローする木乃香。

彼女の慌てっぷりを遠くから目にしていた刹那達は頭に？マークを幾つも浮かべながら会話を再開する。

「な、何があつたんだ・・・神楽坂の様子が珍しくおかしいぞ？」



「わ、私に聞くな……刹那何か知らないか？」

「いや、学園長室に二人が来客を一人連れて入ったのは知っているが……それ以上のことはわからないぞ？」

第一、入った後は教室で龍宮いじりをしてたしな。

「……来客？それはまさか例の奴の」

「ええ、エヴァンジェリンさんの予想通りの人物ですよ。お嬢様達が戻ってきたことですし、もうそろそろ来るのではないでしょうか？」

一先ず立っていないで座ることにすると予鈴がちょうどよく鳴り響き、騒がしかった教室が次第に静かになっていく。

そして、コンコンと前方の扉がノックされ開かれると見慣れぬ金髪の少女がひょっこりと顔を出した。

同時にクラス中は一瞬にして緊迫した状態へと陥った！！

『(げっ……ヤバッ!?)』

……なぜならば、少女が開いた扉には学校でのいたずらの中で特に有名な黒板消しトラップが設置されていたのだ。

本来なら担任であるタカミチの頭にクリーンヒットする予定であったものが何の運命の悪戯なのかネギの頭部へと刻一刻と接近する。彼女が何者であるのかを知らない過半数のクラスメイトは最悪のケース『転校生への初登校いじめ』を想像しどついても阻止しようと近場の人間に指示した。

もう、遅いかもしれない・・・自分達はとんでもない過ちを犯してしまった、と既に諦めている人間もいる中で刹那らは自分たちにも何かできることはないか模索する。

「(た、龍宮っ！！早く狙い撃って彼女を助けてあげてくれ！！)」

「(ダメだっ、この距離で撃てば周りに被害が及ぶぞ！！しかもバシる！！お前が適当に気で阻止しろ！！)」

「(ちゃ、茶々丸！！ろろろろろろ、ロケットパンチだ！！)」

「(・・・ダメです、理由は龍宮さんとほぼ同じです)」

結局何もすることができずおろおろすることしかできなかった四人はもはやいるかどうかさえわからない神に祈るほかなかった。

きつと、こういう時に限って奇跡が起こって黒板消しをネギが見事回避してくれたりするのだらうと儂い期待を胸に衝撃の瞬間から目を背けるクラスメイト達。

そんな彼女らの思いが奇跡を呼び起こしたのか、次の瞬間

聖母の手が差し伸べられた。

「……あ、ありがとうございます。しずな先生」

「いえ、いいのよ。貴女の頭に直撃しなくてよかったわ」

そう、教室に入ろうとしたネギの後ろには指導教員として待機していた源しずながいたのだ。

ネギはドアを開いてすぐに黒板消しの存在に気づいたのだが回避するために迂闊にしずな先生がいる後ろに下がるわけにもいかず、かと言って二段構えがあるかもしれない前に進むわけにもいかなかった。

別に自分の手で受け止めても良かったのだが黒板消しについてたチョークの粉の量が未知であり下手に受け止めたりすれば、健康を害する恐れがある成分が混入した空気を直に浴びてしまっただろう。故にしずな先生から教室へ来る途中に受け取った出席簿を傘代わりに頭上へ展開しようとしたのだが、それよりも早くしずな先生がそ

の防御方法に気づき対処してあげたというわけだ。

「では、改めまして……………」

頭上からの黒板消しアタックを凌いだネギはさっさと目的である教壇の前に立とうと歩を進める。

既にチラリと内部に仕掛けられたトラップの位置を確認しているので、足首辺りに張られた細いロープを難なくスルーし突き進んでいくと教壇まであと2メートル弱と迫った。

……と、ここで何故かネギはあからさまに仕掛けてある玩具の矢とバケツに目を向けつつ立膝のまましゃがみ込む。

「何かの拍子で降ってきたら困りますから

ねっ！！」

足に力を込めて力強く地面を蹴ると彼女はまず初めに玩具の矢を素早い手つきで掴み回収すると、水が入ったバケツの持ち手を空いていた手で握り締めこぼさないように円を描きながら振り回す。

軽く重力を殺しつつ安全かつダイナミックに着地した彼女の右手にはバケツが左手には玩具の矢が握られていた。

『・・・お、おおっ！！』

予想外すぎるその動きに思わず感動の声が上がります。

「いた・・・この世界に神はいたぞ！！」

「・・・奇跡だ、これは奇跡としか言いようがない！！」

「祭りだ祭りだっ！！茶々丸う、例のアレをスタンバっておくんだぞ！！」

「了解しましたマスター、アレ（・・・）ですね」

しずなの奇跡的防御に続き、ネギの神業トラップ回収を目にした4人はそれぞれ歓喜の言葉を口にする。

一部何か暴走している幼女が一人いるが、まさかこの時後に開かれるネギの歓迎会にて巻き起こる事態に繋がるとは誰も思いもしなかった。

「そこ、静かにしなさいっ！」

「「「「・・・あ、はい」「」「」

勝手に騒ぎすぎて怒られる4人。

彼女たちがシユンとする中でネギの自己紹介は順調に行われ、初日初の英語の授業の幕を開けることになった。

：追伸 ネギの自己紹介時のとびっきりの笑顔は絶対内心は怒っているに違いないと誰もが思ったのは言うまでもない。

「……で、どうしてこうなった？」

特に何事も無く終わった授業の後で急遽開かれることになったネギの歓迎会の準備を手分けして行なっていた龍宮の目の前には溢れんばかりの「人為的に穀類・豆類の種子を発芽させた新芽」・・・世間一般では「もやし」と呼ばれる存在が京都神鳴流剣士の巧みな調理によって大きめのホットプレートの上で炒められていた。その量は異常であり鉄板に乗せることができる限界の量まで迫ったほどそれはもうこんもりと盛られている。しかも、そのホットプレートから若干離れた場所にはなんとスーパの袋に入れられているものではない、誰かが育てたとしか言いようがないほどの質と量を持った同じく「もやし」が準備されていた。

「え？・・・ああ、このもやしの事か。これらは全て私とエヴァンジェリンさんその他諸々の人が栽培した物だぞ」

「いやいやいや、そういう事ではなくてな・・・何で、歓迎会だというのに当たり前のように置かれているんだ？」

「そりゃ、昨日行なったもやしの大収穫祭を祝うタイミングとして今回の歓迎会がお誂え向きだったからだろう。ちなみに企画名は『冬のもやしフェスティバルinnネギ・スプリングフィールド先生歓迎会』だ」

「・・・・・・・・どこからツツコンで良いのかわからない。というか、その・・・その他諸々とは一体誰の事なんだ具体的に教える刹那」

そう言われても・・・一から言うのが物凄く面倒くさいんだが、本  
当に言ってしまったてもいいのだろうか？

「構わん、さつさと話せ」

「ええと、クーフェイ・楓・四葉さん・那波さん・麻帆良園芸部の  
皆さん・まほらバイオサイエンス部の皆さん・麻帆良工学部の有志  
の皆さん・・・それから」

「いや、もう結構だ。それ以上聞いていたら私の理性が保てなくな  
る」

「あと、麻帆良学園生徒会（中・高）も協力していな」

「やあめえろおー！ー！ー！ー！ー！！これ以上もやしで麻帆良を侵  
略するんじゃないやあああああああ！！！」

絶叫と共に頭を抱え苦しみ始めた龍宮。

今の彼女からは普段のクールっぷりは消え失せ、逆に泣き叫ぶ幼児  
の如き幼さが人目をはばかることなく現れている。

「泣け！喚け！そして

バストを寄越せ！！！」

「もーむーなー！！！」

とまあ、幼児退行を引き起こしかけている龍宮のことはさておき意



外にも協力的な・・・というより、ブームを作り出した張本人がいる生徒会に関して私はエヴァンジェリンさんと話をすることにした。

「しかし、改めて考えると意外だったな・・・あの年中鞭を持っていると噂の生徒会長がこのもやし栽培ブームの火付け役になるなんて」

「そうですね・・・こちら側の関係者でもないのに学園にかなりの影響力を持っているあの可愛いものには目がない彼女がよもや関わってくるとは思いませんでした」

「!?!?・・・ちよつと待て、あのサディステックな生徒会長が可愛いもの好きだと？聞いたことないぞ!?!?」

「噂には流れていませんよ、残念ながら。事実、その事実を知ったのはブームが巻き起こる前・・・とある用事でウルスラの校舎へと私が訪れた時でした」

「・・・詳しく聞かせろ」

「去年の学園祭の打ち合わせで雪広さんの補佐に私になったじゃないですか。あの時企画書を偶然私が渡すことになりましたですね、生徒会室を訪れたんですよ」

「ほう・・・で?」

「そしたら・・・彼女、下級生を愛でていたんですよ。こつ、ナデナデと」

例えるなら、動物の扱いに長けているムツゴ　ウさんみたいな撫で方をしていたなあ。

「だ、誰をなんだ？」

「園芸部のマスコット……と言えばわかりますか？」

「ああー、彼女かー」

彼女とは園芸部のマスコット兼副部長こと通称やよさんのことである。

小柄の体型ながらも彼女は一生懸命に野菜を育て上げ麻帆良の学食に貢献しているわけだが、その日彼女は私よりも先に生徒会室を訪れていて栽培用の土地の拡張を願っていたそうなのだ。

「生徒会長はただでさえ怖いと有名でしたからやよさん当初は怯えていたそうで、生徒会長に何かされないかビクビクしていたらしいです」

「別の意味で確かにされたな……それで、願い出はどうなつたんだ？」

「後から聞いた話では即OKだったそうですね。もやしを使った料理も振舞われたのがさらに決め手だったようです」

これがもやしブーム誕生秘話のあらましとなる。  
断じて、私がきっかけを作ったとかではないのでその辺のところあ  
しからずだ。

『あ、ネギ先生来たよっ!!』

『ホントだ！フェイト先生もいるよ!!』

『早く早く、ネギ先生達!!』

『え、おわっ、ちょっと待ってください』

「「「「「ようこそー！？ネギ先生&フェイト先生ー！！！」」

『ふえ!?!』

『おやおや・・・凄い歓迎だね』

適当に雑談していたら今回の歓迎会の主役がご登場なさっていた。  
・いかにいかに、早急に第一弾のもやしを調理し終えなければ!!  
より意気込んで調理に取り掛かることにした私は何処からともなく  
特製ソースを取り出しプレートの中のもやしへとこれでもかとかけ

ていく。

その間にもクラスメイトは主役たる二人にさっそくコミュニケーションをとっていた。

「あ、あのーネギ先生ー、これ先程のお礼の図書券です・・・どうぞ受け取ってください」

「あ、いえ・・・ただ本を運ぶのを手伝っただけですけど、その・・・ありがたく頂戴いたしますね」

「・・・まあ、いつの間にか付けられていた手すりのおかげで大事には至らなくて良かったよ。これで手すりがなかったら本屋ちゃん、確実に階段から落ちて重傷を負っていたよ？」

「明日菜さんもありがとうございます・・・わざわざ本を持っていただいて」

「ボクはネギを歓迎会に呼ぶついでだったし別にお礼を言わなくてもいいよ。それよりもこれからは一人であんな大量に本を運ばないよう気を付けてね」

「は、はい・・・気を付けましゅー!!」

・・・あ、もしかして私の作った手すり役立ったのか!!

前から危なっかしいなと思って手すりとスロープを付けてみたわけだけど、知らぬ間にクラスメイトを救うのに役立って良かったなあ。

てへへ・・・

「先生、私からもコレを差し上げますわ」

「これは・・・フィギュアですか？随分と聞いていたものより小さいですが」

「ああ、コレはねん いろぶちと言いまして巷で結構人気のフィギュアの一つなんです」

「というか、委員長・・・何時の間に作った？まさか発注したとかじゃないだろーな」

「ええ、発注しましたとも長谷川さん。残念ながら本日はコレしか用意できませんでしたがこれから随時バリエーションを取り揃えていく予定です」

「・・・なんとという金の無駄使い」

シヨタコンと影で噂されていた委員長さんはすっかり萌え産業にご執着のようです。

一応、シヨタとかロリって需要はあるからいいんだけど流石に部屋中年下キャラの壁紙やらクッションやら抱き枕やシーツは正直言ってやりすぎです。ネギ先生を絶対にその世界へと引き込まないてくださいいね？

「はっ！？私は今まで何を……………」

しばらく間をあけて椅子に座ったまま微動だにしなかったようやく龍宮が正気に戻った。……まったく世話のかかるなホント。

「起きたか龍宮、さっそくだがもやしをプレートにどんどん追加してくれないか？第一弾がもうすぐなくなりそうなんだ」

「あ、ああ、わかった」

大きめのザルに入れられたもやしを手に取りプレートへ掴んでは入れ掴んでは入れる龍宮。

夜の仕事を共にする間柄もあって彼女と私の息はピッタリであり一切の無駄がなくまさに完璧なコンビ

「……って、おいっ！！何であれだけあったもやしがもう既に消えているんだ！？おかしいだろう！！」

「イーエ、ナニモオカシクハアーリマセーン」

「真面目に答えろっ！！」

「嫌だ」

「何で！？」



「何処ぞの村の惨劇みたいな笑い方するなっ！！」

仕方ない、手っ取り早く龍宮に真実を伝えるとしようか。これ以上騒いだら周りに迷惑がかかるしなあ。

「とまあ茶番はさて置き龍宮、何故最初炒めていたもやしがなくなつたかだつたな。理由を教えよう」

「・・・最初からちゃんと話せ馬鹿、時間を無駄に使つたぞ」

「べ、別にアンタのために話すんじゃないんだからねっ！！・・・  
・・・アレを見る」

「はあ？アレって・・・ネギ先生？」

> i 3 2 9 4 3 — 3 0 0 6 <

私が指さした先にはこちらに背を向けてお嬢様たちと談笑しているネギ先生の姿があつた。

見たところ特におかしな点は見られないのだが彼女が左手に持っている紙皿にはなんと・・・こんもりと盛られた特製ソーステイストのもやし炒めが存在しており、自然な動きで箸を動かし彼女は口へもやしを運んでいた。



「はむっ・・・もきゅっもきゅっもきゅっもきゅっ・・・お  
いし〜ですね〜」

「食べてる姿・・・かわええなあ〜」

「いかん、また鼻血が・・・」

「何回出してるんだよ、エヴァンジェリンさん（さり気なくティッ  
シュを差し出す明日菜）」

実に微笑ましいこの光景を見て私はとても満足なわけだが、龍宮は  
というと

真っ白に燃え尽きていた。

「ハハハ・・・嘘だと言ってよ、コウキ・・・」

ネギ先生は絶対にもやしなど食べないと信じて疑わなかった龍宮は  
初日にしてその熱い期待を裏切られショックのあまり、私の知らない  
い男の名前を呟き始めていた・・・これはマズイな。

故に私は応急処置の行動へと移るため、テーブルにどういうことが  
置いてあった赤い液体の入ったビンを握り蓋を緩める。

「・・・龍宮」

「んあ？」

そして、中の液体を一気に龍宮の口へと強制的に流し込んだ！！

「んんーっ!？」

「あーんどっ!!このもやし、手向けと受け取れーーーーー  
|!?!?!」

加熱したが味付けがまだなもやしを箸で取れるだけ取ると口一杯に詰め込みまくる。

さらに、吐き出すことがないよう頭と顎をしっかりを抑えよく噛ませ味わわせると見る見るうちに彼女の顔は生気を感じられない表情から熟れたトマトの如く赤い肌を持ち合わせた驚愕の表情へと変貌を遂げた。

ゆらりとよるめきながらもそんな状態で彼女は立ち上がり言う。

「刹那・・・」

「・・・何だ？」

「やらないか!？」

.....。

.....。

.....。

ゴスッ!!ドカッ!!

「へぶっ!？」

とりあえず、殴って気絶させておこう。発情顔が見るに耐えなかったほど気持ちが悪かったし。

結局、龍宮は歓迎会が終わる十分前まで起きることはなかった。

追伸：半魔族は辛いものを摂取しすぎると発情するらしいです。

s i d e o u t

超 s i d e

皆でどんちゃん騒ぎをしたネギとフェイトの歓迎会を終え、寮に戻る  
ことなく工学部の自室へと引きこもった超は僅かに明かりが灯っ  
ている部屋の中で一人濃緑色のソファーへと腰を下ろす。  
力なく身を任せ、柔らかな感触を感じつつ瞳を閉じる超。彼女は数

十秒ほどそうした後に戻るで深呼吸をするが如く深い溜息をついた。

「・・・・・・・・・・はあ」

今の彼女の表情はいつもの天才中学生としての自信ある顔から一変して悩める少女の顔へと変貌を遂げており、周りに彼女を知る者がいたのなら必ず声をかけて事情を問うていたであろうほど酷かった。だがしかし、彼女の悩みの種となる原因は例え説明したとしても受け入れることが出来ず理解できない内容だ。故に彼女は自らの心にしまい込みただ一人悩み続けることしかできない。

「出鼻をくじかれるとはこういう事力・・・できるのならこんな痛みを味わいたくなかったネ」

ネギという自分にとってご先祖様に当たる存在との初めての邂逅を心待ちにしていた彼女は、自身が知り得ていたアドバンテージとなる未来の知識が一瞬にして役に立たなくなったことにショックを受けていた。

今日一日はその動揺を何とか隠し通せたものの、これからこの調子で行けるかと言われれば答えは間違いなく否だ。少なからずとも彼女の今後の行動には影響を与えるであろう。

本来の、彼女の知る「父親譲りの容姿と魔力が特徴的な男の子」なネギあったのならはこのような気持ちにならずに済んだのだが残念ながら本日初めて邂逅したネギ・スプリングフィールドは真正正銘の「女の子」であった。

さらにそれに付け加えて、「母親譲りの容姿と魔力が特徴的」なのである。明らかに自分の知る未来へと繋がっているように思えなかった。

「・・・時間を越えたつもりが、こんな奇妙な世界線に行き着くとは予想外にも程があるヨ」

直ぐにでも心が折れてしまいそんな顔をしているというのに、絶望せず前向きに思考を続ける超は何時の間にか流れ出していた涙に気付くことなく現状の状況整理を開始する。  
無理をしているようにも見受けられるが、そうでもしていなければ彼女は自分を維持することなどできはしなかった。

「ご先祖様の容姿云々はもういいとして、問題は・・・何故こんな初期段階からあの男がいるネ？」

最終的にはネギの仲間になったとはいえ、ファーストコンタクトは記録によれば京都での修学旅行中だったはずだ。なのに、この世界のネギに兄と慕われている上に学園長や紅き翼のメンバーだった高畑先生が特に警戒していないとは何が何でもおかしすぎる。

大戦中もしくは大戦後に完全なる世界を裏切って紅き翼側についたなどという記録もないとなると・・・地道に事情を調べていくしかなさそうだ。同時にどれだけ自分の知っている未来とこの世界に差異があるかを確認しなければならぬ。でなければ下手に行動がでないからだ。（そもそも計画を実行に移せるかも定かではない）

「まったく、『プロフェッサー教授』の考察通りになってしまつとは私もまだまだ  
という事力……」

時間を越えてくる前に協力してくれた自身の敬愛する科学者の男の  
異名を口にし、自らの未熟っぷりを認識する超。

彼女は彼がいなければこうして冷静に考えていることもできはし  
なかつただろう、と少しでも運が良かったとポジティブに考えた。

そして忘れられない彼との日々を超は久々に振りかえり、思考の海  
へと身を落とす。

それは時を遡ること数年前、魔法世界が崩壊し火星に残  
された人間と地球で生まれ育った人間が未だに戦いを続けていた通  
称『第二次火星戦役』真つ只中の頃。

火星にいる人間が元を辿れば同じ星の出身だというのに異星人だと  
一方的に決めつけた愚かな地球人は交渉をろくに行いもせず宇宙  
へと進出して戦争を開始し、火星を我が物にせんと愚行を繰り返し

ていた。

物量では劣るものの火星側なんとか優れた技術で対抗し膠着状態を作り出してはいたが、結局は戦争を長引かせる形になり世の中は戦争を知らぬ子供などいない状態となっていた。

> i32875 — 3006 <

「……世界線？」

それはまだ私が麻帆良に来る前の、火星に設けられたラボでカシオペア製作中に聞いた言葉であった。

「ああ、時間逆行においてこれには気を付けなければならない。一歩間違えば我々が変わえようとしている未来は変えられなくなってしまうからな」

一向に終わる心配のない戦いを食い止める為にわざわざ火星側の方へ自作の宇宙艇で乗り込んだ教授はプロフェッサー試行錯誤した結果、最後の手段として戦争の鍵を握る超と共にタイムマシン製作を試みていたのだ。

「気を付けなければというが……何か予防策を試みることはでき



ないの力？」

「無論ない訳ではないが完璧ではない。不確定要素というモノはいつ何時起きるものかは我々には予想できないものだからな」

「結局はご先祖様と同じという事力……」

私のご先祖様は確かに魔法世界を救った英雄で、完全なる世界を打ち倒し無意味なりライトを阻止することに成功していた。

具体的な魔法世界救済案まで立ち上げてその後の未来を創ろうと模索してくれた。

だが、彼が立案した救済案はただ魔法世界の寿命を先延ばしにしただけで応急処置程度にしかならなかったのだ。

「魔法世界への魔力供給プラン」……やはり、この計画では世界を存続させるには無理があった。

「……そう不安げになるな、超鈴音。お前よりもタイムトラベルに関して【先輩】になる私が協力しているんだ、自信をもって未来を変えてこい」

「しかし、教授の時とはケースがまるで違うネ。そう何度もやり直すこともできないし、チャンスは一度きりだよ……」

彼が過去に体験したタイムマシンを巡る戦いの話は聞いていた。

幼馴染の死を回避するために時間と世界に挑み、自分を犠牲にしてまで大切な女性を守るうとした彼の知られざる物語は決して笑える

嘘っぱちのモノではなく、むしろ尊敬するに値する内容だった。

「まあ、私の時とは確かにあらゆる点（状況・タイムマシンの構造・理論に至るまで）において違うが・・・遙かに猶予があると言っても過言ではない。なにしろ、こっちはかなり限定された環境下でのいわゆるゲームの縛りプレイ状態であつたからな」

「・・・その話を改めて聞くと時間遡行から計画実行まで約2年半も時間があるのは本当に贅沢に思えるネ」

「フーハハハハハ！！違くない、私の48時間x?と比べたら遙かにマシだからな！！」

かつての戦いの思い出を回想しつつ教授は苦笑ともとれる笑いをする。

そして、冷蔵庫へと近づき中からドクターペッパーを二本取り出すと私にそのうちの一本を渡し一杯口にあおつて言った。

「そうそう、お前が過去に行く前にどうしても話しておきたいことがあつたんだ。タイムマシンとは別の話だがな」

「ん？また小話でも聞かせてくれるの力、教授？」

「いいや、期待に沿えなくて申し訳ないが今回の話は小話とは呼べるものじゃない」

勿体ぶつて向かい合うようにして教授は椅子に深く腰掛け座った。どうやらいつもしてくれる面白おかしい話とはまるで内容が違ってしまうのだ。

超は自らもドクターペッパーを口に含みながら興味津々に聞く体勢をとる。

「いつか話した世界線に関する話なんだ。それとネギ・スプリングフィールドの立場についての話でもある」

「もしかして世界線収束範囲理論アトラクタフィールドの事力？」

世界線収束範囲アトラクタフィールド・・・それは、簡潔に述べれば世界線を一本の糸で表したときの糸の基本振動の幅のことだ。当然幅には限界というモノがあり可能性の限界を指し示す。これを応用したアトラクタフィールド理論では、この幅の中で起こる事柄は多少の差はあれど確実に起こるとされている。だがしかし、世界線が変わるような事ではない場合はその限りではないという内容のものだ。

一体、その理論がご先祖様とどう関係してくるといえるのだろうか？

「そうだ・・・実は私はな、『ネギ・スプリングフィールド』という人間は後の結果はどうであれ世界を救うという立場に置かれていると考えているんだ。それも数多の可能性が存在するこの世界と似通った世界においてもな」

「・・・どうしてそう考えたネ？」

「なに、理由は簡単さ。ただの偶然で世界を揺るがすものを創り上げてしまった一般人の私や英雄の息子とはいえ当時まだ子供だったネギ・スプリングフィールドが世界を救ったなどいくら何でもおかしすぎると思っただのだ」

・・・そう、教授は一般人と子供に世界を命運を託しているような状況に疑問を持ったのだ。

まるで神のお告げに従って戦った世間から見たらごく普通の少女なジャンヌ・ダルクのように世界に突き動かされているようにしか思えないという教授の考えは私も同感である。  
しかし、解せぬことが一つだけある。

「よく、世界の修正力や抑止力など騒がれているのは知っているな？そこから考えるに私とお前のご先祖様は言うなれば抑止力的存在だったのかもしれない」

「タイムマシンが原因で起こる第三次世界大戦を確かに教授は阻止でき世界を救ったからわからないでもないが・・・ご先祖様は中途半端に魔法世界を救っているヨ、どう説明するネ？」

「役割の引き継ぎは考えられないだろうか？例えば『ネギが世界を完全に救えなければ子孫たる超がその役目を負う』などという命題が発生しているのかな」

「具体的に言うところか・・・『魔法世界が救われなかったのなら超鈴音が世界が救われるように過去を改変する』」

「もしくは未来を変えるためのファクター・・・分岐点になれとい

「う事かもしれない」

つまり、超鈴音という存在は世界にとっての保険なのかもしれないという事だ。無論、協力している教授自体も。

方法はどうかであれ、ご先祖様には魔法世界崩壊の阻止を是が非でも完璧な形で成功してもらわなければならない。

単純に口頭で伝えたとしても聞き入ってくれるかどうかは保証できないので、大胆かつインパクトのある方法でアピールし伝えなければいけない。

最悪の場合は魔法を世界中にばらす結果になるうとも。

故に自分がやるべきことはもう決まっていた。

そして、思考を現実に戻す。

「私は……ご先祖様の容姿がどうかであれ、状況がどうかであれ未来を変える役割を完遂してやるネ!!」

たとえ自分の身体を犠牲にしようともこの目的だけは必ず果たしてみせる、と遙か未来に存在し今の時間軸に恐らくはいるであろうもう一人の教授に誓うと超は彼が大好きだった飲み物であるドクターペッパーをキャップを捻って一気飲みする勢いで飲む。

独特な味を味わい、気持ちを軽く落ち着かせると部屋の隅に隠すように置かれた写真をせめて今の間だけでも目に見える場所で飾ろうと移動させると彼女の目の前には白くなった髪とひげ、さらに衛星のようなバッチが付いた白衣が特徴的な男性に並び立つまだ幼き日の自分が映り込んだ。

「だから、見守って欲しいネ・・・教授、いや・・・狂気のマッドサイエンティスト・鳳凰院凶真？」

写真の裏には彼女が今言った名とは別に、『R・O』と記されている。それこそが彼の真の名を示すもののだが敢えて彼女はあだ名とも言える名前をわざわざ言った。  
なぜならば、その名前は彼を知る人間しか知り得ない秘密の名前であり超との絆を表すものであるからだ。

「私はこの世界で頑張っていくヨ・・・だから」

『いつか、また会える日を楽しみにしているぞ・・・私の弟子、超  
鈴音よ』

忘れもしない彼が静かに微笑んで応援してくれているような気がし

た。  
だからこれからもめげずに活動を続けようと特に意味はないけれど、  
自分にとっては魔法の言葉を呟いた。

「 エル・プサイ・コングルウ」

彼も何処かでそう呟いているに違いないと思いつつ、私は微睡の中に身を落とし眠りについた。

s i d e o u t

第十一話 匠「『MOYASHI』・・・それは、神が創り出した神秘の食べ物

今回の話のまとめ。

- ・刹那サイドから語られるネギ就任の話
- ・刹那らの壮大な龍宮いじめ
- ・超のタイムトラベル秘話（友情出演あり）

彼に関しては、発明で「オールドなニュータイプ」という老化停滞薬をつくりだして細胞劣化を防いでいるため百年経ってもだいじょーぶ！！という設定です。ですから、時系列合わなくね？とか言うのはやめてくださいませ・・・OTZ

では、久しぶりの分岐ポイント（？）

『セクストウムの性格は？』

A 『原作フェイトっぽい性格』

クールオンリーな思考回路をしているので何ら原作フェイトと変わりなし。

B 『実は恥ずかしがりやなクールビューティー』

クールなんだけれど、服を消されたりすると物凄く恥ずかしがって逃亡するような性格をしている。原作でネギに倒された時のアレを強調した感じ。内心ネギを恐れていたたりしなかったりする。

締切はは11/7まで！！



次回の『日常と非日常は紙一重、故に我は迷う』(仮)をおたのしみに…!

第十二話 日常と非日常は紙一重、故に我は迷う（前編）（前書き）

更新がかなり遅れてしまってますみませんでした！！

風邪もだいぶ治って漸く本調子になったようです。

今回は短いですが日常編ということで宜しくです。後編はやっと非日常のバトル回になりそうです。

今回は挿絵が1枚ですけど、次回は大サービスで3枚の予定です。

では、とろろー！！

## 第十二話 日常と非日常は紙一重、故に我は迷う（前編）

詠春 side

『ネギ・スプリングフィールドに関する第一次中間報告書』

サウザンドマスターの娘ことネギ・スプリングフィールドの麻帆良学園への教師就任から早数日が経ったわけであるが、特に変わった出来事というものはなかったため今回は彼女の現段階での行動等について詳しく述べさせてもらうことにする。

就任当日から見せたクラスメイトがふざけて仕掛けたトラップの回避行動そして処理から考えてある程度の武術は心得ているようだがその力量はまだ測定不能であり、今後さらなる調査が必要だと思われる。（噂によれば中国拳法を幾つか習得しているとかいないとか）また、魔法の秘匿に関しては徹底しているらしく必要最低限のことではか使用しないとのこと。恐らくその最低限というのは外敵からの自衛のことを指し、彼女自身自分が狙われていると自覚していると判断できる。

日常生活においては明日菜さんと木乃香お嬢様と共に生活することになっており、空いているロフト部分を使い仕事や就寝をはかっている。ちなみに彼女の母と義兄は一緒にいるのをなるべく避けるために最寄りの駅近くにある高級マンションの一室にて生活している

という。これに関しては賢明な判断だと言わざるおえない。一見まとまっていたほうが良さそうに思えるが彼女達の場合敵となる人間が未知数のために敢えて別々に行動したほうが得策なのである。

余談ではあるが彼女と明日菜さんは一応親戚関係にあるとのこと。形式的には伯母と姪の関係らしいが真偽は不明である。(明日菜さん側の過去が一切洗えないため)

以上が今回報告できる全てである。今後は彼女を狙う存在が動き出すと見て注意深く調査を続けて行く予定だ。

報告書作成：桜咲刹那

.....

「.....そうか、血縁関係までは話したのですか」

アリカ様が直接話したわけではなく、フェイト・グローリースター

が話したというから少し不安に思っていたのですがどうやら杞憂だったようです。今の外見ならギリギリではありますが伯母と姪という関係は通用しますし。

それとアリカ様とネギ君をあえて別居させる点は高く評価できます。出来ればアリカ様にはウエールズに滞在したままのほうがいいと思っただけでしたが、戦力的に動きが取れやすい麻帆良のほうが考えてみれば遙かに安全でしたね。あそこには魔力さえなんとかすれば最強のエヴァンジェリンにタカミチ君、自慢の弟子の刹那君にお義父さんといった強力なメンバーもいることですし。

まあ、とりあえず私は下手に動かずに彼らの地道な支援に徹しましょうか。

「ん……？追伸がありますね……」

送られてきた報告書の後ろをよく調べてみるとクリップでとめられた小さな手紙が挟み込まれていた。

報告書のようにパソコンで打ち込まれたものではなく、何やら手書きのようだが一体どんな内容が書かれているのでしょうか？

風の噂では彼女、性格が良い意味で変わったって聞いているから以前のように個人的な相談関係とかではないと思うんですが……

恐る恐るゆつくりと折り畳まれた手紙を自分に見えるように開いていくと、意外にも短い文章で

度肝を抜く内容が記されていた。

『追伸：とりあえず手っ取り早く力量を確認したいので決闘を行うと思います』

「……………え？」

「……いやいやいや、私は幻覚を見ているんだ。あの真面目な刹那君がこんな思い切った行為をいきなりするなんてするはずがないじゃないか。」

「だって、この私が愛用した夕凧を託せるほど冷静なあの刹那君だぞ？もし男なら木乃香を嫁にしても構わないと私が判断したあの刹那君がだぞ？」

「ネギ君を中心とした二代目紅き翼のメンバーとなる予定のあの……私が養父として育てたようなものである刹那君がなんだぞ！？」

「……………お、長様、どうかされたのですか！？」

「い、いや……………何でもないですから。安心してください」

気づかないうちにガタガタと全身を震わせていたことに従者の言葉

でハツと気づく詠春。

一先ず従者と自分自身を落ち着かせるために彼は湯呑に注がれたお茶を一口だけ口に含んだ。

そしてある事に気がついた。

「いつもと湯呑が違うようですがこの湯呑は……………」

「長様のお弟子の刹那が作ったものです。長様だけではなく私達の間も用意されていたので今では皆で愛用しておりますが……………見事な出来ですよ、もはやプロ並みです」

「え、ええ……………そうですね、刹那君がこれほどのモノを作り出せるとは思いもせませんでした。きっと麻帆良の陶芸部には良い師がいるのでしょね」

剣道部以外にも部活を掛け持ちしているとはやはり前よりも彼女は変化しているのですね、その点について私は感心します。

彼女をより変えてくれた名も知らぬ陶芸部の師に感謝すべくまた一口味わって飲むことにしましょう。(乾杯！)

「……………それが実はその、誠に申し上げにくいのですが長様。送られてきた湯呑や食器、花瓶等などは全て独学で作り上げた彼女の手によるものなのです」

「ブハアッ!？」

き、き、気管にお茶がつ!あと、せつかくのお茶がつ!とそんなことを考える以前に私は頭をバットで殴られたような感覚を覚えた。神鳴流剣士的に言えば零距离で百花繚乱を放たれたというような感じだ。

「か・・・完全に自作と言うわけですか!?誰の師事も受けないで単独で!！」

「は、はい、受け取った人間にはそう話していたそうです」

「何時の間に隠された才能を開花させたんだ刹那君・・・・・・・・」

呆れていいのか喜んでいいのか正直よくわかりませんよ!!

「あとその・・・先程なんですが、また刹那から荷物が送られてきてましてですね・・・・・・・・」

「・・・また陶芸品なのですか？」

「いえ、今回は流石に違いました・・・・・・・・食べ物だそうです」

従者の掛け声と共に襖が開かれると引越し用の一般的なサイズのダンボールが4箱ほど体格の良い男手によって運び込まれる。



この時点で何やら嫌な予感しかしないのだが、実際に開けてみなければ本当に予感が的中しているのかわからない。故に再び震え出した手でダンボールに貼られていたガムテープ多少ビビりながらも剥がしていくことにした。

「・・・何か飛び出してきませんかよね？」

「・・・私に聞かないでください、というか飛び出てきたとしても長様ならどうということはないでしょう？」

「・・・よく考えたらそうでしたね。大丈夫です、問題ありません」

万が一何か飛び出てきても一番（速攻性の）良い攻撃を放てばどうにでもなる。落ちて着け詠春・・・こういう時はクールに考えてクールに行動するんだ。

「では、開けますよ」

近衛詠春、開封隊は謎の多いダンボールの中身の正体をその目に焼き付けるべくこの際何の躊躇いも抱かずに前へと進み、やつこのことで全てのガムテープという高速を引き剥がすことに成功した。

そして彼らが目にしたのは  
とんでもない量の・・・

もやしだった。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………手紙入っていますよ」

「…………わかっています」

何このもやし……ちやつかり『まほらもやし』とか表記されているけどどういう事なのですか？そんなもって某有名なお菓子屋のキャラクターみたいに舌を出しているこのエヴァンジェリンや刹那君、その他もろもろの人に似ているキャラクターは何ですか？

「えーっと、『麻帆良の有志で育てた新鮮で美味しいもやしを送り



ください！！！！！」

この後、しばらく詠春はやバイ精神状態でもやしとの激闘を繰り広げていくことになった。

彼の食欲が必ず勝つと信じて……！！by天の声

s i d e o u t

明日菜 s i d e

少女、神楽坂明日菜の朝は早い。

先日まで（……）身寄りがいなかった彼女は特に日常生活のリズムを崩すことなく同室の親友、同室の教師兼姪よりも先に目を覚ましラフな格好……世間で言うジャージに身を包み込む。なるべく音をたてないように玄関から飛び出すと朝のジョギングとは言い難い速さで道を駆け抜けていった。

「……少しいつもより遅れたから駆け足で行こう」

今のスピードでも十分速いというのに彼女は満足できないのか徐々にスピードを上げてまだ人が出歩いていない住宅街を構わず突き進んでいく。それも半ばヤケクソ気味にだ。

「……やっぱり、昨日のネギとの関係を知ったのが原因なのかな？」

ヤケクソな理由としてはそれ以上の事は考えられない。何せ、行方知れずの存在も知らなかった親戚が数年越しに現れたのだ。これだけで精神的に来ないなんてことはまずありえない。

失われた自身の過去、自分を守ろうとして命を落とした名も知らぬ誰かの願いを彼女は真正面から素直に受け止めて生きていかなければならなくなっただから。

強制されるまでもなく明日菜はそれを無駄にしないために現実として受け入れることにした。

「今週の土曜の為にも身を引き締めて今日は頑張ろう」

土曜には年の離れた姉でありネギの母であるアリカという人物に会う予定なのだ。

頬を軽く叩いて気の迷いを追い出すと一直線に目的の、今の彼女の生命線を支えている一つの要素であるアルバイト先の新聞配達屋へと足を運んだ。

新聞配達を一通り終えた明日菜は急ぎ足で朝食にありつくべく行きと同じくして早々に駆け足で寮部屋へと戻り、あらかじめ用意して畳んでおいた制服を手にとりYシャツの袖に腕を通す。  
ジャージを脱ぎ捨てて下着一丁な彼女は特に恥ずかしがることもな

く一つまた一つとボタンを閉じていき目の前ある鏡でかけ間違えがないかしっかりと確認し、慣れた手つきでリボンを襟にまわし結びふと一瞬顔をしかめた。

「胸が・・・また大きくなったのか」

胸との間にある程度余裕があるジャージとは違いしっかりと肌に密着しているYシャツはまあまあ大きいと自覚していた胸が以前よりも成長していることを指し示しており少しばかりの息苦しさを明日菜に与える。

こんな状態で一日を過ごすのは御免被りたい彼女はせっかく結んだリボンをため息をつきながらも解き、もしもの時の為にと買っていた若干大きめのシャツを箆笥から取り出して一から着直した。

「あ、そうだ」

そのついでと言ってはなんであるが、先日から新たに同居人として加わった少女先生ことネギを起こすことを思いつく。

故郷での暮らしと違いベットではなく敷布団なのだからまだ慣れるには時間がかかるだろうと考えた明日菜はロフト部分から下へと僅かに垂れている金色の長髪に目を向けながらはしごを登り、そして布団にくるまって寝息と可愛らしくたてている彼女を優しく揺すった。

「朝だよ、ネギ・・・起きなよ」

「……んゝ……ふみゆう……」

「先生の君が朝寝坊はいけないと思うよ？だから起きてよ」

「んんっ……いま、おきまふうゝ」

もぞもぞと体を布団の中で動かし、やっとのことで布団の上部に手をかけたネギは寝ぼけな気味な表情で持ち上げつつ前に倒す。すると、彼女が就寝の時に着た寝巻きが明日菜の前に姿を現し一瞬にして彼女の瞳を大きく見開かせた。

「なっ、なななななななっ……！！？」

「ふわあゝ……おはよー」ぞいましゅー……明日菜さん  
「」

「……お、おはようネギ」

「どうかなしやれたんですかあー？何か、驚いた顔をしているよう  
でしゅけど……」

「い、いやそのね……ネギの寝巻きが予想していたのと違ったから驚いたんだ。てつきり普通の可愛いパジャマかネグリジエでも来ているんだと思っていたんだけど……結構大胆なんだね、  
ネギ」

「……ふえ？」



今現在のネギの格好をズバリ解説すると、俗に言う下着の上にワイシャツ状態なのだ。それと今更ではあるが13歳でこの体つきとセクシーさはまったくけしからんな、おい。朝から刺激が強すぎだよ。僕からの指摘を受けてネギは自分の今の格好を再確認し数秒の間考え込んだ後で、ようやく完全に目が覚めた様子で慌て始めた。

「え、え、えっーと！！これはそのっ、実はですね!？」

「慌てないでいいからゆっくり話して。まだ時間は一応あるにはあるから」

「は、は、はいつ!!・・・実は本当はネグリジエもパジャマも用意はしてあるのですけれども、その・・・とある理由で着るに着れなくなりました」

「へえ〜・・・で、とある理由って何？」

困り果てるネギに容赦なく質問をぶつける明日菜。彼女の表情は今、最高に明るくて内心興奮していた。

「ろ、露出度が高いんですっ!!特にネグリジエが・・・」

「まさかとは思いつけど透けていたり肌が露出する面積が大きかったりするの?」

何でそれ以外のものがないのかはさておき。

「……………はい、その通りです（対お兄さま専用の勝負下着ならぬ勝負ネグリジエだからなんて絶対に言えはしません!）」

「それで止むおえず下着の上に厚手のワイシャツを羽織ったわけか……………わからなくもないけどさ」

「けど、何ですか?」

この部屋にはもう一人ちよっと変わった同居人がいることを忘れていたね。

それもおっぱい魔人・おっぱい星人・おっぱいソムリエという巫山戯た二つ名を持つ僕の胸が成長した原因となった人物がねいるんだ……………。

ちなみに名を『近衛木乃香』というんだ。

「ネツギちゃん!」

「あ、木乃香さんおはよ

って、うわあああああああ!

「？」

声がした方向へ反射的に声をかけるネギであったのだが、その方向はというと明日菜が梯子で登ってきた下の部分からでありもう一つのロフトへ行く手段である明日菜のベットから聞こえるものではなかった。

つまり、どういうことかと言えば木乃香はろくに梯子も使わずに通常のジャンプ力だけでロフトへと乱入したのだ。・・・ネギの胸を触るたった一つの目的の為だけに。

「着地成功やねっ!!！」

「どこがですか!?!というか、いきなり馬乗りになって胸を支えにしないでくださいよ!?!」

「ええやない、細かいこと気にしないほうがええで? ほれ」

「ひにゃ!?!んあっ・・・ちよ、と止め・・・ああっ!?!」

「うち達よりも年下やのにこの胸の大きさ・・・まったくけしからんなあ!!揉みしだいたるで!?!」

「そ、そこは・・・ダメっ!!いじくら・・・ないっ、でくだしや・・・い!?!」

あ、木乃香のコンボ攻撃決まった。

胸 上半身のとある部分の先端 首筋舐め 胸、という眠気もさっぱり取れる早朝から赤面状態になる効果を持つ攻め方をいきなり初っ端からネギに行うとは木乃香は相変わらず容赦がないな・・・逆に感心しちゃうよ。

「あ、ああっ・・・あしゆなさ・・・たしゆけ、て・・・」

・・・げっ、ネギが何か虚ろな瞳をしているよ！？口の方から涎みたいの垂れてるし糸引いてるし！！

僕は長い間されてきたから耐性はあるけどやっぱり未経験者のネギには無理があっただ！！今すぐにも止めさせないと！！

ちょうど、コンボのフィニッシュとして顔を近づけていた木乃香は明日菜のファーストキスを奪った方法とまったく同じようにネギの顎に手をかけ上を向かせている。

これが決まってしまうたら流石に色々と不味いと考えた明日菜は玉砕覚悟で割り込みを決意すると、ネギの唇と接近していた木乃香の唇へと迫り

自分からキスをした。

「んんっ・・・ちゅっ・・・れろっ」

「……あふにやつ!? ……んんんっ!! ……ちゅむ」

「……うわっ、わわわわわ!？」

途中で木乃香の責めを中断されたネギは僕と木乃香のディープリキスを唾然とした表情で手で顔を覆い隠しながら見つめる。

決して目を背けることなく赤面し凝視する様子は覚めない興奮を未だに抱えたままであることを物語っていた。

「……ぶはっ」

「んーもうっ、明日菜ー邪魔せんといてーな。あともう少しでネギちゃんとキスできるところやったのに……」

頬を膨らませて抗議の言葉を口にする木乃香。

そんな彼女に対して明日菜は特に恥ずかしがる表情もなくジト目で睨みつけると冷静に受け答えした。

「勝手に僕の姪の唇を奪うんじゃないよ、まったく……ただでさえ僕のモノだって無許可で問答無用で奪ったくせに」

「ええやない、別にー。それに明日菜だって後半は乗り気やったやろ?」

「無理矢理そうさせられたんだけど!? ご丁寧に亀甲縛りまでしてきておめ……」

おかげで大浴場が暫く使えなくなったこともあるんだぞ!!

「でも、お詫びに体洗ってあげたやない」

「……あれは洗ったとは断じて言わない。人はあれを風呂遊び（大人向け）という」

終始抱きついてたよね、浴槽の中でも洗い場の中でも脱衣所でもその後のベットの中でもさ。正直、暑苦しくてたまらなかつたんだけど。

「お、お二人は……レズビアンなのですかっ!?!」

「いや、僕は断じて違っただけど。というか、明らかに僕はレズビアンの木乃香の被害者だからね?」

「レズビアンというより百合って言つて欲しいんやけど……」

「黙ってるおっぱい魔人、さっさと着替えて朝飯作れや」

「むー、明日菜のケチー!!」

結局、朝食は投稿予定時間ギリギリに食べ終えることになった。  
木乃香がやけに今日は暴走したので仕方なく僕やネギも支度を行う  
ことになったのは言うまでもなかった。

s i d e o u t

第十二話 日常と非日常は紙一重、故に我は迷う（前編）（後書き）

詠春二重の意味（？）で涙目。

あと、木乃香が完全に百合と化しました。ごめんなさい。刹那はある意味ラッキーなのか？

というか、注意書きのガールズラブがまさかここで意味を発揮するとは自分でも思っていました。

今回はバトル回でエヴァ編とネギ&刹那編を書く予定です。

いよいよネギを狙う人間の影もちらほらと出てくる時が来ました。完全なる世界も敵キャラを新たに一人加えて立ちはだかつてきます。果たしてネギの行く末はどうなるのか？

次回をお楽しみに。

それと相談ですが、戦闘面以外での魔改造キャラが増えて欲しいと送られてきたんですが、読者の方でこのキャラを改造して欲しいという希望がありましたら是非感想に明記をお願いします。



## 登場人物設定〜TURN3〜（前書き）

本編でなくて申し訳ありません。

今、鋭気執筆中なのですが体調不良とバイトのクビが堪えてやる気がガタ落ち状態なのです。

お詫びといっではなんですがキャラ紹介2にイラストを追加致しました。

## 登場人物設定〜TURN3〜

セクストウム・アーウエルンクス

> i35852 — 3006 <

フェイトの代打として起動させられた使徒で、水や氷系の魔法を得意としている。

彼女が代打とされたのはフェイトのように一般人を無傷で拘束できるためであり、彼女の上司であるエレヴェアの進言があったからだと言われている。なので、エレヴェアを敬愛しており「マスター」と普段は呼んでいる。数年もの間彼と行動を共にし訓練を積んできたので人間らしい感情を備えてはいる。

・・・実は恥ずかしがり屋だったり(？)

エレヴェア・アーウエルンクス

> i35851 — 3006 <

本来は存在しないはずの使徒である闇のアーウエルンクス。

セクストウムの上司でありデユナミスよりも手強いとされているため実質、造物主がいない完全なる世界の中で最強の存在。闇の力を自在に操り物語の後半からネギ達を翻弄することになる。複数のアーティファクトを所有しており、中でも「策士家のペルソナ」という異様なアーティファクトをよく使っている。墓所の主からは『呪われし旅人』と呼ばれている。

シエリン・O・ルーベルシア

> i36063 — 3006 <

ヘルマン編にて登場予定のオリキャラで、ネギとは違い3ヶ月遅れで麻帆良へ修行にやって来た少女。  
シスター・シャークティの補佐的仕事を任されている。敵か味方かは不明であるが、とある目的のためにネギに接触する。

登場人物設定〜TURN3〜（後書き）

正直、ネガティブな思考が抑えられなくて凹み気味です。

というか、今後更新ができるかどうかさえ不安です。

私が読者の皆さんにお願いしたいのはただ一つ……今月の14日に私が絶望することがないよう祈って欲しいです。

この日さえ乗り越えれば私はまだ小説を書いていられると思いますから……

第十三話 日常と非日常は紙一重、故に我は迷う（後編）（前書き）

気合で書き上げてみてたけれど、これからも更新できるかが不安。

神様がもしいるのなら、どうか私に希望を14日の日に与えて欲しい。

でなければ、こうして更新することもおそらくできなくなるであろうから。

では、挿絵三枚というサービスをお楽しみください。

第十三話 日常と非日常は紙一重、故に我は迷う（後編）

エヴァ side

満月ではないにしろ、私は月を見るのが好きだ。

形は日に日に変わっていくがその存在自体は変わらないところが、まるで吸血鬼になってしまった自分とそっくりに見えるだからだ。あと、親近感を覚えると言ったほうがいいのだろうか。

適当に理由を付けてワイン片手にボーツと一人で月をテラスで見上げている私であったが、ふと遙か上空から見慣れたスーツ姿の男が現れて視界に映り込んだ。

その正体は何を隠そう、一時期同級生だったこともある今では外見上おじさんな担任こと（いつかは外されるのではとは思っている）、タカミチ・T・高畑である。

もう少しだけ自分だけの時間を満喫していたかったのだけれど、何時になく真剣そうなオーラを撒き散らしているタカミチをこのまま無視してまでのんびりしたくはない。だから、本当に仕方なくテーブルに私はグラスを置き溜め息一つついてから話しかけた。

「わざわざこんな時間に何のようだ、タカミチ。せっかく人がのんびりと寛いでいたというのに」

「・・・ああ、ごめんごめん。急ぎの連絡があつたからね、下手に念話で伝えるよりかは直接言いに行った方がいいと思つてさ」

「くだらんジジイの戯言なら結構だからな、今は私の貴重な時間を邪魔されたくはないんだ」

青春という言葉は私に似合わないと思つていたのに、今ではしっかりと青春しているのだから私は。一秒たりとも無駄に過ごしたくはないんだよ。

「・・・変わったね、エヴァ。僕と同級生だつた頃とは性格が大違いじゃないか」

「まあな。あの頃は特に興味のあるモノがなかつたし第一、茶々丸がいなかつた」

「あー・・・そういえばそうだつたね。彼女がいなかつた当時はかなり君がやぐされていたよね、よく覚えているよ」

まともに会話をしていたのはお前ぐらいだつたな、タカミチ。

あの頃は本当に孤独感に苛まれていて自暴自棄になつていたような気がする。そもそも、帰宅しても話す相手が全然いないし迎え入れていくれる存在すらいなかったからとても寂しかったな。

魔力が抑制されているもんでチャチャゼロは別荘でないとろくに動かないし喋らないし・・・ああ、思い出すだけで悲しくなつてきた。

「で、途中完全に引きこもりと化したこともあったよね？警備も殆ど出なくなっけ。結局何やってたのかは知らなかったけれど……」

「ん？ ああ、あの頃か。あの頃は確か……確か……」

「確か？」

「……一人虚しく手当たりしだいに時間を潰せそうなゲームをやっていたような気がする」

もちろん徹夜はしていない、ただでさえ体が10歳並みなんだから無理は出来ないしな。

特にマオは熱中した。流石名作中の名作、この私が自然とはまり込んでしまったほどだ。

「科学技術の進歩って凄いやな……600年前と比べて遙かに生活を楽しくさせてくれるし」

「達観した顔で言われても……まあ、君の子供の頃と比べてたら今はホントやることに事欠かない時代だろうね」

「家族や親友も出来たし」

「茶々丸君と刹那君のことだね？……正直、個人的に刹那君に関しては驚きを隠せないんだけど」



ま、最初は犬猿的とは言い過ぎだがあまり仲は良くなかったしな。驚くのは無理ないだろう。

詠春は実に良い感じに刹那を変えてくれたから感謝しているぞ。(実際のところ、あそこまで変わるとは考えていなかったが)

「話がそれていたな・・・それで、急ぎの連絡とは一体何だ？」

「あ、そうだったそうだった。　　　　　　実はネギ君に関する事  
　　なんだけれど・・・」

・・・フン、どうせそんな事だろうと思ったよ。でなければ、私に  
　　伝えに来る訳がないからな。

ナギの娘、ネギ・スプリングフィールド・・・あの小娘関連  
　　で私が関わるとすれば現状として一つしかないしな。

「ジジイの事だ、下手に手出しをするなと伝えるように言われたん  
　　だろう？」

「話が早いね、まったく・・・その通りだよ。万が一のことがあれ  
　　ば彼女も君も立場が危つくなるだろうからね」

タカミチが危惧しているのは私がナギの娘を襲うことで発生する可能性のある第三者による別の襲撃だ。小娘のナギ関連以外の正体を知る者は少ないだろうが、知っている者は必ずこの麻帆良に存在しているだろう。

故に修業中に襲撃する存在がいたとしてもおかしくはないし、私が登校地獄という襲う動機が十分な点に漬け込んで最終的に私に全ての罪を擦り付けようとする輩もいるはずだ。

この点を踏まえて私が最優先に取るべき行動は単純すぎるかもしれないが下手に関わらないといった選択である。つまり、お互いの安全のためにもこのまま生徒と先生という関係を暫く続けていけばいいわけだ。

> i 3 3 2 5 8 — 3 0 0 6 <

「呪いは解きたいが余計なトラブルに巻き込まれるのは勘弁願いたいからな、元よりそのつもりだよ。……余談だが解呪だけなら様子を見て正々堂々と話し合いを持ち掛けるのも良いかもしれないな、タイミングが肝心だが」

「別に君がそれでいいのなら構わないけどさ、くれぐれも用心してくれよ?」

「フン、無論だ」

素直に納得してやるとタカミチはホッと息をついて安心する。……こいつ、本当はXX歳なのに三十路超のオーラを出すとは苦労して

いるんだなあ。

一瞬同情してしまいそうになった私だったが、ふと校舎のある方角から何かと何かがぶつかり合っているような音が聞こえ顔をその方向へと振り向かず。

また、瞬時に視力を上げて遠く離れた場所の光景を瞳にしつかり映すと・・・映り込んだ二つの人影を見て思わず口をニヤリと上向きに歪ませた。

「だがな、タカミチ・・・盲点だったな」

「へっ？どうしたんだい急に・・・」

「私は一襲わないと確かに今決めた（・・・）  
が・・・もう既に小娘に戦いを挑んでいる奴がいるみたいだぞ？」

「な、何だって！？一体誰がネギ君と戦っているんだ！？」

「ハッ、襲うのではなくて勝負を挑たたかんでいるんだ。そうとなれば仕掛かけけそうな奴はお前と私の知る限り一人しかいないじゃないか・・・」

刹那だよ」

エヴァの目線の先では二つの稲妻が舞うように飛び交ってはぶつかり合い、周囲をチカチカと使えなくなった電灯のごとく照らし続けていた。

s i d e o u t

ネギ s i d e

時は遡ること数時間前、エヴァがまだネギと刹那が戦ってすらいなかった頃。

職員室での仕事に慣れ始め、パソコンでのプリント製作に勤しんでいたネギはブツブツと目の前のディスプレイに映る無数の文章とに

らめっこし唸っていた。

何を隠そう彼女が現在格闘しているのは今度の授業で使う予定の英語のプリントであり、如何に簡単に理解してもらおうかと必死に考えているのだ。

何せ、彼女が受け持つクラスにはバカレンジャーという恥ずかしい二つ名を持つ生徒が存在しており、ネギの伯母にあたる明日菜までもがその中に含まれている。ここで彼女が頑張らなくては何時までも伯母にバカの烙印が押されたままになるため、より一層にわかりやすさを追求しなければならぬのである。

「……んー、ここはやっぱり選択肢の問題の方がいいですかね？」

彼女は普段はかけることがない眼鏡をいじりつつ、フェイトが入れてくれたコーヒー（まだお子様なのでミルク入り）を片手に問題の細かい点を修正していく。

そう、全ては受け持ったクラスの生徒のために……。

「ええと、訳は……」そんなことより土郎、お腹が空きました。

「ご飯の準備をよろしくお願いします」でOKっと」

あまり慣れていないというのに器用な手つきでキーボードを叩くとネギは一先ず完成したプリントを再確認し上書き保存を実行する。そして、そつと息をつくとまた一口コーヒーを含みのほんとした明るい表情へと顔を変化させた。

「ふう〜・・・終わりました」

「お疲れ様、ネギ。コーヒーのお代わりはいるかい？」

「あ、お兄さま・・・ありがとうございます」

最愛の兄による気遣いにもますます笑顔になるネギ。

眼鏡を外し机に置いて立ち上がった彼女は喜んでマグカップを差し出した。

「仕事の方はどうかな、まだ数日しか経っていないけど少しは慣れた？」

「はい、何とか・・・ですがやはり、この歳で人にモノを教えるとなると学力だけではなく色々と覚悟がいりますね」

教える相手は年が近いとはいえ、自分よりも年上だ。

出来るだけ丁寧な対応で接しなければ要らぬ誤解が生まれてしまいトラブルが乱発してしまうことだろう。

いくら大学レベルの頭脳を自分もつていようとこれだけは気を付けなければいけないのだ。

「・・・だろうね。君が学生として通うことになっていたのなら考えなくても良かった問題だったんだけど、こればかりは本当にごめん」

「いえいえ、お兄さまが謝る必要はありません！！自分で承知の上  
に決めたことですから責任をちゃんと持ってやらせていただきます  
っ……！」

第一、教師でなければお兄さまと一緒にいる時間が極端に減ってし  
まいますしね！！

鼻息を荒くして彼女は意気込んでそう宣言した。

「そ、そう？ならいいんだけど……（何か妙に気合入って  
いるな）」

ネギのやる気に満ちた顔に驚きを隠せないフェイト。そんな彼のこ  
とはさておき彼女は別の話を切り出した。

「……ところでお兄さま、一つお聞きしたいことがあるのですが  
よろしいでしょうか？クラス名簿を見て少し気になった点があった  
ので」

「クラス名簿？……確か沢山細かい書き込みが入っていたと思う  
けど、それ関係かい？」

「はい、あのご丁寧に生徒の所属等の詳細が書かれている内容につ  
いてですね。本当は一つでなくもっと知りたいことがあるのですが、  
今はある一人の生徒の情報を手に入れたいのです」

「一人か・・・(闇の福音のことなのかな?)、その生徒の名前は？」

「桜咲刹那さんという方です。名前の下にあの神鳴流と書かれていますので」

神鳴流、それはかつて自分の父と共に活動していたサムライマスターこと近衛詠春(元・青山詠春)様を長としている関西呪術協会の技術だ。

本来はここ麻帆良学園こと関東魔法協会での使い手を見ることはないはずなのに(長同士は仲が良いらしいが組織としては対立しているから)、何故自分のクラスに彼女は在籍しているのだろうか?別に私は彼女に敵対心を持っているわけではない、ただ純粹にどういふ事情でいるのかを知りたいのだ。

「ああ、彼女ね・・・それなら事情を知っているよ。彼女は君と一緒に住んでいる近衛さんの護衛をしているんだ。西の長の娘にして東の長である学園長の孫である近衛さんのね」

あゝ・・・そうだったんですか。

木乃香さんと学園長が孫と祖父の関係であるのは初日に理解していましたが、あのサムライマスターの娘さんでしたとは思いませんでした。なるほどなるほど。

「それで何で近衛さんが麻帆良にいるかというと、京都の方の学校へ普通に通わせるのは向こうの過激派勢力にとって色んな意味で好



都合になってしまっからなんだ」

「近くにいますと木乃香さんが人質に取られやすいですもんね。長がそれで交代させられたら不味いですし」

「だから、敢えて敵対勢力であるここ麻帆良に（悪い言い方だが人質として）送り込んで信頼できる者に守らせるといいう形をとって過激派の魔の手から遠ざけたのさ」

ちなみに神鳴流出身者は桜咲さん一人ではないという。同じ教員の葛葉刀子先生もそうなんだとか。

一先ず、現時点で聞きたいことはとりあえず聞けたのでお礼を言つて頭を下げた。

「でも意外だね、てつきり君の父親と関わりを持つ彼女の事エヴァンジェリンを聞いてくると思っていたんだけど、まさか桜咲さんの事とは・・・何か彼女とあったのかい？」

「い、いえ・・・特にはありません。純粹かたに西の方が東にいるのが気になっただけですでお気になさらないでくださいお兄さま」

「あ、そう？ならいいんだけど・・・おっと、もうこんな時間か。ごめん、これから会議があるから」

腕時計の時刻を確認した彼はこの後の予定を思い出したようだ。簡単に机の上の書類を一纏めにし、脇に挟み込むとフェイトは職員室を駆け足で出ていった。

「……いつてらっしゃいませ、お兄さま」

フェイトが出ていくまで笑顔のまま手を振り見送っていたネギは小さく声を漏らす。

そして再び自分の席に座りパソコンのデスクトップのメールのアイコンをクリックすると、プリントを製作している途中で突然届いたある一通のメールに目を留めた。

その内容はというと

『拝啓 ネギ・スプリングフィールド様

あなたの父の盟友である関西呪術協会の長から言伝を預かっておりますので、本日の夜に本校舎屋上にてお会いしたいのですがよろしいでしょうか？

なお、邪魔が入るとこちらとしても不都合なのでお越しの際には何時でも戦える状態でお越しく下さい。お待ちしております。

桜咲刹那』

といった、簡潔に要件を伝える呼び出し文だった。

日が暮れてあつという間に辺りが暗くなった後、夕食を手短に済ませたネギは明日菜の勉強を手伝いつつ深夜の学校へと向かう準備を整えると二人が寝静まった頃を見計らって女子寮の外へと飛び出した。

服装は普段とあまり変わらないというかぶつちやけ私服なのだが、

念の為に武装してくるようにとお願いされているので首には父から譲り受けた杖を小型に封印し持ち運びしやすくしたネックレスを、懐と腰にはフェイトとの仮契約の証であるパクティオーカードとアンティーク物の魔法具を幾つか装備している。

彼女が用意しているものは全て攻撃することを考慮にいれており、防御面に関しては兄直伝の曼荼羅魔力障壁を効率よく使えば大抵の攻撃なら心配は要らないと判断し重視していないのがよくわかった。

「・・・一応は武装を整えてみましたが、出来れば使うことがないように願いたいですね」

溜息まじりにそう呟き、外灯の明かりを頼りに校舎へと辿り着く。

既に校舎内は一部（学園長室など）を除いて電気は消えているため真っ暗だ。あらかじめ持ってきていた手のひらサイズの懐中電灯を片手に最終的に屋上へと続く階段を一段また一段と登る。

すると、屋上への入口があるフロアの壁に何やら古めかしい字が書かれている縦長の小さな紙が貼られていた。

「これは気を使って張られた結界ですか。効果は広範囲に向けての認識阻害・・・桜咲さんが張ったものようですね」

彼女も話し合いを邪魔されたくないようで念入りに対策を取っているようだ。

警戒の具合から今回の話し合いの中身が重要な内容である事が自然と伝わってくる。

約束の時刻までまだ時間はあるのだが、その気合の入りように礼儀として答えるためにも屋上のドアのノブを右手で掴んで捻り前へと押し出した。

開かれたドアの先にはフェンスから校舎の下を見下ろしている月明かりに照らされた刹那の姿が見えた。

「　　こんばんわ桜咲さん、寒い中お待たせしてしまって申し訳ありません」

音を立てぬよう静かにドアを閉めて彼女の下へと歩み寄り挨拶をするネギ。そんな彼女の声に答えるように刹那は後ろを振り返り返事をした。

「　　いえこちらこそ、こんな寒い中に呼び出してしまいました本当に申し訳ありませんでした先生」

「　　気にしていませんから大丈夫ですよ。それよりも木乃香さんの護衛時間を私との話の為に割いてしまいすみません」

「　　！！・・・ご存知でしたか、私が西からこの麻帆良学園に来ている理由を」

「　　はい、お兄さまから詳しい話は聞かせていただきました・・・西の方も色々複雑な状況なんです」

ある意味、木乃香さんと私は似た者同士なのかもしれない。（状況

的に)

ただし、趣味嗜好はまったくもって別だけど。(主に百合)

「ええ、麻帆良に侵入しようとしてくる輩の大半はお嬢様を狙う西の過激派だったりするので警備の時はいつも困っています」

「桜咲さんの立場も複雑なものでしょう、あちらから見たら裏切り者扱いでしょうから」

「本当にその通りです・・・長からの依頼とはいえ同じ神鳴流を相手にするのは良い気がしませんよ」

実際、同期の仲間と戦う破目になったこともあったという。知らない人間と戦うより遥かに精神的に堪えるだろう。

「でも、お嬢様が何も知らず笑顔のままですらっしやるならその程度の苦痛は構わないんです。金銭での報酬は警備をしている以上貰ってはいますが私にとって一番の報酬はお嬢様の笑顔なんですから」

「・・・頼もしいですね(木乃香さんの笑顔の理由は知らない方がいいと思いますが)ボソッ」

「え、お嬢様の笑顔の理由が何ですか?」

しまった、うっかり口に出してしまっていた!!

「な、なななな何でもありませんよっ！！気のせいです、幻聴ですよー！！」

「・・・本当ですか、何か隠していませんか？正直に言ってしまったわねの方が後で楽ですよ」

「か、顔が近いですし顎を持ち上げないでください！！何ですか、貴女もキスしようとするんですか！？助けてーっ！！」

焦り過ぎて以前の早朝の悲劇がフラッシュバックし、言う必要のないことまで言ってしまった。

逃げるように後ずさった拳句、ドアの近くの壁へと追いやられて身体を重ね合わせるようにして迫られてしまう。

「貴女『も』？私はキスをするつもりなどありませんが・・・はて、一体何処の誰が貴女にキスしようとしたんでしょうか　　ね？」

「ひう！？」

西の長の言伝を聞きに来ただけだというのに何故自分は壁に追いやられてこんな尋問めいたことをされているのだろう。

耳に息がかかる距離で話される桜咲さんの質問に私はただ怯えることしかできない。

「正直に話してください、でない」と

ひ・ど・い・こ・と・を・し・ま・す・よ?」

耳元で一文字一文字区切つて官能的に囁かれたその言葉をきっかけに私は………思わず自己防衛を行つてしまった。

「いやあああああああああああああああああああああああ  
あつ!」

「なつ!」

首に掛けられたネックレスから突如として光が溢れ出すと、小さく  
されていた発動体の杖が見る見るうちに元の大きさへと戻り二人の  
間に割り込む。

同時にネギは薙ぎ払うが如く動きで刹那を突き飛ばし戦闘態勢をと  
った。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!! 来れ雷精風の精  
!! 雷を纏いて(クム・フルグラティオーニ) 『ちよ、ちよ、ち  
よつと待つてください!! 冗談ですから雷の暴風をいきなり放つの



はやめてください!!』…………詠唱中止」

ついカッとなつて雷の暴風を詠唱しかけてしまったが、突き飛ばされたというのに見事着地し立膝で必死に静止を願う桜咲さんの声を聞き思いとどまり詠唱を中止する。

「流石に最後のひどい云々は調子に乗って言い過ぎでした、すみません!!」

「いえ、あつ、その、こちらこそ素直に言えばいいものをいつまでも黙つて、あまつさえ雷の暴風なんて強力な魔法を行使しようとしてしまつてごめんなさい!!」

「いいえ、つい侵入者用の尋問方法を行使してしまつた私がいけないんです。というか長からの言伝を話す予定でしたのにこんな下らないことで脱線させて時間を無駄にすみませんでした」

時間?…………あ、今気づきましたけど丁度今待ち合わせの時刻ですね。ですから、今のやり取りはまあ…………雑談として受け止めていいんじゃないでしょうか?

ここから真面目に話をすればいいですし、そのキスの事は機会があればちゃんと教えてあげますしね。(多分)

改めてお互い向き直り、話し合う体勢をつくると先程までとは打って変わって二人は真面目顔で会話を始めた。

「実は私がこの麻帆良にいるのにはもう一つだけ理由があるのです。それが長の言伝の具体的内容なのですが・・・それを言う前に先生に一つ確認したいことがあります」

「何でしょうか？」

「先生ご自身が狙われている自覚があるのはわかっていますが、狙っている相手が一体何処の輩なのかを把握していますか？」

「一通りは把握していますよ。これまでに狙ってきたのはお母さまもしくはお父さま関連だということは百も承知ですし、これから狙ってくるであろう存在も既に知っています」

その存在の名を<完全なる世界>という。

かつて魔法世界を危機に陥れたテロ組織であり、元は彼女の義兄のフレイトが属していた組織だ。

彼らの本当の目的は世界の滅亡とされていたりするが真の目的は全く別物で、神に祝福されぬ魔法世界人のみの救出にあった。

「そこまで理解されているのでしたら話は早いですね。長は私にこの先編成を強いられるであろう『二代目紅き翼』に参加するように言われたのです」

「なるほど、それが『もう一つの理由』ということですか・・・」

確かに『二代目紅き翼』の編成はこの先で必ずしなければならぬことだ。

魔法世界の崩壊までのタイムリミットは刻一刻と迫っているのだから、真実を知っている私のような人間が対処しなければ大戦以上の被害が出てしまう。

これを阻止するためのチームに進んで参加してくれるのは非常にありがたいかった。

「ですが、参加する前に一つ確認したいことがあります。・・・中心人物となる先生、あなたの実力です」

刹那は背負っていた包みから詠春より託された野太刀『夕凧』を取り出し鞘から引き抜くと真正面に構え立ち上がる。

元より彼女はそのためになんざわがわがネギを外へと呼び出し武装させてきたのだ。（勿論、邪魔が入らないよう結界展開済みである）

「・・・そういう事ですか。ならばいいでしょう、こちらとしても実践経験を積みたいたいと思っていましたのでお相手いたします」

まともに戦ってくれたのは今まででお兄さまとお母さまぐらいしかいなかった。

中身は充実していたとはいえ、特定の誰かとのみ戦っていたのことに変わりなかった。

だからこそ、この麻帆良で自分が戦ったことがないタイプの人間と

戦ってみたかった。

強化魔法を発動させ、溢れんばかりの闘気をその身から出現させる。

「では」「いぢ尋常に・・・」

「勝負っ！！」

掛け声と共にお互い地を蹴り、獲物を手にしてまっすぐと向かうと  
刀と杖がぶつかり合い周囲に閃光と火花をまき散らした。

s i d e o u t

ッ、重いつ!!!

いくら気で刃を潰している状態のようにしているとはいえ、夕凧と私自身の力量には何ら変わりはないはずだ。その気になればこの状態でもいつもの仕事に支障がないくらいだ。

だというのに目の前の・・・身の丈以上の長い木製の杖を扱う少女はまるで同じ材質の武器かそれ以上の代物を扱っているように感じられるほどパワーのある攻撃を初っ端から仕掛けてきた。

噂の王家の魔力でゴリ押ししているのかと最初は思ったが、純粹な身体強化魔法のようでまだこちらの動きを探っているようにうかがえる。

> i 3 4 3 3 4 — 3 0 0 6 <

「せいつ!!!!」

「たあつ!!!!」

刀と杖・・・いや、長さから言えばネギ先生の武器はもはや槍と考えてもいい。

リーチの差から考えてこちらは圧倒的不利だが、一回一回の攻撃の速さを見ると獲物の長さが先生の杖と比べて短い私が有利・・・ここは速さを重視した短期決戦型の戦いで挑むとしよう。

「神鳴流奥義

雷鳴剣っ！！」

電気エネルギーを帯電させた斬撃をネギの攻撃を素早い動きでかわしながら叩き込む刹那。

意図的に無理な体勢を取らされたネギは避けられないと判断し杖で受け止めるはずだと読んだ彼女は、続けて気を乗せて蹴り打つ技『烈蹴斬』の構えを取り放とうとした。

だがここで、予想もしなかった動きをネギは見せた。

「取った！」

「なっ！？」

なんと、あるうことかネギは杖を右手で持つだけにして左手で夕凧の刃を恐ることなく掴んだのだ。この予想だにしない行動に刹那は目を見張った。

しかも、いつも間にやら謎の腕輪が彼女の左腕には装着されておりバチバチと電流が流れていた。

「残念ですけど、効きませんよっ！！六大開・・・頂肘っ！！」

正式名称、 六大開「頂」？打頂肘 と呼ばれる肘打ちによる体当

たりが瞬く間に容赦なく刹那の肋を粉碎すべく勢いでヒットする。

「中華拳法・・・八極拳かつ!!」

「よくご存知です　ねっ!!」

間一髪気で肋周辺を防御し難を逃れた彼女は宙返りして受身を取り着地するも、そこへまたネギの追撃が迫った。

「来れ(ケノテートス) 虚空の雷薙ぎ払え(デ・テメトー)・・・  
アストラフサト  
・・雷の斧!!!!」  
ディオス・テュコス

「!!」  
神鳴流奥義、雷光剣っ!!」

二人の放った雷撃がぶつかり合う。それもただぶつかり合うのではなく離れてはぶつかり、ぶつかっては離れていく。そのおかげで彼女達がいる場所の夜空は幻想的な雰囲気醸し出すように明るくそして美しく輝いていた。

「はあああああああああああああああああああっ!!」

「まだまだっ!!」

月の下での彼女らの過激なダンスは日付が変わるまでずっと続けられていた。

s i d e o u t

エヴァ s i d e

・・・やれやれ、せっかく決着がついたと思つて様子を見に来てみたというのに二人共気絶しているとはな。  
まあ、言いたいことは色々とあるが観戦していた私をなかなか満足させる戦いだつたぞ？

「茶々丸、二人を運んでやれ。別荘の中で十分休ませてやるといい」



「はい、マスター」

先に二人を両脇に挟んだ茶々丸だけを家へ戻らせるとエヴァンジェリンは一人、暗い夜道の中で歩いて帰った。

s i d e o u t

第十三話 日常と非日常は紙一重、故に我は迷う（後編）（後書き）

上を向いて歩きたいからアンケートします。

『フェイトガールズは何らかの形で出したほうがいい?』

A 『出す』

アリアドネー編で出すかもしれないけど出番は全体的に少ない。

B 『一部出す』

作者が一応予定しているルート。あるキャラのみ変わった出方をします。アリアドネー以外で出現。

C 『出ない』

お前らの出番ねえから!!という酷い仕打ち。ネギまファンなら出来れば選ばないでね?

締切は・・・14日の後も更新できると信じたことから16日までにしたいと思います。

では、次回もお楽しみ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3441w/>

---

災厄女王の娘～運命を宣告せし天秤～

2011年12月11日18時19分発行